

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十四年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一〇二七号



日川協加盟

No. 1027

特集 こんにちは新同人です

十二月号

第二回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第二回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者(各題二句 共選)

課題吟

「学 ぶ」

佐藤美文(大宮川柳会)
新家完司(川柳塔社)

「絵」

西出楓楽(川柳塔社)
川上大輪(川柳塔社)

雑詠

森中恵美子(番傘本社)
小島蘭幸(川柳塔社)

投句要領

規定の用紙(コピー可)または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料

一〇〇〇円(切手は不可)

投句締切

平成二十五年二月二十日(水) 消印有効

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道一四一七二〇一

川柳塔社 誌上大会係宛

TEL/FAX (〇六) 六七七九一三四九〇

賞及び発表

各題秀句に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

寒中見舞募集

○ 本誌平成25年2月号掲載
○ 締切 12月23日

川柳塔社事務所宛

平成25年 本社句会 開催日程表

会場：ホテルアウリーナ大阪

開催日	時間	会場
1月7日(月)	13:00~17:00	葛城の間(全) 3F
2月7日(木)	13:00~17:00	葛城の間(全) 3F
3月7日(木)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
4月5日(金)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
5月7日(火)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
6月7日(金)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
7月5日(金)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
8月5日(月)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
9月6日(金)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
10月12日(土)	同人総会 10:00~11:00	生駒 3F
第19回 川柳塔まつり	句会 11:00~17:00	金剛(中西)
	懇親宴 17:00~20:00	葛城(全) 3F
11月7日(木)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
12月5日(木)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F

魔法になった言葉

小 島 蘭 幸

私は川柳をはじめてもうすぐ50年になります。その間、多くの方から暖かい言葉、励ましの言葉をいただきました。いただいた言葉は、今でも魔法のように私を励ましてくれています。

どこから来たん、頑張りんさいよ

学生服で初めて大会に出席した時、やさしく声をかけて下さったのが熊谷蓮生さんです。蓮生さんは原爆の後遺症で晩年は、声がはつきりと出なくなっておられました。最後の選をされた記念句会で私が披露の代読をしたのも懐かしい思い出です。

大会にはネクタイを!!

ある大会の帰りに、こう声をかけて下さったのは田中好啓さんです。「いつ選者に指名されてもいいように大会にはネクタイをして行くように」ということでしたが、今思うとものと川柳に真剣に取り組み

なさいというメッセージだったような気も致します。

忙しい川柳ですが、楽しい川柳です

これは林荒介さんのお便りの最後にいつも書いてあった言葉です。荒介さんは川柳塔きやらぼくの会長として全国各地の大会へ瑞枝夫人と出席されておられました。そして毎年12月に開催される川柳塔きやらぼく忘年句会では、前夜祭、大会、余興、観光といつも大活躍をされていました。私は手紙を書くたびにこの言葉を思い出します。大会場の隅っこで、いつも旨そうに煙草を吸っていた荒介さん…。

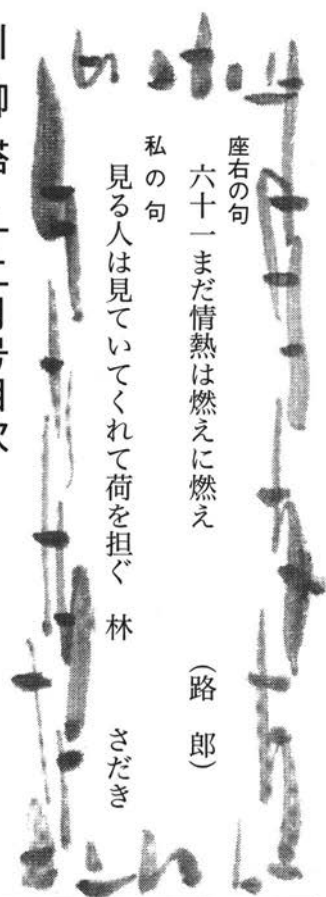
蘭幸が大阪にいればなあ!!

きやらぼく大会の前夜祭で橋高薫風先生に短冊の揮毫をお願いした事があります。その時ふつと呟かれたのがこの言葉です。あの時は全身がゾクッとする程の衝撃を受けました。川柳塔のために頑張らねばという思いが一層強くなった重い言葉でした。

ああ今日は楽しかった、川柳に遊んでもらったよ

これは大会の帰りのバスに乗る直前に、年輩の女性がふつと洩らした言葉です。

川柳って本当にいいですね。



座右の句

六十一まだ情熱は燃えに燃え

(路郎)

私の句

見る人は見ていてくれて荷を担ぐ 林

さだき

川柳塔 十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「勝 沼」

■巻頭言 魔法になった言葉

大八講座

川柳塔(同人吟)

自選集

温故知新

川柳塔の川柳讃歌⁹⁶

中島生々庵句抄

水煙抄

特集 こんにちは 新同人です

新川柳鑑賞¹⁰

英語 de Senryu¹²

誹風柳多留 一篇研究⁸⁸

愛染帖

小島 蘭 幸……(1)

古 藤 愛 子……(2)

小島 蘭 幸 選……(4)

木津 川 計……(50)

西出 楓 楽 選……(52)

麻 生 路 郎……(86)

吉村 侑久代……(87)

新家 完司 選……(90)

大八講座

古 藤 愛 子

あれは、水雨降る二月の講座でした。

講師がテープレコーダーのスイッチを入れた瞬間、ヒューズが飛び停電、温風ストープが一斉に悪臭を放ち、気分の悪い人が続出。講座が中断となるハプニングが起きました。

毎回、講座の演目は私が書いていますが、早トチリの私は、文学館と書くところを、美術館と書いてしまい直前に指摘を受け、消え入りたい心境でした。

数々のハプニングや失敗を、上塗りしながら歩んできました。

東野大八講座は父没後、平成十七年から美濃加茂市の自宅の一隅で始まり、年五回のペースで開いています。講師陣は、地域で地道に活動している人にスポットを当て、お招きしています。

その講師の交渉と、チラシの原稿作成は、くろのこうき氏です。氏は父と親交が長く、詩誌「ききりん」の主宰をされており、人脈を広く持つてみえるので、

檸檬抄「ガード」……………奥田みつ子・森山盛桜共選…(94)

民族の詩歌(7)……………三好專平…(97)

『麻生路郎読本』余滴⁽¹²⁾……………栗原道夫…(98)

「閉じる」……………大橋政良選…(102)

一路集「けじめ」……………宮崎シマ子選…(103)

「しんしん」……………吉田弘子選…(104)

せんりゅう飛行船⁽²⁴⁾……………新家完司…(105)

初歩教室「隠れる」……………前たもつ…(106)

川柳塔鑑賞……………寺川弘一…(108)

水煙抄鑑賞……………村上直樹…(110)

第27回国民文化祭・とくしま2012 入選作品……………(111)

十一月本社句会……………(112)

各地柳壇(佳句地十選／水野黒兎・安土理恵)……………(116)

十二月各地句会案内……………(132)

柳界展望……………(134)

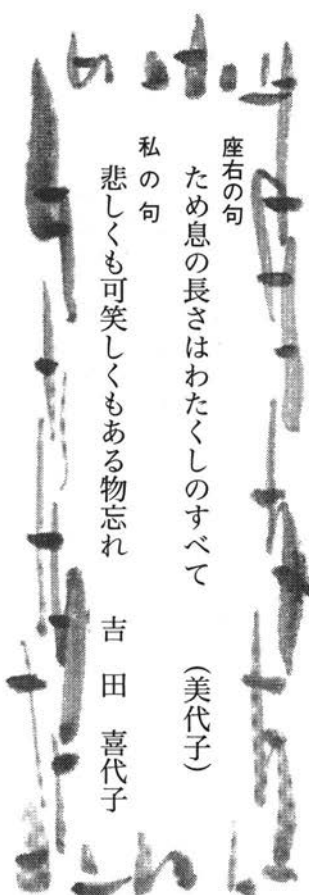
■編集後記(ひとこと／古今堂蕉子)……………朱夏・いさお…(136)

座右の句

ため息の長さはわたくしのすべて (美代子)

私の句

悲しくも可笑しくもある物忘れ 吉田 喜代子



講座の大黒柱的存在です。

チラシを千枚以上印刷し、三十ヶ所程配布し、新聞や、市報などの行事案内の欄で大八講座は、毎度おなじみとなっています。

当日の受付、ビデオ・カメラの係は身内で分担しており、友人が毎回、花を添えてくれ、会場を盛り上げてくれます。

毎回、赤字の講座ではありますが、父を顕彰していくことで、川柳ファンがふえてくれればと、気にせずやっています。

今後、やろうとしていることは、父が川柳人として生きてきた証しを、アドバイスを受けながら、小冊子にまとめ、記録を残していければと、考えています。

こうして講座を続けられるのも、友人の惜しみない協力のお陰と、家族や妹達の後押しがあったからこそと感謝しています。

これこそ父が「皆、仲良くやれよ」と我々に残してくれた遺言だったかなと、この頃しきりに思う私です。

狸からタヌキになれと教えられ

大八



小島蘭幸選

札幌市 三浦強一

善人の仮面だんだんひび割れる

八十路まだポツケ一杯好奇心

子供なき夫婦に墓が重くなる

新機種へ昭和一桁ギブアップ

鍵穴の向こうは孤独死かも知れず

一人カラオケたつぷり昭和歌い込む

三田市 堀正和

入院へ路郎読本抱いていく

手術日へきれいに洗う足の裏

車椅子病人らしい顔で乗る

難しい顔した医者がVサイン

ナースにも心美人と顔美人

長らえて身障手帳手に入れる

枚方市 伊達郁夫

音のないラジオを聴いて昼寝する

急ぐ日は急ぐ形の卵焼き

妙案がないまま爪を切っている

思うことあつて逆立ちする雀

じいちゃんと呼んでいるから俺じゃない

傷のあるリンゴが先に食べられる

松江市 石橋芳山

ムジムジュな所でグジュグジュと出合う

遠景のゆらりと揺れている記憶

ボンクラが並んで日本国政府

どうしてもラセンが絡み会うのです

瓶に穴開いて時間が垂れている

ルールなど知らずラクダの顔のまま

藤井寺市 鈴木いさお

追憶の中で育む遠い人

私の化身となつて翔べよ朱鷺

頑なな妻にフエイントかけてみる

偶数が好き半分こ出来るから

母の居間亡母の残り香探してる

豆秋のあの可笑しさは何だろう

堺市 志田千代

退屈な日に雲一つ浮いてない
出来ぬふりして父さんにももらう
熊を見るクマ先生を思い出す
子の家を廻り身の置き所知る
好きだった人この世にはおりません
天国を信じる人の穏やかさ

富田林市 中井アキ

泣きに來た海で出合ったのが始め
心配の種は育てぬよいとまけ
憧れのまんまくらくら老いてゆく
君と僕尻尾隠しているマナー
始めてのゴーヤ案外いけますね
亡母さんの笑顔に負けぬよう生きる

大阪市 谷口義

天高く女にもあるダンディズム
とり散らかしておりますがどうぞ秋
還暦も古稀も何にもしなかった
月曜から金曜までの向う脛
まだ脈があるのでドンマイドンマイ
浮雲に今年の医療明細書

河内長野市 山岡富美子

可も不可もない一日を秋刀魚焼く
先送りしては溜めてる皮下脂肪
政治とは大きい声で嘘をいう

得たものと失くしたもののやじろべえ
育メンが時代の旗を振っている
今どきの喜寿も傘寿も花盛り

京都市 高島啓子

能面で通すと水が澄んでくる
浅はかなところを隠すガムテープ
これしきのこと背面跳びで越える
良い人と言われてさむい土踏まず
仏壇のリングはジャムにしておいた
赤ちゃんに返り仏の手のひらに

和歌山市 木本朱夏

湿気た花火をすこし残して秋の風
黄泉からの便りをはこぶ彼岸花
風の音を聴きわけている秋の耳
秋の夜の雨はこころの襷に降る
猫の目がキラリ光った秋の底
モノクロに磨り減ってゆくわたしの時間

三田市 久保田千代

とんぼ採り知らぬ良い子の塾通い
あの頃の私が今に生きてきた
時々自分が嫌いになる私
鏡だけ別の私を知っている
歌うたう五感全てを目覚めさせ
物買わぬことに徹してから平和

欠点が無く殺風景な人

鳥取市 森山盛桜

人の綾ありネクタイの白と黒
博識は有るが傘から出て来ない

柱にはなれず雑木の中に居る

杵外に放り出されている持論

クレマーと言われる前に引き下がる

倉吉市 牧野芳光

間違いは間違いのまま雨の中

一直線なんと味気のないものか

美しい人に見とれて雲に乗る

昆布巻のように私を嘘で巻く

この星の真上にいつも僕がいる

良い日かも知れぬカラスに褒められる

和歌山市 牛尾緑良

再稼動目指してリハビリに励む

砂時計過去をチクチク刺しにくる

無精卵なのに期待をされている

孫というライバルが居る杖である

シナリオは誰かが書いた永田町

ティータイムちよつとワインを忍ばせて

弘前市 高瀬霜石

聞き役の方にあげたい主演賞

気がつけば隅っこにいる露天風呂

当たるのは流れ矢ばかり今日も雨

十分ともたない正座恥ずかしい
悪友ボン友全員帰宅困難者

終点まではあとどれくらいなのだろう

松山市 高橋宏臣

足音が消えるまで待つドアの鍵

偽証罪ゆつくり曲るバラの首

ひと房の葡萄てのひらの性善説

どしゃ降りの過去からやって来る追手

円周を出て矢印は霧の中

そのうちに読む本積んで秋になる

吹田市 太田昭

おはようと言える相手が側にいる

転がしてもつと優しくする言葉

仁王立ちに疲れ軸足替えてみる

領いてくれる方に向く講師

喜寿傘寿生きて自由になる素足

いつの日か背くわが子に飯を炊く

豊中市 水野黒兎

日本語のたゆたう海の広辞苑

喜寿薫風一冊だけの旅仕度

LPのイブ・モンタンを聴いて秋

信号のないふる里の彼岸花

焚火すること楽しみに帰省する

山彦と校歌を歌う廃校舎

篠山市 酒井真由

あなたの嘘がガラスを透けてくる晩夏
チワワ抱くおんな祭りの中通る

青空へ棒高跳びの躍動美

ずうーとしあわせあなたを絡めとってから

すすき原より少女ひらりと出て来たる

一切は空なりすすきの穂がなびく

鳥取県 斉尾くにこ

あきらめた夢が熟睡から覚める

暗雲が切れたら月はそこに居た

コスモスの季節を待つて登山靴

存在の遠さパンチも届かない

壁の花こっそりマーク付けておく

満潮に錆びた時間を洗われる

羽曳野市 徳山みつこ

i P 日本に元気くれました

受賞をスタートと爽やかな頭脳

まつりごと SOS を見ず聞かず

マイ年金怪しいことは何もない

連休が増えてリズムが狂い出す

氷河崩落きつと地球の叫びだろ

寝屋川市 籠島恵子

秋の日を送るコーヒー飲みながら

重ねても重ねても淡くなる齢

赤電話あると覚えた北新地

和三盆一つで和むティータイム

曼珠沙華ブレぬ生き方だと思う

夕ぐれのプロストに声をかけられる

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

会う人ごとに秋の言葉が口に出る

秋深しベストセラーの一冊と

電子レンジで匂うてくれるお芋さん

不意を衝かれて十八歳の声が出る

活気があつてせかせか歩く音も好き

相槌がほしいほしいと寄つてゆく

河内長野市 木見谷 孝代

曲線美芸術品の自家野菜

きょうだいの絆深める親介護

予定日のもういいかいにもういいよ

偉いなあ自分で自分褒める人

マネキンの服にイメージ膨らます

結び目じつと我慢の跡がある

香芝市 大内 朝子

夕焼けに明日を覗く好奇心

妹よ親の代りで居るからね

にこにこ等身大を生きて丸

辛くても笑うわたしの隠し芸

感謝する心の増えてくる豊か

夢食べてたべてもりもり生きてやる

鳥取市 倉益一 瑤

いい今を輝やくあなたとの時間
ハイと言う素直をどこか置き忘れ
いい人になり面白くなくなつた
だんだんと男になつてゆく鏡
新聞を開き唸つてばかりいる
海鳴りがする思い出のさくら貝

泉佐野市 山本蛙城

蟬が減り雀が減つた何かある
鳩尾に棲みつく老春の花火
越えて来た山河を見せる笑い皺
辰年の残夢の欠片撫でている
失くすもの無くて見上げる広い空
就活の群にも混じる博士号

西宮市 藤本直

開け放つ風も心も秋に向け
三日だけ早く死んでとこれも愛
亡父忍ぶ万年筆にある指紋
酒呑んで明日は誰に託びようか
温泉に招いた父母は老いていた
エリートの子息もいるが孤独なり

西宮市 山本義子

行きがかりで抱いた子犬のあつたかさ
とつておきのお洒落してゆく美術館
灘五郷の酒だよりつつましく待つ

吊し柿むかしわいわい作つたな
わが家風の小さい芋煮会をして
輪廻転生去りゆく雁になれたなら

芦屋市 黒田能子

力加減悟り始めた八合目
いいかげんに言つたつもりが的を射る
叩いた方の言い分も聞いてみる
雲流れ忘れたいこと忘れます
結局はわたし自身で決めること
エスカレーターエレベーターの好きな膝

松山市 宮尾みのり

後期高齢尚いとおしむ同期会
出席にマルそれからの喪の知らせ
歳月へあなたの知らぬ片乳房
欠席へ近況本音語らない
ファミレスも低カロリーが載るメニュー
猪の残りを貰う栗拾い

檀原市 安土理恵

吾亦紅好きな妹寡婦になる
いいのいいの夜が明けたら醒める恋
こつち向かせて時どき愛をたしかめる
ふり返ることふえてきて返し針
挑戦のその後誰にも明かさない
分別がついたか恋に挑めない

藤井寺市 太田 扶美代

ドキドキしたあの日の毒を探してる
目を閉じるいつかどこかでまた逢える
泣いてしまった嬉しくてホッとして
嫌いでない人と時々野良に出る
ペットシヨップあんな可愛いコは居ない
残り時間少し狂ってみようかな

西宮市 亀岡 哲子

台風も知らず昼寝のサッシ窓
デパート巡りした若い日の靴がある
頭陀袋に此の世の話詰めて逝く
ゆるゆると参ろう天寿なお遠し
九十になったらうんと派手を着る
夢繋ぐ五位へ阪神ありがとう

鳥取市 福西 茶子

六兆円アナタへ向ける銃を買う
おんなより男で生きてきた気骨
磨り減った靴にもお経上げてやる
三ツ指を突くオンナには成り切れず
バンザイ万歳コレステロール減りました
金と恋 こぼれるほどは持たぬ主義

富田林市 片岡 智恵子

自分を磨く砥石どこかへ置き忘れ
記憶の底で碎けた夢のかけらを拾う
日本人の横綱最後誰だっけ

浅く契る深く契れば重くなる
始発終着百様の人生がある
自分と向きあえばつまらぬ事と知る

八尾市 宮崎 シマ子

紅葉まんじゅう土産に買った紅葉狩り
生き生きと実りの秋を賞でる風
編上ったマフラー上げるの惜しくなり
地震予報走る力もない八十路
彼岸花亡友を慈しむように咲く
葬儀委員長用なくなった家族葬

大阪市 神夏磯 典子

コスモスになつて亡母さん探してる
猫二匹私のところをもて遊ぶ
あと少しどんでん返し来ないよう
笑いたいけれどおかしい事が無い
播鉢の底に女の嫉妬心
人生の差引ゼロも芸のうち

鳥根県 伊藤 寿美

八十歳の骨に筋交い打っている
忘れていた傘を返したいわし雲
ひらひらとわたしを埋めていく秋思
肩書のない旅に出る秋の汽車
「東野圭吾」が「宮部みゆき」になった秋
秋の階段まだ踊り場が見つからぬ

熊本県 高野宵草

白壁を染めて夕陽の未練かな
鼻唄の仕事にひよいと出た軍歌
救われた命感謝の四十年

一目を置いてる友に恵まれる
人並みに生きてく辛さ知り初める

熊本県 岩切康子

騙されて買うより選ぶ米国牛
目的の歩数至らず部屋巡る

自家産です新鮮だけを届けてる
夢実現伴う友がありがたい

だんだんと声高くなる共白髪

札幌市 小沢淳

子に夢を持てと言えない世は悲し
大切なものは見えぬとみすゞの詩
先送りこの最善の妥協癖

井戸深く掘って深層水を汲む
節電もよきかな早寝早く起き

砂川市 大橋政良

品のいい老女と歩く風の街
てっぺんで支えてくれる人が居る

前略のあとに出てくる ありがとう
虹の橋半分消えて秋の風

どう生きてゆくか孤独が深くなる

黒石市 相馬一花

告白を受ける牧師の優しい目
賑やかな笑みが零れる三世代
ご先祖をしのび仏飯欠かさない
青リンゴ食べた牧師が記事になる
はつきりと言わぬが花の宮仕え

平川市 小寺花峯

授かった足の裏ですたと拭く
誕生日一升瓶があればいい
雨の日は雨の日の色の紫陽花
まだ残暑素麺すすり生きている
定年後影が陽を見る村の役

弘前市 岡本花匠

心配を止めて持病を友に生き
紅葉狩り感動に添えきのこ鍋
笑顔して舟漕ぐ夢の日向ぼこ
如才なく時代を生きた命の炎
支え合う夫婦にきつい冬ごもり

弘前市 福士慕情

朝刊を見るのに頭痛薬がいる
四季折の津軽富士には魅せられる
テレビ観賞楽しみを消す電話ベル
口開けて栗も柰榴も老いてゆく
傷心の胸でヒューヒュー唸る風

弘前市 須郷井蛙

世直しの名人ばかり居て困る
柔らかな布団腰痛攻めてくる
古着からボクのドラマが落ちてくる
ハウスキーパー母を無料でコキ使い
断捨離が出来ぬうるさいのが一人

弘前市 稲見則彦

胃酸過多今夜も眠れない雀
ケイタイに置いてけ堀を喰われる
鬼灯を軒に吊して酒支度
口寄せにひばりも降りる恐山
千人風呂微かな期待湯気の中

弘前市 今愁女

丹念に書いて日記が備忘録
わがひと世それでいいのだとはいかぬ
愚かさは己と悟り予後を生く
現役で逝った大滝崇拜す
好奇心この世の息が切れるまで

弘前市 高橋洋子

紙一重言うは易いが厚い壁
忘れたととぼけて見るも思いやり
赤の他人妙なことから親密に
来た道の運は悔やまぬおおかさ
マネキン人形メタボもあつていいのでは

青森県 松山芳生

ためらわず描けば奇妙な輪がひとつ
取っておきの答 神からの御告げ
片肺で飛んだわたしの人生譜
一通の手紙おんなに火をつける
点滴のリズムいのちを補給する

さいたま市 星野育子

次世代に残す借金核のゴミ
国会にいつも秋風すぎま風
老人同士が譲るシルバー席
こんなにも傷付けられた星地球
自死予防青色照明とシヨパン

東京都 岸野あやめ

緊張の世界暢気な日本人
寡婦ひとり心の鍵はいいですか
嘘発見機持つてるような僕のママ
シミひとつ増えていたこと書く日記
十二月元気な曾孫ひとり増え

横浜市 菊地政勝

花好きの女房へ薔薇が愛想良い
腹割って話す相手が悪かった
鎮痛剤こころの傷は治せない
冠雪の富士がうながす冬支度
年金の視野に余所見の余裕なし

横浜市 小野 旬多留

月山の濃霧が遮断する紅葉（東北紅葉狩り）

ただ広い東京駅で目眩いする

衣料品売場でボクを替えて見る

断捨離をして無駄遣いまた増やす

閉店の花屋に思うお前もか

川崎市 三浦 きぬ

あの世にもあると信じる川柳塔

出来すぎる人で友にはむきません

まぶしいな今日の夕日は格別だ

やり直しきくなら小学一年生

昔々語り聞かせる孫も居ず

富山市 島 ひかる

蘇る記憶へ笑顔取り戻す

五十年幼き日々へ返る笑み

恩人のむすめを見舞う恩返し

懇懇と話す仕草も母譲り

天と地の恵みへ父の光る汗

静岡県 蘭田 漠 杏

鳳仙花ばかり弾けて一句かな

正直な人だほんとに嬉しそう

宅配の一言メモが心打つ

気が和む母の手紙の国訛り

不便さも昔の方が良さがある

可児市 板山 まみ子

台風で消えて無くなる旅プラン

白露過ぎまだ仕舞えない扇風機

台風がそれで満月良く光り

国産の焼肉舌に覚えさせ

露天風呂三回入り知りつくす

大山市 金子 美千代

立ったまま靴下履けてほめられる

浪花女の血が残ってるおせっかい

長生きは酷だと思ふ事もある

尊厳死頼むと子には書いておく

難病の友よ頑張れ i P S

大山市 吉田 幸子

さりげない励まし心軽くなり

何年も練習したが寝るの下手

身軽さが若さと知ったよつこらしょ

四苦八苦詰替えもまた旅気分

手間暇をかけて旨さにトライする

大山市 関本 かつ子

朝風呂に入り生活保護で食べ

人並みに押されて捜す国体旗

さつそうと眩しいほどの娘の姿勢

高齢化優先席はきつと消え

老いの坂プラス思考もひと休み

愛知県 早川 遯行

晩酌は忘れる筈のなくすり
仏壇だつて売っているリサイクルショップ
尻振つて歩くカラスを憎めない
目の下のホクロ忘れる筈はない
隅つこの隅つこにある喫煙所

京都市 三宅 満子

ビールかけ被災地思う不謹慎
物忘れいったんネジを巻き戻す
リハビリの効果手書きでお礼状
日々多忙動ける身体ありがたい
言いかけた言葉呑み込み和を保つ

京都市 藤井 文代

ストレートで真顔すぎても組みにくい
末席に慣れたら見えてくる本音
便利さで買ったパソコン脳が拒否
大津波絆の深さ刻み去る
月旅行夢の予定に入れておく

京都市 坪井 孝一

忘れてた過去が時々現われる
変り過ぎた時代を過ごす戦中派
あの声が昔の僕を包みこむ
アルバムにもう戻れないボクの顔
家系図から男の悲鳴洩れてくる

京都市 梶本 宏子

忠臣蔵観て正月の大掃除
散り際を問うてやつぱりケセラセラ
野心家が好きなレモンの丸かじり
若者が日変りで染め替える髪
目のやり場に困るよ急に増えた髪

亀岡市 井上 森生

やんちゃな孫から学ぶ元気術
勿体ないのは力をフルに使わない
たかが呼吸されど呼吸の奥の奥
夫婦ともに健康寿命は後五年
万能な細胞神の手となるか(フーベル賞)

長岡京市 山田 葉子

カード使い果しじたばた生きてゆく
背を押され踏み出す勇氣もらつて
からんだ糸ほどけないまま日が暮れる
思い込みの自縛を解いてから愉快
犬の名で声をかけ合う散歩道

大阪市 川端 一步

青鞥の命名古本で拾う
余命など知らぬ完走だけめざす
人災の瓦礫を積んで歳の暮れ
年金で貯めたお金を狙われる
家族葬終りましたの便りだけ

大阪市 吉村 一風

おしゃべりも笑顔も誘う秋の味
秋の彩浴びて子鹿とたわむれる
立秋も過ぎて熱燗いそがしい
老いてなおここ一番に耐えてます
己が非をあさり詫びるのも男

大阪市 奥村 五月

何時か来る認知を拒み五七五
雑魚なりに大魚おどかす群になる
車椅子娘を乗せて押す米寿
あの地震知っているかい渡り鳥
カタカナ語これでよいかと孫に問う

大阪市 升成 好

また一枚診察券がふえて秋
自己流でいい前向きに生きている
頑張った今日の自分に二重マル
偽らぬ愛が笑顔にあふれてる
褒められたことない妻と五十年

大阪市 津守 なぎさ

はやばやと観光すますシルバー車
虫の音にゴーヤカーテンとり除く
今日もまた天声人語書き忘れ
ボランティア参加する気の赤い羽根
病み上りグルメテレビの多いこと

大阪市 榎本 日の出

体力がないと親切続かない
じゃんじやんと喧嘩も出来るよい絆
薬よりよく効く言葉あったのだ
いい男すつと浮かんですつと消え
のんびりと心を洗う趣味の道

大阪市 榎本 舞夢

目を閉じて周囲の空気読んでいる
眼裏の母の笑顔と会話する
頼もしい孫の目線で子守する
目の手術暗闇になる恐ろしさ
来年は明るい目線希望湧く

大阪市 板東 倫子

声挙げよう〃日本男子此処にあり〃
臍を噛むあの日の東電の無能ぶり
どんぐりを求め山から熊が来る
遠雷が静かに鳴っている深夜
考えてわからぬ事は忘れよう

大阪市 井丸 昌紀

贈り主不明そーつと振ってみる
怪しいところ少しもなくて頼りない
里の秋探し昭和に迷い込む
来年をイメージできぬタイガース
コンビニが街の景色を固定する

大阪市 小谷集一

夢食べて生きてた頃が最盛期
玉手箱自慢話を詰めておく
聞えないときは微笑むだけでよい
決断ができず助走を繰り返す
輝いた日がなつかしい影法師

大阪市 中村 叡子

お向いの日除け苦瓜三階に
すつきりと断捨離出来るえらい人
台風一過十六夜の月皎皎と
沖繩に無事故を祈るオスブレイ
烏啼き蟬蟋蟀の鳴かぬ秋

大阪市 原田 すみ子

トイレの神様も褒めるほど磨く
褒められるより口惜しがられる方が好き
おぼちゃんのイメーヅ全て持ち合わす
六知れば十まで知った気分する
だからだと好きな事だけこんな日も

大阪市 熊代 菜月

親送り夫を送り荷をおろす
流れ星誰の願いを持って行く
宝だと言いたい友が一人居る
肺ガンに乳房取られた母強し
携帯の亡夫の番号まだ消せず

大阪市 小泉 ひさ乃

健康法人はそれぞれ向き不向き
仁王の頬をやさしく撫でる秋の風
経験に無駄なしいつか役に立つ
老人パワー積極的におしやれする
再会へ思い出話尽きぬ夜

大阪市 吉内 タカ子

今朝のモカ一味違う納骨日
好奇心身の丈だけの小出しする
敬老の花束届く孫やこそ
ばあちゃんも政治不安の乱れ萩
一人膳少し慣れたか友電話

大阪市 津村 志華子

世間さまの波にもまれつ来て傘寿
殿さまも食べた秋刀魚に自負がある
舶来の花も流儀に解けている
秒針は命の刻む如くなり
お迎えの準備万端出来てるが

大阪市 山崎 君子

ポインセチア嬉しそうだな主婦る
昼の風呂シャワーに美し虹見えて
高校野球すめばさびしい日曜日
娘は嬉し電話一つで帰宅する
空の青一つの雲につながれて

大阪市 古今堂 蕉子

同病に思いを分かつ友の居て

のんびりもせつかちも居て陽が落ちる

先後手生まれながらの性かもと

百人に百の物指し用意する

古希の夜明け恋のかけらが落ちてきた

大阪市 近藤 正

無駄足が無駄でなかった歳迎え

エリートへ果たせぬ夢を子に託す

ノーベル賞IPSに見る未来

ずかずかと心の奥にオスプレイ

原発ゼロこの目で見たい去年今年

大阪市 江島谷 勝弘

快感が忘れられないモンスター

金もなく普通に生きてお人好し

魚たち塩分取りすぎでないか

さあ力ニだ友の連絡待つている

溺愛と虐待子らが可哀相

大阪市 田浦 實

子は宝と詠んだ憶良は今も生き

今日一万歩いた自信明日を呼ぶ

氷金時二人で食べて仲直り

豪雨を躲し稲穂の波の棚田かな

立てた予定が未来志向にさせてくれ

大阪市 澤田 定子

凱旋將軍さながら見せるパレードや

子宝はゆるめすぎずしめすぎず

病院の朝食少々飽きました

若い娘の笑いの渦に入りたい

仕事中後輩まぶしもと職場

大阪市 笠嶋 恵美

ゴーヤひとつ実らなかつたプランター

図らずも師のそば座る心地良さ

孫らしいみやげ持参にお小遣い

五階まで老いの血吸いに蚊のあわれ

夫傘寿兄弟揃い見舞来る

大阪市 坂 裕之

残すもの無いから未練とは無縁

粹内でユーモアのある人が好き

凡人に分かる言葉で願いたい

名人の言葉遣いが先を行く

約束を守った中で遊びたい

大阪市 平嶋 美智子

迷路へとさそい込まれた始発駅

長生きの相と言われたのは二十歳

普通プラ資源ゴミ箱でんと座す

ゴミ出しを忘れた次の日のうれい

紅白の玉青空に遊ぶ日よ

大阪市 松尾柳右子

可愛いな曾孫の両手握つてる
旅プラン何着て行こう悩んでる
洗髪をしてすっきりと若返る
二人して散歩楽しい虫の声
目薬のさす時間だけ忘れない

大阪市 山本加お里

コオロギの愛のささやき抱いて寝る
始めようかけ声だけで日が暮れる
気がつけば隣の席は偉い人
生きがいは夫の笑顔見てるとき
テーブルに食後の薬おいてある

大阪市 池上清治

あの孫がいつの間にやら入社式
新式の携帯画面撫でまわし
カタログと違いすぎてたグルメ旅
年式は古いが無事故無違反車
所帯道具一式寮の友がくれ

大阪市 伏見雅明

おしゃれして病院通いしています
お互いに本音で話すダイヤ婚
線路には近く駅には遠い家
最後まで弱音吐かずに逝った父
肩書の取れた名刺にやつと慣れ

大阪市 大川桃花

宵越のトラブル持たぬ妻の知恵
三角の都会の空にまるい雲
狡いこと許すわたしもずるくなる
信楽と犬蓼月によく似合う
お手洗いくにも女誘い合い

大阪市 寺井弘子

天空に美のエッセンス虹かかる
命輝きドナーと絆結ばれる
通院の予約で埋まるカレンダー
遣伝子のせい偉いとは無縁です
正直な大人か鏡知っている

大阪市 佐藤忠昭

わが国はギリシャスペイン笑えない
物流のおかげ秋刀魚の刺身喰う
細かった頃の写真を捨てぬ妻
親族に華奢な人なし皆太い
献体に丈夫な胃袋用意する

堺市 村上玄也

謙讓語敬語混同するヤング
仲間には手を出させない鍋奉行
手伝わぬのが一番に起きてくる
充電も放電もせぬ脳となり
先頭は疲れる二番手にさがる

堺市 桑原道夫

なつかしい芸に見惚れて旅半ば
背を伸ばす旅の半ばの街角で
軽口を言い合っている旅半ば
涸れ井戸を覗いていた旅半ば
旅の字をていねいに書く旅半ば

堺市 柿花和夫

逝く時を心得ていたうちの犬
顔よりも心の手術したい鬱
真夜中のペンは本音が好きらしい
キックオフの気合でくぐる時価の店
シュレッダーにかけた未練をはり合やす

堺市 齋藤さくら

話しているうち心晴れてきた
耳澄ましコオロギの声聞いている
ばつさりと絆断ち切るのも勇氣
青汁は美味いと呪文かけている
ふる里を語れば澄んだ空浮かぶ

堺市 内藤憲彦

無人島急に日本の宝物
一步踏み出せば二歩目きつと出る
定年後趣味三昧を妻がする
楚々として多情多恨のコスモスよ
パスワード四文字までは大丈夫

堺市 遠山唯敦

原発ゼロだんだん遠くなっていく
迷いながら往く人生が面白い
強かに生きて頭はやわらかに
偶にあう孫のからだが遅しい
老いふたり足して小さな夢を追う

堺市 源田八千代

尖閣の見張り番かもオスプレイ
生きてるうちのいじめ対策急かされる
若い衆が減りだんじり祭荷が重い
接待の美人に爺も上機嫌
おひとり様や三代代向けあり御節

堺市 大隅克博

念おされ近い内にと言っておく
懐の具合で寿司屋かえている
コーヒーは朝の機嫌を知りつくす
堂々とまごまご出来る家がいい
氣持よく酔えば出てくるあの演歌

堺市 荻野象山

口に負ける女房へ晴らす五七五
蚊遣り草蚊の出る頃に枯らしてる
女癖知ってかお化け出てこない
職投げた偉いお方の恥知らず
知事になり市長になって国目指す

堺市 山本 半 錢

黒い手帳少し草臥れ秋の風
程々に空いた車内でほどけてる
長袖に入れ替える頃食すすむ
憧れのイメージある日音を立て
微笑してドレス一際華やかに

堺市 矢倉 五月

取り立てて語る事ない日の寝つき
致死量のほどを知つてて猪口をおく
休肝日増やす夫に添うている
一筆箋言いたい事は書いている
曇天の味老いの日々穏やかに

堺市 大久保 のん子

影を恋う涙でにじむ古手紙
うるむ目で亡き人偲ぶ窓に月
車椅子介護の汗の温かさ
胸底に夢のかけらを温める
万物の差別はつけぬ陽の恵み

堺市 加島 由一

二人しか知らぬ互いのいいところ
天照卑弥呼おんなは強いなあ
携帯を忘れ君の名はの世界
湯豆腐を君とつつける温い冬
年賀状竹馬の友は孫を抱く

堺市 奥 時雄

青バトで回ると広いご町内
名刺無いから名刺など欲しくない
運動会ビリの孫からVサイン
生い立ちを知つて切ない「みすゞの詩」
ゴルフしたあくる日ごろ寝して過ごす

堺市 西村 りつえ

花より実望みはでかく手を広げ
ブラックコーヒ後姿は隙だらけ
急いでも脳細胞が昼寝する
ハスキーも喉を痛めて鬱となり
逝くまでにお金を使う勇ましき

堺市 澤井 敏治

悲しみを練つたら苦い胃の薬
三猿へ咳とくしやみの自己主張
ただ歩くひたすら歩く今日あした
魂を第九を歌い解き放つ
雪だるまおしやべりになる雪の夜

池田市 栗田 久子

あんぱいもあんじょうもある地の言葉
豊作と聞いたみかんの淡い味
砂浜にわたしひとりの影法師
消せぬ汚点神の許しはどのあたり
こがらしに変わる気配の風の音

和泉市 横山捷也

河内長野市 村上直樹

一杯と決めた訳など聞かないで
髪形を変えて秋風首で知る

陽炎の燃えた自分史夏の恋
恋人を待つ心地してあらばしり

作務衣着てようやく本音喋りだす
紐の端握つてたのは妻だった

気の回る孫に節酒を命じられ
平凡という最高の人生譜

もう泣くなもつと泣きたい時が来る

駆け抜けた道しみじみと喜寿の酒

茨木市 島田誠一

河内長野市 黒岩靖博

反省はだまつて妻にビール注ぐ
すんなりと粹な別れにした諭吉

箸置いて別腹ですと甘いもの
屋台骨ひっくり返す三代目

崩れゆく日本語今日も撒くテレビ
大河ドラマ経済効果まで背負い

銀からは近くて遠い金メダル
狭くても一家団欒ある暮らし

民衆は偉い一揆にもなれる

老いの坂感じぬように四股を踏む

大阪狭山市 矢野 梓

河内長野市 梶原弘光

栗ご飯秋の香りを噛み締める
秋空に夜具ほんのりと陽の匂い

怒つて妻に滑舌ままならず
空耳も適度に和えて老い二人

ことごとと自己主張する豆の煮え
息抜きのコーヒー夫よく喋り

妻と子の電話おおよそ察し付く
身の程を測るメジャーが伸び縮み

終活にたんと言うときありがとう

身から出た錆も一緒に日向ぼこ

交野市 森本弘風

河内長野市 松岡 篤

卓袱台で親父と聞いた真珠湾
貯金するクセが抜けない戦前派

菜園は孫が欲しがらる物ばかり
後悔は軽い気持ちの捨て台詞

文庫本一冊読めた待ち時間
香典拝辞気楽に行けるお葬式

悪役も楽屋で会えば好々爺
突然の電話にスーッ冷まされて

老人の日も頭を下げて酒頼む

調理器具チンとレシビがあれば良い

河内長野市 山室光弘

法螺を吹く元氣と色氣残す老い
赤信号ともる日本に見えぬ明日
妻病んで主婦の偉大さ思い知る
生き様は案山子のような無器用さ
辛辣が虫も殺さぬ顔で出る

河内長野市 谷 久美子

夫の留守義母と鮎屋で鉢合せ
弱点を隠す仮面は付けたまま
我武者羅に生きて儚なく散る命
生き様は陽炎すべて夢の夢
雨を呼ぶ薄むらさきの月あかり

河内長野市 植村喜代

どの国にいても太陽は同じ
とし共に側に物置く癖が付く
電話出来る友達また一人減り
満天の星幼い夜が眼裏に(戦前の堺 2句)
眼裏に今も消えない星一ぱい

岸和田市 岩佐ダン吉

運などと汗流さずに言うてはる
日記には手強い僕が棲んでいる
口下手な僕が一番好きになる
井戸掘った人を忘れていませんか
三食を食べ困ることありますか

岸和田市 堤 楷代

穏やかに暮したいので知らぬ顔
友達の愚痴聞いてるだけで疲れはて
しんどいが口紅引いて杖と出る
お布団をすっぽりかぶる秋が来た
ショッピング楽しいはずがああしんど

岸和田市 森元 ふみよ

断捨離と誰が言うのか罰当り
六〇年前には無かったイジメなど
冷やかに見ているだけのUSA
有事には関係ないと議員殿
自衛隊世界に吠えろ正義軍

四條畷市 吉岡 修

ゆつたりと大仏殿に香が満つ
お座りにお手ばかりさせなにも出ぬ
したいこと金がブレーキかけてくる
時々遠吠えしてるまだ未練
ご近所の得体さっぱりわからない

吹田市 山本 希久子

一日の終り漫画を読む時間
こつそりと夫のネジを巻いている
カメラアングル横顔は隙だらけ
旅の靴ちよつと日常捨てに行く
ケイタイ持たぬ病院行かぬのも勇気

吹田市 須磨活恵

グーチョキパー何を出してもいつも負け

まあいいか貧乏くじも時の運

陽は昇る金があるうが無からうが

千羽づる千の祈りを折り畳む

産れたよ嬉しい知らせ初曾孫

吹田市 木下敏子

知り過ぎたとんぼ指には止まらない

美しい夢見て赤くなるりんご

大往生したくて医者にかからない

うかうかと七十路坂を越えた足

美しい汗に実った米貰う

吹田市 瀬戸まさよ

鬼平のファンあなたも私も

絆から解き放されてこの空虚

葬式と介護の話盛り上がる

精いっぱい羽根広げたい定年後

結婚に夢が持てずに今独り

吹田市 大谷篤子

ウォーキング角を曲れば萩の道

乾杯のグラスの中に小宇宙

お祭がすんだ里から秋の風

生まじめを捨てて生きるの楽になる

大阪弁理解できない友ができ

吹田市 野下之男

大国がちつぽけな島で恨み節

知るほどに煮ても焼いても食えぬ国

危ないぞ見切りも早い永田町

八十路来て夢に出るのは幼稚園

妻からもたまにはパパと呼ばれたい

高石市 浅野房子

金の世に金では癒えぬ傷もある

老いぼれて行くのは私だけじゃない

ひと手間を省いて旨くない料理

お名前は出てこないけど元気かな

偏屈が向うから来た回れ右

高槻市 片山かずお

こんな手もあるぞと裏口へまわる

手加減が下手で上手に負けられぬ

ひたむきの愛を重いと躲される

人生の読点打てと古希になる

爺むさくならぬようにとヒゲを剃る

高槻市 初代正彦

信じてはいるが代理を用意する

勇気出し開かずの扉あけてみる

逆風を無理して行かず小休止

神様に分別求め手を合わす

酔うほどにだんだん変わる声の色

高槻市 島田千鶴子

点滴に繋がれ命みつめてる
ペダル踏む足軽やかに草もみじ
水中花季節の移り知りもせず
修整液考え直すチャンスくれ
思い込みすぎて転んでばかりいる

高槻市 安田忠子

曼珠沙華お墓の前で泣きました
医療費が嬉し恥かし一割に
眼科歯科点滴をして飛び跳ねる
読書会話弾んでオスブレイ
朗らかに一人旅する車椅子

高槻市 井上照子

平和ほど心安らぐものはない
ひたむきに生きているのに重い税
ポイントですき焼きにする卑しいか
日記帳もつといいこと書きたいが
世界地図色の変わらぬこと祈る

高槻市 佐甲昭二

正直に打ち明け絆無事つなぐ
駅前の景色を変えたビルラッシュ
鏡から急ぐ野心を見抜かれる
さりげない小道具役者弾ませる
ポケットにそつと切り札うずくまる

高槻市 富田保子

やわらかい笑みがエールになる介護
もう買わぬ決めて半額また誘う
病む友が大丈夫かと気を使う
出世など諦め家族見えてきた
渋滞のずっと向こうに母が待つ

高槻市 富田美義

平和への迷路ギリギリの頓死
もう少し生きてみろよと言う絆
譲れない処に男のくさび打つ
任すこと省き重荷を負い続け
噂にも下げる頭が軽すぎる

高槻市 左右田泰雄

むずかしいクイズ優しい顔で解く
口惜しい未練の風の吹きだまり
止めとこか跳ばか思案の水溜り
サングラスかけると目立つ泣きぼくろ
太つてもいいから食べることにする

高槻市 峯村勲弘

秋冷の候汗を拭き拭き書く手紙
朝ドラに巣立ちの頃の原風景
いじめにも耐えた勇気で今生きる
髭を剃り今日のやる気を確かめる
内視鏡画像素直に視る勇氣

豊中市 江見見清

寝屋川市 富山ルイ子

集うこと減つてちよつぱり広い家

猛暑日の街で氷の字が威張る

夏バテに効いた女房の家出

お見せすると割れるわたしの宝石

空を切る快感覚えていたバット

豊中市 松村里江

やわらかい野菜たつぷり介護妻

場違いの椅子にビリビリする空気

髪洗う未練は泡と消えました

これ以上深追いせずにおさえとこ

連れの無き道の遠さよたそがれる

豊中市 松尾美智代

疲れとるつもりの旅がくたくたに

夏と冬の隙間に秋がかくれんぼ

朝歩き二年続いてほめてやる

すこしやさしい季節はすぐに通過する

秋祭りだんじり引いて孫が来る

豊中市 藤井則彦

診察券増えるたんびに出る元氣

限界をプラス思考が突き破る

厳かにひたすら化粧する車中

上司より部下にはもつと教えられ

油ぎった顔に滲んでいる五欲

人知れぬ苦しみ胸に抱いたまま

ひどい仕打ちを受ける優しきそのせいか

次の世も女がいいと友は言う

同居して二十年腰落ち着かす

iPS細胞テレビ見飽きない

寝屋川市 森茜

夕映えに満たされた日のこころの記

きりぎりす寡黙な冬を信じない

言いすぎてとぼとぼ秋の日溜りに

ぼろぼろの辞書と6Bねんごろに

丁重に勧誘ことわるドアチェーン

寝屋川市 平松かすみ

五十五年添うてこれからが勝負

一服を教えてくれる膝頭

朝刊を二時間かけて読んだ頃

もうサバは読めぬと鏡言うてくれ

祖母乗せて安全運転してくれる

寝屋川市 山本三郎

何もかも忘れて今は仏顔

ラッシュ時を避けてゆつくり乗る電車

徘徊の母を探しに出る夜半

糸口も見えぬ反日デモの列

同窓会アルバム囲み姦しい

寝屋川市 森 田 麗

掌の葉減らした今朝の水
神だのみ神在月の出雲まで
スクラップブック亡夫の青春甲子園
一人居は雪平で足る母の味
月給日父を尊敬した記憶

羽曳野市 三 好 専 平

島ひとつまみにならない国と国
忘れまじ地球の中は燃えている
一步こそ命の糧やさるすべり
ウソというペールをはぐとみんなバカ
維新とはいつのことかと孫が問い

羽曳野市 永 田 章 司

釣書にスリーサイズも書いてある
先人の知恵白黒付けず先送り
鏡にはおやじの顔が写ってる
金で買う幸せ何か不満足
ダンスの日妻はうきうき家を出る

羽曳野市 宇 都 宮 ちづる

いやな過去忘れたらしい認知症
生きたいと始めて思う手術前
金魚の死悲しんだ夜の焼魚
句想するのに右脳だけ残してる
イケメンが居るから通う美容室

羽曳野市 吉 村 久仁雄

目に山河口に地酒の汽車の旅
おばちゃんに飴と元氣をもらう街
空元氣だろうと明日はきつと晴れ
涙腺のゆるみ隠せぬ歳になる
松茸を省いて旬のものが好き

羽曳野市 安芸田 泰 子

裏切らぬ背中と信じてい行く
ぴつたりだが予算が合わぬ試着室
年相応と言う見立ては氣に入らぬ
一合の米が今日の命の音で煮え
台風がさらって行つたお月様

東大阪市 佐々木 満 作

葛藤を重ねて太くなる絆
変わらない原風景の故郷がある
紙一重これも運命だと思ふ
罪ひとつお天道様は許さない
悔しさをワイングラスに溶かし込む

東大阪市 北 村 賢 子

朝夕の冷えへ野良猫久しぶり
仏壇へ合わす掌今日もありがとう
ドクターと一言交わし初診料
出発も帰宅も賑わしいスズメ
この歳へ生きて胸張り古稀と言う

東大阪市 米田水昇

薔薇が好き心はいつもばら色に
女です八十路へ化粧爪染めて
萩すすき揺れて浄土の夢結ぶ
命とは思議なものよ生死あり
友は皆次々と逝き淋しい日々

枚方市 二宮山久

妻の留守一味ちがう塩コショウ
クラシック聞いて乾杯妻の酌
名月にただ立ち尽くし観るばかり
妻の愚痴右から左へ聞き上手
コスモスにスキが招くハイキング

枚方市 丹後屋肇

チビタ鉛筆狙いをつける路郎賞
絶滅の剥製恨みがましい目
人混みが好きな重度の車椅子
百円シヨップ駆けずり廻る予算額
富士山を背負う月見草の自負

枚方市 安達忠央

ねたきりの妻ヘナイトキャップのプレゼント
笑顔にはどんな帽子も似合ってた
冗談を言い合ううちに本音洩れ
煩惱は大事残り火まだ消さず
半分は寝ていたらしい昼の寄席

枚方市 二宮紫鳳

お裾分け届いて嬉しい栗ごはん
テープ切る孫の笑顔にVサイン
運動会孫をビデオに筋肉痛
口笛も鼻歌も出るツーリング
万歩計孫と合わせて一万歩

枚方市 寺川弘一

男はおんな女おとこの話題から
かすり傷だがバンドエイドで誇示をする
憎しみを終着駅にしてならぬ
日の丸揚がる日本人ならジンとくる
一番長いスカイツリーの大黒柱

枚方市 海老池洋

雨降って地固まるという和解
大部屋の隅にも柵檀の双葉
百体地藏みな温顔をしておいで
本心を真綿に包む京ことば
座標軸移しみてみる幸福度

藤井寺市 高田美代子

薔薇の刺魚の小骨も避けて生き
探偵ごっこ面白くはないか
蝉 蜻蛉 蟋蟀 順番に消えた
だんじりの音跳ね返る秋の天
追い越してライバルの影待っている

藤井寺市 伊藤 アヤ子

イメージでなめたらあかんいい人よ

亡父母を炬燵囲んで語り合う

ビルの角で耳をすませば虫の声

語りつく湖底にねむる古里を

お化粧はしていないけどその笑顔

藤井寺市 若松 雅枝

台風の向った先に孫がいる

台風で一日遅れの月を見る

じいちゃんが語り始めた敗戦記

飼犬と絆深める散歩道

産土に収穫祝う獅子の舞

藤井寺市 増井 ヨシ枝

夕明り亡父をのせてオニヤンマ

赤い糸何度も結びなおし古希

金太郎飴そんなお方と五十年

本バラリ眼鏡をかけたまま眠り

携帯を忘れて逝つてそのまんま

藤井寺市 吉田 喜代子

夏野菜私の庭にありがとう

七回忌墨絵のような万徳寺（若狭小浜）

墓の花鹿が狙っているらしい

おいつこも小遣いくれる年になり

大滝秀治黄泉でもファン待っている

藤井寺市 俣野 登志子

同窓会去年の服がばれている

後よろしくと先に逝けたら楽だろうな

昨夜の無様一週間の禁酒とす

今しかない抑えた色の赤を着る

心ここに在らずサッカーに夢中

箕面市 出口 セツ子

母が逝く現実感の無いままに

逝く前の夜に亡父と母の夢

終着駅見えて人生愛惜しい

天国か地獄か分らない恐怖

父母の死で楽な死に方考える

八尾市 高杉 千歩

十三回忌指折っている十二月

オスプレイ綱渡り見るように

コスモスをバックに少し若返る

ノンアルコール三次会でもっている

アンダーライン謎が解けないまま暮れる

八尾市 寺川 はじむ

トラの鏡兄貴を秋が連れていく

縄のれん老いの若さをおだて合う

念のため手摺りを持って入る風呂

旅せがまれて近いうちにと言うておく

ごめんねはいつもメールに任してる

八尾市 中岡 妙

良い人も波長合わねば通り過ぎ
平和です人間らしくある限り
母の日から敬老になるのし袋
ふるさとを唄えば胸があたたかい
向つ腹治める石も落ちてない

八尾市 村上 ミツ子

運動会今日の主役はお日さまだ
はじめしつかりつけて振り返らない
出る杭も出すぎるともう打たれない
いくらあつたらお金持ちだと言えますか
だめな時ほどいい顔をしていよう

八尾市 内海 幸生

読めるのに書けない文字がまた一つ
補聴器で聞ける俸せふしあわせ
呑めぬ身にノンアルコールビールなど
痛みだし薬が効いていたと知る
病院の待合室で知る甘え

大阪府 米澤 淑子

イゴガール増えて基会所花咲かり
天敵は私の中にいるワタシ
コスモスに芯の強さを見習おう
まだ主婦出来るしあわせに感謝する
ノーベル賞やつぱり日本素晴らしい

大阪府 杉山 隆盛

連休の暦しげしげ老いぼつん
何を掴んでなにを逃がした手を睨む
両頭の握手に違う温度の差
席ゆずる仕草一つに愛がある
年越しのそばにあの日の祈りのせ

大阪府 桑田 ゆきの

過去未来しみじみ語る夜長の灯
銀芒深山の風をたおやかに
水澄んでおかげの井戸に顔映す
通夜の座へ纏うコオロギ鳴き続け
再びの花野を巡る車椅子

神戸市 山口 光久

自分史に修正液が滲んでる
ブーメランのような毎日父の靴
ピンピンコロリそんな奥義があるならば
名利を巡り功德を積む余生
咽がる日本料理は目が食べる

神戸市 山口 美穂

風もないのに秋明菊が揺れている
遠慮なく長寿お祝頂くわ
病院と仲良しだからまあ元氣
噂話に乗りそうになり一呼吸
行間が読めないんですかすみ草

神戸市 木村 貴代子
転ばない無理をしないで何をしよう

東北で散財が夢今シブチン
今よりも若い日はない飛んでみる
木犀に招かれこんな遠くまで
一日にひとつ挑戦病み上り

神戸市 伊勢田 毅

再建策語り虎キチ夜が更ける
手さぐりで絆を探す拉致の闇
地球滅亡予定日神が知っている
鞭打ち症妻の予感が当たる雨
大臣になると古傷暴かれる

神戸市 山崎 武彦

煮ごりにお袋の味詰まつてる
無味無臭安全牌のわたしです
予定表の余白に明日の夢がある
予定では確と抱き合う筈でした
素っぴんに朝の鏡は後退り

神戸市 井上 じろう

すすきの穂もしもから今ケセラセラ
かの人につもる思いの窓の雪
追いかけて追つてとどかぬ夢の中
痛いってそれは生きてる証です
しょうもないこと言うてんと早しいな

神戸市 山田 婦美子
若い日のあなたイケメンだったかも
若さとはいいね蟋蟀徹夜する
目覚めてもまだ鳴きやまぬ虫の声
涼風に空元氣出す老いの骨
飽食の時代に飢餓と言う言葉

神戸市 白川 淑子
あかんとこいつばい見付け好きになる
十五日ぼつぼつ孫がやって来る
笑わないで私未だに揺れてます
味のある人に出会った回り道
風の野に私を拾う五七五

相生市 中塚 礎石
長生きで使つてみせる貯めた金
戦争を繕うているテレビ見る
平凡に生きて僕には上の上
家系図が家を残して消えていく
あと二行小さな文字で書く葉書

明石市 糀谷 和郎
泥舟と知つて乗り込む時もある
イメージのできぬ政治に持てぬ夢
臆病を脱する呪文探してる
自慢する話の輪からそつと抜け
早や起きて母はみんなのネジを捲く

職退いて句会ばかりのスケジュール
市 坪 武 臣

計画も予定も立ててややこしい
自慢話を酒のつまみにクラス会
健診で疲れた喉に生ビール
付合いに広がりが出て増す祝儀

尼崎市 林 昭 三

前列に着席しない眠る癖
残りもの福あり姉が嫁ぎ笑む
気配りは黄色い声と立ち話
婆ちゃんの話し相手に聞き役で
まだ未熟大風呂敷の後始末

尼崎市 山 田 耕 治

美容院へ息子がついて来てくれる
ベテランと呼ばれうれしいこともなし
童話読むばあちゃん寝たらあきません
派手かしらいい夫がVサイン
笑っている写真よい人だと思う

尼崎市 軸 丸 勝 巳

棚上げの棚が崩れて揺れる島
巡視船鯨に負けぬ潮を吹き
騒がしい海だ魚もお引越し
年金がまだ生きてるか聞いてくる
捨てられぬ一緒に汗をかいたシャツ

予定組む自分の余力はかりかね
寝そびれてつらつら昔恋う枕
今夜のテレビで山のいで湯を訪うつもり
対岸の花火せない夜にする
塩麴いつてんばりになるレシピ

尼崎市 長 浜 美 籠

快調な一日を知る鍋つかみ
ルームメートにしている猫のカレンダー
わが街はポプラ並木から秋に
スクランブルエッグ箸先が鈍る
左奥歯食い縛る癖あるらしい

加西市 金 川 宣 子

チャレンジの心なくせば老いが来る
メタボ腹味覚の秋はご用心
キッチンで喜ぶ顔を作り出す
縄のれん社長と呼ばれもう一杯
夫から先にと頼むポックリ寺

川西市 西 内 朋 月

独酌で月がなくても月見酒
焼香が続いて悲しみも続く
言い訳もせずに笑っているばかり
自治会の会長選挙せず決まる
渋柿も酒を飲ませば赤くなる

川西市 米原雪子

秋だ秋スポーツ誘うメール来る
プレー中ボツリ仲間のユーモア
物好きと言われながらも尚進む
連休の留守番役は庭いじり
日記帳開けば過去が目につぶ

三田市 尾崎一子

団らんで子供のころ抱きしめる
偉そうなふりしてみたい反抗期
ドキドキする恋かも知れぬ風がふく
どん底を知った涙にある絆
いつの間に子等が手をひく背中押す

三田市 福田好文

古傷がじんわり痛む明日は雨
渋滞で気づく道路の脇のごみ
目覚ましのいらぬ自由が老いを呼ぶ
二三日お留守しますと猫の恋
飲みすぎの付けはきつちり朝に来る

三田市 北野哲男

里の秋唱歌に残っている故郷
時どきはB面見せている人気
脈計るナースの指にある昔
お齡ですどうやら癌でないらしい
妻居てこそその亭主関白

三田市 田中章子

認知度のテスト多少はひつかかる
クラス会むかしのいじめ謝った
平和だな妻が予定をたてるから
街中に餌付をされた熊がくる
道草が育ててくれた好奇心

三田市 石原歳子

扇風機しまい我が家も萩の花
余所見した隙に夕日が沈んでた
ごみ出し日人柄わかるごみ袋
要領が悪く近道など出来ぬ
それだけの話へ友と喫茶店

三田市 上垣キヨミ

百年の歴史駅舎の色直し
パソコンに遺す家族へ感謝状
スーパリーの野菜匂いを置き忘れ
一本の葦の意見が通らない
アンパンを食べると昭和史が戻る

西宮市 片山忠

孤独より孤立の恐さ知っている
何もかも見せていないと落ち着かぬ
あほな事言うて嫁にも注いでやる
遊び人だから女を飽かさない
弱虫と女に顔を抓られる

西宮市 緒方 美津子

来客のあつて片づく家の中
居待月飲むと一人人恋し
カレンダーついに赤丸通院日
式服を脱いでほうじ茶飲んでます
痴漢も石ころもこわい夜の道

西宮市 牧 渕 富喜子

熱いお茶暑い時こそいい薬
どっこいしょ六根清浄どっこいしょ
あれほどの夏もお彼岸には勝てぬ
今だけを生きてたような今日でした
テレビには言いたいことを言っている

西宮市 吉 井 菜々子

萩すすぎマナーモードになる姿勢
秋はもうわたし好みの趣きで
アナファイラキシーショックも覚悟してお蕎麦
ストレスを昇華している梔子蕎麦
五センチのヒールじゃわたし気取れない

西宮市 足 立 茂

家事なんかしてないでしよう長い爪
就職難の足を引っ張る新技術
料亭のゴミでメタボになるカラス
ゼロひとつ見落したまま並ぶレジ
作句より酒がはかどる秋の夜

西宮市 秋 元 てる

ペランダの花から夢の種を採る
雲流る去り行くものは皆いとし
雲掴むような話も若い酒
墓詣り亡友そっくりと擦れ違ふ
今一つ心に響く歌聞けぬ

西脇市 七反田 順子

くり返し童話を耳によい寝息
幸せな色に染まつた娘がひとり
娘と巡るふくよかな日の美術館
姉妹五人えーとえーとの歳になり
草刈機響く公園赤トンボ

姫路市 古 川 奮 水

旧友を集めてくれた秋祭
鉢植は珍異か白い曼珠沙華
妥協して祭の風は暖かい
馬関着き絹代みずぐの話題きく
打ち水の庭が迎えた旅の宿

奈良市 辻内 げんえい

尖閣竹島北方皆日本
辞めてから多趣味の敵といい仲間
字が下手で筆まめという得意技
治ったかまた頓服を飲み忘れ
満員電車スズムシ鳴かす粹な人

奈良市 阿部 紀子

延暦寺土間から読経湧き上がる
芭蕉の記孤独に耐えて澄む俳句
病院は洒落たばあちゃん競い合い
苦勞した従妹のピュアなデスマスク
古希過ぎて電光石火もう師走

奈良市 米田 恭昌

楽隠居とは落語の中の話だけ
肩叩く孫の拳がこたえ出す
四面楚歌ケセラセラで夜が白む
暗い紙面にノーベル賞が灯を点す
祝杯に妻も少しはいけるうち

奈良市 加門 萌子

鷹揚にかまえる我が国の自負か
沈滞の日本にパツといひニュース
次世代を担う子等にも希望沸く
歳ふればミステリアスが增えてくる
歳ふれば心の友は少しでいい

奈良市 大久保 眞澄

やめなさいほらオバチャンがにらんでる
寝ることも体力仕事午前五時
うわさ一巡尾鰭背鰭で重くなる
まあまあだと思う夫も年金も
割勘でおまけに下戸は運転手

奈良市 岩本 浩二

混浴が足湯だったと山笑う
ちよつかいを出して骨までしゃぶられる
葉の数を競い合つて同期会
猫舌のパパも熱燗なら平気
この国の未来が読めぬ恐ろしさ

生駒市 飛永 ふりこ

スカイツリー80秒で宙散歩
寅さんの笑みが染み入る雷門
写経からいらだち抜けて無に出合う
見るたびにモネの睡蓮風雅なり
スニーカー明日への虹を秋の天

橿原市 居谷 真理子

ひとたまのきやべつきざんでまだ憎い
朱の糸があげられぬように紐を組む
白という冷たい色を着て嫁ぐ
罪ですか蛇に生まれてきたことは
歩いて走つてもどうせびしょぬれ

大和郡山市 坊農 柳弘

釣瓶落とし冬の誘いの吊るし柿
待つことに馴れた女のルミナリエ
成せば成る骨折り損と言われても
手の届くところに冬を遊ばせて
人間百態喜怒哀楽のリトマス紙

奈良県 渡辺富子

開発と保存卑弥呼の里揺れる
鈴振れば神がにつこり立ち上がる
地酒酌みふる里自慢まだ続く
逆境にもきつと宿っているチャンス
妻だけのエールを受けて奮い立つ

和歌山市 土屋起世子

朝が来た只嬉しくて紅をさす
叩かれて軌道走って来た私
おしゃべりな母に生まれて無口です
娘炊く味は格別栗ごはん
倅せな日日で曾孫抱いている

和歌山市 堀富美子

ひと色を足して私の今日終る
ポリウムを上げ台風の恐さ消す
四捨五入私の余生軽くする
若さなお自負した朝の鏡掛け
栗御飯友の温さも味に沁む

和歌山市 喜田准一

宝くじ買って一杯ちから水
成り行きに任せて今日も花と風
想い出を手繰り切らない夜となる
初めての愚痴聞かされて親密度
敵味方入り乱れてのティータイム

和歌山市 古久保和子

金木犀の角を曲がつて逢いに行く
空き室有ります木枯らし吹き抜ける
老眼鏡に代えて小骨を取る話
ハイカラなレシビに無縁サンマ焼く
耳朶は母と同じ柔らかさ

和歌山市 坂部紀久子

白を重ねていくと私の色になる
一人だから肩怒らせて暮しする
暑くも寒くもない束の間の旅仕度
あの方が逝って時効となった恋
スポーツマンすかつとしてる受け答

和歌山市 武本碧

口笛を吹いて宥める腹の虫
敬老席恥ずかしくない歳になり
ころころと転げた先にある居場所
ふところが浅くて愛がこぼれ落ち
過去未来どうあろうとも今が旬

和歌山市 松尾和香

脱皮して夫婦の絆強くする
喋っている時が華だとティータイム
毎日の予定にわたし生かされる
母の偉さやつと解って孫を抱く
健康美取得のひとつ旅つづく

和歌山市 柏原夕胡

秋桜が揺れてこころの澄んでくる
手を伸べて君の温もり確かめる
がんばっている高齢の電気器具
上も下も見えない私の現在地
懸命に役立つことを考える

和歌山市 松原寿子

素のままで逢います般を取り除き
残り毛糸で感謝の心込めておく
没であろうとなおアクセルを踏み続け
治る見込みないが励ます日々である
杭いっぽん打たれて予定狂わされ

和歌山市 福本英子

一つ覚え二つ忘れるのが特技
胸騒ぎ置き場所変えただけでした
美食した付けを秋風連れてくる
加減せず生きた証が足にくる
がき大将なくなりいじめ深刻に

和歌山市 福井菜摘

力むのは止そう人生長い旅
大輪を咲かす努力は惜しまない
明日がまた来るさと笑顔たやさない
言葉では伝え切れずに抱きしめる
さつそうと歩こう目線少しあげ

和歌山市 玉置当代

生きるためしつかり食べてよく喋る
お隣の雨戸が開いた生きている
食欲の秋を競って医者通い
嫁った子がふつくら肥えて里帰り
大事なことを小さく書いたコマーシャル

和歌山市 岩本美智子

リリリンリン残暑きびしゅうございます
啓蟄に虫は日傘をさして出る
雲の上うさぎ駆けっこする月見
胸を圧す痛みに心いためてる
わたしにも文字くださいね i P S

和歌山市 上田紀子

裏表磨いて今日の顔になる
沈黙を続けてひたすら待つ奇跡
反対はしない賛成なお出来ず
満ちてくる月よ命の灯が点る
私をゆっくり休み毒を抜く

和歌山市 田中みね

五体ポロポロこれは無理ない年が年
両親の失敗作かこの私
頬染めて見合いた日もあったのだ
今ごろは友大会で抜けるか
佳い日なり今日は松茸買うとする

岩出市 藤原 ほか

紀の川市 北山 絹子

予定表あつても途は決つてゐる

シナリオに書き足してゆくアクセント

待つ母が居なくて絆解けだす

私を演じきたい予定表

大津波語り続ける使命感

海南市 小谷 小雪

遅れてもお月様へのススキ切る

おいしさをいただいて読む包装紙

夏バテ回復へ半年はかかる

こぼれても淑女のような萩の花

さつきからおんぶバツタの思案顔

海南市 堂上 泰女

背景をしつかり見据え結ぶ縁

帰るコール散歩に出ろという合図

台風一過骨の髄まで沁みる青

紙飛行機の創意工夫は孫に負け

限界が見えてカードも黙秘する

紀の川市 辻内 次根

鬼さんのいない独りの鬼ごっこ

誤って無実の罪の蚊を叩く

朝顔の宴のあとの午後三時

謝意三つさがして今日も床に就く

信号が青に変わった今朝の空

こつそりと起きてこつそり家を出る

祝日は犬に留守番させて出る

示談より遥かに重い後遺症

恋をして女の顔になつてゆく

聞かぬ振りそんな夫の地獄耳

紀の川市 宇野 幹子

線香のけむり草書でたちのぼる

迷わずにこの道をゆく土踏まず

自画像のうらに七ツの貌をもつ

玄関であるじのいない男下駄

カップ麺夫婦の絆とおぎける

田辺市 岡本 昇

五七五頭元気にするエキス

天高く和解の空はなお高く

借りは嫌と善意の土産戻される

間引菜の炊き込みご飯祖母想う

傾いた案山子に鳥話しかけ

橋本市 石田 隆彦

親不孝侘びて年一墓洗う

自分だけ小さく見える華の中

バーゲンで上手に買ったはずの無駄

締め屋に浪費を誘うバスポート

デモ隊の暴徒泳がす国事情

鳥取市 宮脇道子

彼岸花刈られても伸び花咲かせ

老いの句がどつぷり支流占めている

神様が見捨てるのか地球玉

我が頭を信じれなくて八十過ぎ

花植えて咲く春くるか夢の中

鳥取市 中村金祥

満月を味方に入れてプロポーズ

湧く雲に蟻の行列乱れだす

スッピンの笑顔に会うとホツとする

人間のエゴを原発笑つて

後始末また来年に先送る

鳥取市 池澤大鯨

棚田の田植え麓休耕広がつて

奥の院なにもないから覗かせぬ

旅に出てどこにも居場所見つからず

破れ鍋に綴蓋よ貧乏所帯

隠し部屋家族も知らぬ家が欲し

鳥取市 岸本孝子

無理するなと無理した亡母が夢で言う

どうであれ国旗焼くとは無礼です

さつま芋今では蔓もご馳走だ

買ってお金あつても置き場ないタンス

破れ鍋に綴蓋しだい息が合い

鳥取市 岸本宏章

コスモスの畑は風の遊園地

行くあてはないが毎日靴磨く

ことさらに隣の電車よく揺れる

受取りのサイン癖字と決めている

そのうちに火星の石が喋りだす

鳥取市 夏目一粹

本人に気づかれぬ間に写真とる

空っぽの心に嫌な人が住む

老いゆけば一本釣もされません

どうにもならぬことは聞きたくもない

伸び縮みできる心は持っている

鳥取市 高浜勇

想い出をひたすら追つて生きている

せつかちになるのもわかる余命表

しみだらけ純白にない味がある

棘ひとつとれてすつきり朝の膳

おしどりを演じて今日も暮れていく

鳥取市 加藤茶人

現実と言う化け物の二枚舌

妻であり母も演ずる潤滑油

子の金は貰った振りをして貯金

ヒーローの魅力カリスマ好戦派

負うた子に教わるメカの機器操作

鳥取市 奥谷彩子

老母のよう年取りたくて真似ている

大黒柱父の胸にあるオアシス

真実一路我が道を行く亀である

子守唄つめた枕に子を寝かす

ストローに詰まったままのいい話

鳥取市 竹口清信

今夜こそ遺る気でいたら停電だ

肴だけ並んだ膳に酒がない

出来ぬこと遺ると言うからな不思議

あれこれと不思議だらけのああこの世

やる気にも我慢の影がつきまとう

鳥取市 両川無限

遺産など残さず自分らしく死ぬ

何があつても乱れてならぬバーコード

一等賞狙うレモンの丸かじり

不器用な男本気の恋をする

にんげんがバランス崩す銭の音

鳥取市 前田楓花

夫婦には二人で歩く道がある

一言が胸に刺さったメール来る

病む彼と同じ時代を生きた恋

淡雪のようにすうつと逝つた彼

馬鹿だなあをつくづく思う片想ひ

鳥取市 鈴木一弘

盗人の目じるしとなる高い塀

かん高い声がイベント盛り上げる

九十年生きて旭光眉染める

豊作の波に案山子が見えかくれ

戦争と平和をつづる旭光譜

鳥取市 永原昌鼓

人心をくすぐる罪なマニフェスト

カーナビに頼り土地勘鈍くなり

時々自分を褒めて憂さ晴らす

デイへ行く夫小躍りして送る

闊歩することももうない丸い背な

鳥取市 吉田弘子

日中の險悪パンダ気が揉める

加齢という都合よい耳フル稼働

人畜無害嫉妬の頃もありました

昭和へと換算の癖直らない

遠慮がちな孫へ握らすお小遣い

鳥取市 吉田孔美子

心痛が胃まで下って顔を出す

おうこれは私の胃ですうつくしい

X線のおにちゃん目つき悪いよ

いつも引つ掛かる大きな目の脾臓とや

生き残る十五違いの上と下

鳥取市 中宇地 秀 四

風を待つ自由を握りしめたまま
立つべきか今は我慢のしどころか
広告を誰も信じる者がない
ミニトマト二人の話聞いていた
再稼動安全神話は使えない

鳥取市 西川 和子

団欒の粋が煙たい反抗期
うっとうしい粋にすっかり守られる
その粋を出られないまま老いて行く
生き方の粋に填っている孤独
粋とれて腹の底から笑えるね

鳥取市(故)池 原 天 馬

ガン末期酒タバコみな黙認す
定年後暇と退屈畑打つ
鼓童観る裸で世界太鼓打つ
三連休風車も休み孫の守り
柿不作俺の人生同じこと

鳥取市 深 澤 千恵子

不器用でいいと生き方教えられ
怒るたび心と体老いていく
待つ辛さ知っているから待たせない
捨てられないいっしょに生きた古鏡
絵はがきに土地のにおいがついてくる

鳥取市 土 橋 はるお

大皿に新米にぎり飯を盛る
粋を出て一人歩きをして見るか
花は咲く歌って丘に立っている
裏町のガイドが欲しいのは男
神話の里も土砂災害に遭っている

鳥取市 春 木 圭一郎

成長のために自分の弱味知る
とりあえず前へ一步を踏み出すか
何事もプラス思考に福が来る
負けるなよ自分を信じ行けばいい
まずは今自分のできることをする

鳥取市 横 田 春 名

衣替えどれを遺品に残そうか
普通の日ああ幸せと胸に手を
ごめんねと一言聞けば許します
久し振りに亡き娘と話し脈上がる
どなた様息子と遊ぶ虚ろな目

鳥取市 平 尾 菜 美

趣味ですと勉強軽くやって除け
煮えたため趣味いつまでもおままごと
不安定趣味と自負心高めよう
一からの趣味やり甲斐は先ず仕事
積んでるね趣味研鑽の古書の山

倉吉市 山中康子

福島にはかない愚痴はこぼされぬ

白髪染女のエゴが許さない

ふんざりがつく迄私かくれます

よく眠るこれが齢というもののか

はかなくて仏を偲ぶ夕間暮れ

倉吉市 猪川由美子

いじめ自殺報道まねて多発する

トップへ告ぐもう限界よ拉致家族

入籍とおしらせのみの婚流行る

買物難民巡回バスに救われる

あなた色に染まらぬまんま溝が出来

米子市 高田振作

年寄りの勲章皺の数にあり

テレビ機敷着物美人を映し出す

千鳥足終電車には間に合わず

縄のれん昭和の人が息を抜く

縄のれん親父にベンツ似合わない

米子市 吉田陽子

早足になる六度目の干支めぐり

瘡蓋に優柔不断まとい付く

点滴で付く勢いは知れている

趣味の友向上心は皆老いず

映画館出て芯の無い景色見る

米子市 中原章子

仲が良くなればなるほど負けられぬ

襲いくる老化突然無慈悲です

長命の印と思う顔のしみ

自信句が湧いてくるまで待つとする

周到な準備に運がやつて来ぬ

米子市 竹村紀の治

くちゴムの無い靴下が好きな足

迷ったら壁の写真に訊いてみる

生き死にの話も楽に聞ける歳

ゆつくりと暮れてポトフの煮える音

アンテナが酒の話は逃さない

米子市 成田雨奇

ラジオ聞けばわかる時計などいらぬ

地を這っているがときどき飛んでみる

言うだけ言うたといイメーজ悪くても

絆って何さ音信不通の子

その日もし生きているなら参加する

米子市 後藤宏之

いままでを石にいろいろ聞いてみる

日に一度心と呼吸整える

偉そうにしている人がターゲット

イメージで決めて連れ添い五〇年

音よりも語り魅力でライブ行く

秋祭り年寄の役歩くだけ

鳥取県 竹 信 照 彦

武者不足行列危機に瀕す過疎

お祭りの原点神輿担ぐだけ

お祭りは御神酒を飲んでまた飲んで

憂さ晴らしするほど憂さの種も無し

鳥取県 細 田 裕 花

空冴えて金木犀の星が降る

活性化先ず足元を蹴ってみる

森林のエッセンス降る滝の音

幸せは小花乱れる賑やかさ

ブーム去り記憶の襞は閉じている

鳥取県 岩 崎 和 子

秋深く虫の音いつか消えている

仏さまのお下がりの花卓上に

卓上にピンク黄色のこぼれ花

姪からの電話にやつと夫の笑み

お写真の色白の笑み浮かぶ朝

鳥取県 石 谷 美 恵 子

真つ白な歯からこぼれるいい話

陰膳へ好きなコーヒー添えてあげ

コスモスが見たくて回り道をする

好きなのにちつとも振り向いてくれぬ

曼珠沙華いちめん無縁墓囲む

人生のカーナビ浄土まで迷路

鳥取県 山 下 節 子

まだ出来るもう出来ない年を取る

アンテナにしていた耳がとおくなる

久々に好きと言われた孫からだ

ログハウス猛暑をしのぶエコの森

鳥取県 松 川 行 男

鯛雲君等のデートバラバラだ

仏壇の灯りが揺れるほど悩む

認知症言われてるかな若い子に

かなわない教育受けた人が前

じつと見る蟻の行列いじめなし

鳥取県 山 本 正 光

自惚れも腹に納めて老いてゆく

天災へ核の人災加勢する

孫の孫居て順番が攻めてくる

他人ごと東大出ても呆ける人

領海に魚雷設置は如何です

鳥取県 深 田 俱 久

久しぶりデートの髪型変えてみる

秋空へ吸い込まれゆく日なたぼこ

磨く腕どう現わすか秋夜長

数分も歩けば神話の国峠

揺れ動く日本の大地にすくと立つ

鳥取県 西谷悦子

こめかみにスーッと触れる風の声
生きてゆく階段登り続けてる
気が付けば小さいしあわせ近くある
足跡のひとつ一つにある思い
やる気出ぬ時には無理をせず休む

松江市 小川注湖

菊花展日本の秋が匂い立つ
産地の秋心も詰める自慢品
尖閣の平和の海に波揺れる
日めくりの今日をはぎ取りまだ元気
孫満点年金財布口ゆるむ

松江市 松本知恵子

初年金通帳の額確かめる
周遊バス百円玉で旅気分
上向きな気になるヨガに今夢中
月に傘あすの約束止めましよか
万全の策にもやはりユダがいた

松江市 松本文子

姥捨山まで私の宝離さない
翼を下さい何度唄ったことだろう
ラストチャンスだ断捨離を急がねば
滝壺で作った酒は旨かろう
孫巣立つ私が抱いてあげました

松江市 錦織禮子

迷わずにグレードアップきめました
我が夏の榮譽賞には扇風機
高ぶりにブルーハワイを口ずさむ
ライト付きルーペ期待の即戦力
通じない温度差灰色のベール

松江市 川本 畔

無防備なりヤカーさんの立ち話
玄関の赤いヒールが乱れ脱ぎ
渋滞の車忍耐くらべする
宍道湖が考案をした大夕日
納得を掘り当てるまで汗流す

松江市 三島 沁丘

乗り越えた壁の数だけ肚が出来
煩惱を抱いて挫折を繰り返す
お日さまを一度は見たい足の裏
老人に時差ボケという隠れ蓑
ワイドショー地球の裏の泣き笑い

出雲市 小白金 房子

決断で牛舎を畳む牛の声 (四十五年間)
手放した手綱にしみる牛の声
健康で牛とくらしした感謝の灯
赤トンボ亡父の墓石でひとやすみ
過去未来脳裏をよぎる風の音

出雲市 竹 治 ちかし

今朝もまた私と自転する地球
いつの間に女房好みのぼくが居る
皆んなガキだった昔を懐かしむ
貧しさの中から希望見た戦後
時ところ変われば老いも若くなる

出雲市 多久和 敬 子

ばあちゃんと呼ばれだんだん丸くなる
赤い靴はいても誰も振り向かぬ
充電しても偉くはなれぬ物忘れ
ふる里の風と語ってリフレッシュ
大黒柱ちよつと弱気になつて来た

出雲市 伊 藤 玲 子

ペラペラと捲れば遠い恋匂う
底ぬけに明るい女が泣いている
泣き笑い追いかけてこの男と女
羊羹もハートも厚くさしあげる
和尚さんと話す命の仕舞い方

出雲市 岸 桂 子

見知らぬ人と挨拶をする花手桶
民宿の畳去年も焦げていた
アリバイは全部曆に書いてある
病院の匂いをつけて家に着く
本心を書く無記名のアンケート

美作市 福 原 悦 子

叱るより褒めているのは母の胸
大樹は風の心を聞き分ける
欠け茶碗あの頃がまだ捨てられず
蛸から遠い昔を深くする
美人ではないが引き寄せる人が居る

美作市 大石 あすなろ

広辞苑閉じて開いて秋の編
ふる里の土の匂いを原点に
七癖はお互いさまの五十年
控え目の言葉に含む刺がある
賞味期限切れたわたしを湯熨する

竹原市 石 原 淑 子

股覗きなるほど天に続く道
城崎外湯めぐる下駄の音軽やかに
赤トンボ真ん真ん中に居るひとり
扇風機今朝ヒーターとハイタッチ
パラリンピックみんな皆の金メダル

竹原市 岩 本 笑 子

誕生日せめて花でもと思ひしや
養虫のゆらゆら夢を見てるらし
一筆箋喜怒哀楽の涙かも
万歳万歳大根の葉が伸びる
ある日ある時夕陽は詩人かもしれず

宇部市 平田実男

西予市 黒田茂代

記念切手貼つて封筒喜ばせ

休肝日よりも淋しい休刊日

妻の手の平がオアシスかも知れぬ

ナース服着ると天使の顔になる

門限を決めて積木が崩れ出す

東かがわ市 清川玲子

それほどのロマンも無くて古希の坂

古希の坂目線大分低くなる

横綱を目ざす勝負の塩を撒く

元気の氣入れては守る塩加減

人形の老後は誰が看てくれる

東かがわ市 川崎ひかり

飽く事を知らぬ私の好奇心

人形に徹し切れない自尊心

進化するボタンに老いの指迷う

誠実に生きた足跡子に残す

浮世とや一十一が二にならぬ

松山市 古手川光

争うなきつと地球は怒鳴りたい

近影と四五年鯖を読んでやる

孔子の国に性善説が通じない

日本一もいろいろ県民飲酒量

店頭で二十世紀は畏まり

ウォーキング挨拶だけの顔馴染み

体温のある絵手紙が娘から

どの色もほのかあたりで癒される

予報画面は晴れ 今雨が降っている

死んだら無生きた証は要りません

大洲市 中居善信

こころ豊かに午後の紅茶へ金の匙

山越えて来たか男の顔である

丸腰の男に何時も気を許す

後ろ姿は嘘のつけない人だろう

一つ山越えたと腹が空いてくる

高知市 小川てるみ

バイタリティーあふれる朝の台所

そうだそうだと風にうなずく秋桜

働いたお蔭自由を手に入れる

諸行無常心にしみる去年今年

いやいやも可愛い第一反抗期

高知県 小澤幸泉

セピア色の写真の奥で娘が笑う

うつ伏せで届かぬ手紙書いている

四十年仁淀ブルーに魅せられる

いつもの顔といつものコース梯子酒

救済史語り終えたり秋半ば

神詣で不要の仮面外れない

上様と書かれた疑惑領収書

芯の強さ庇う舞子の舞扇

沈む陽に明日をしつかり指切りす

句会には邪魔を承知で従いてゆく

大國の依怙のかたまりペンタゴン

國政をボンと投げ出す粋なひと

頼もしいガキ大將が居ない路地

人間だけの地球じゃ無いぞ虫その他

長生きのしすぎと笑う喜寿傘寿

既に喜寿けじめが少し氣に掛る

綻びを繕いあつてまだ夫婦

溜め息をかける濃過ぎる妻の愛

子育ても犬の躰けも蹴躓く

酒好きの医者だと判り出る笑顔

NOSIDE 静かに囲む箸二膳

愛憎二様すべて知つて古畳

初めての世話役になり湧く氣力

縁側に菩薩のような母の午後

たくましく揺れて手を振るランドセル

唐津市 井上勝視

唐津市 山口高明

唐津市 坂本蜂朗

唐津市 樋口輝夫

水窪抄

(つづき)

秋風がやさしくほほをなぞて行く

頑張れと我に鞭打ちリハビリを

川柳の重さ身にしみなやんでる

畔道に白赤咲いた彼岸花

(前月分) 篠山市 酒井健二

パソコンは消耗品と論される

カロリーが多い分だけ飲む菓

消費税上げても先の目途立たず

爪の先損や得やと一時間

大阪川柳人クラブ 誌上川柳大会

課題 (各題2句)

「まっすぐ」	赤松	ますみ	選
「予約」	板尾	岳人	選
「もと」	久保田	半蔵門	選
「見栄」	本田	智彦	選
「図星」	森中	恵美子	選

投句料 1000円 (郵便小為替)

投句締切 12月30日 (日) 必着

投句先 〒573-0047

枚方市山之上5-31-8

伊達 郁夫

TEL. 072-845-0548

主催 大阪川柳人クラブ

自選集

小島 蘭 幸

窓を開けると大阪城がある朝だ
ノール賞まだ完璧でない人に
スカウトをされた二歳がよく笑う
おふくろさんよ10時5分に鳴る電話
一日一回吠えろとスツとするだろう

西 出 楓 楽

お陰様病氣している暇がない
敵の敵たぶん味方をしてくれる
八百八橋が守ってくれているなにわ
禁酒禁煙してつまらない男
身のうちの抽出し軋み開かない

仁 部 四 郎

休肝日厳守今月十二月
あわて者の彼へ師走の通夜の酒
同じ色二年忘年会の酒
除夜の鐘鳴り出しました国の酒
奥様になつて坐れと除夜の酒

波多野 五楽庵

一期一会草には草の仏さま
坂多き街に危ぶみながら住む
あつざりと訣れの手紙書いている
前に行く人の買いたる紫蘇匂う
孤独ではないと気付いた蕎麦の花

林 瑞 枝

天女舞う歴史を秘めている故郷
見残した夢に酔いたい愛燦々
人柄の良さでジョークも洒落ている
がんばろう地球も星の一つなのだ
尋ねられ六人家族と言うも倅

前 たもつ

柿も石榴も実り楽しい幼稚園
赤い羽根一目でわかる議員さん
秋夜長丸谷さんに誘われる
プライド捨てようやく老いの仲間入り
裁くのは神に任せと聖書言う

政 岡 未延子

散歩する老いの歩みをせかす秋
裏からも人が来るので掃いておく
恩がえしほどではないが墓掃除
偉い人が周りにいないほつとする
鈍行でゆっくり野分後の旅

三宅保州

来年の今頃のことふと思う
トツクリを逆さに振つてから帰る
手抜きすぎぬか玄関が非常口
誰しもがやがては風にさらわれる
集中豪雨で離散した古里

宮西弥生

向き合えば他人が近くに見えてくる
引き返す勇気をくれたのは夕陽
退屈をさせない秋と道の駅
退屈をさせない秋の実と五感
白浪が行け行けどんと背を押す

八木千代

わずかな刑

わたくしの居場所の水の匂いする
愛しんだ活字をさびしがらせている
視力うすれて尚更ひろやかな景色
目に見えぬ景けいなんとなく見て戻り
お月さま僅かな刑でありがとう

八十田洞庵

傷口を洗うと女まだ光る
ライバルを蹴倒す勇氣ありますか
余命いま波風立てずくらす日々
鍵一つ持つて女の城安堵
青年に助言も含め刑猶予

両川洋々

権力の種を明かせば錢だろう
東電は汚染米でも食うがいい
放射能除染くらいじゃ間に合わない
清濁を合せ飲んだがなぜ悪い
野心家の耳へ忠告届かない

板尾岳人

目が眩むほどの乳房が干してある
過去未来真ん中辺にある戦
恋人の乳房を離陸するりんご
パンを焼く男が惚れた海老フライ
恋人のおっぱい覗いているワルツ

奥田みつ子

いい天気と言えばうなづく人が欲し
子どもには言えぬ淋しさ友と逢う
人はみな独り家族が居てさえも
独りにもみな平等に高い空
みんな皆やさしい家族有難し

河井庸佑

お互いに譲る余裕を欠いて事故
建て前と本音巧みに処世術
強引に出過ぎて悔やむ勇み足
通院が欠かせぬ日課とは寂し
ジレンマに陥つてひとり悩む日々

川 上 大 輪

何もかも予定通りという欠伸
好き嫌いようやく言えた定年後
指紋だけ残して今日は帰ります
水漏れが始まっている写真帳
阿と吖の呼吸が少しずつずれる

木 村 あきら

淡い夢醒めた八月十五日
大本営ウソ八百を蒔き散らし
名所とは悲し原爆資料館
赤紙一枚妻も子供も捨てて征く
松脂を取って戦をした昔

小 西 雄 々

点滴のリズムで迫る年の暮れ
七色の涙上手に使い分け
贅肉を気にした顔で喜寿の宴
広辞苑重くなったのも年か
ゴキブリは怒らず逃げることばかり

斉 藤 弘

竜胆をしつとりと抱く秋の壺
いじめっこはひとりもない川遊び
日日好日津軽はりんど熟れていく
芽が出たらもうお日様の子になった
揺れながら垂れ柳は人を恋う

塩 満 敏

嬉しいな八十一まで生きてきた
橋下の本音あつさり見えてきた
オスプレイ日本の空はあきらめよ
日本には原発ゼロの声ばかり
新しい日本の夜明けもうすぐだ

新 家 完 司

外見にあまり差はない古稀と喜寿
蓮根のように繋がる飲み仲間
人間を骨抜きにするあぶく銭
年寄りの傘を目がけて雨が降る
戒名でまだ繋がっている仲間

恒 松 町 紅

新しいニュースめでたい酒を酌む
若かった頃の失敗夢に見る
老化とは別に今夜も煙のほど
当り前になってしまった物忘れ
雑用に老いの意欲が背を伸ばす

津 守 柳 伸

千の風こんなところにも曼珠沙華
祝傘寿迷いあぐねるプレゼント
カルシュウムたっぷり愛をてんこ盛り
耳少し遠い傘寿に職がある
成り行きに任せ不覚の骨粗鬆

平成25年度
第111回 中部地区誌上川柳大会

宿題と選者 (各2句)	(読み込み可)	
「いのち」	{ 土 田 欣 之 選	選
	齋 藤 由 子 選	選
「編む」	{ 石 井 有 人 女 選	選
	矢 沢 和 女 選	選
「紫」	{ 浦 森 真 子 選	選
	池 田 一 子 選	選
「出会い」	{ 前 脇 一 石 選	選
	大 脇 一 荘 選	選

参加料 1000円
(定額小為替、切手不可、発表誌呈)

締切 1月31日必着

投句先 〒457-0038
名古屋市南区桜本町137
荒川 八州雄 TEL.052-811-2347

主催 中日川柳会

秋風へちよくちよく葉忘れられ
生かされてやつぱり草を引く米寿
自動車のバックが苦手です米寿
せつかくの米寿だ亡妻を待たせとく
間引菜のおひたしはあちゃんもう居ない
存在感なくとも一つしかない与党
要注意敵でも味方でもない人に
ビル工事また街路樹が抜かれてる
一年中おんなじような青物屋
食欲の秋でも僕は管理食

都 倉 求 芽

遠 山 可 住

温故知新

『清水白柳遺句集』より

塩こぶをしぶちん少しずつ齧り
幸福は数珠をつまぐる時にある
天王寺松鶴を連れて来たいなり
羊がやさしく見えるのは角のせいだよ
辛抱をする気涙が一つ落ち
留守をする猫は田植を送りだし
妥協もやむなし親類というきずな
句箋など飛ばしてしまえ扇風機
うそでもよい安心させてほしい母
パーマして子供は置いて出かけます
千羽鶴釣る押ピンも持つ見舞
ほめ言葉顔をそむけるように言う
中指で水を教えて妻出かけ
旧友の編集後記面白し
先生を追い越してから帽を脱ぎ
降らず照らずパーティもよき路郎忌よ
男にも生理休暇のほしい朝
折鶴と蠅取紙と並んでた

川柳塔の

川柳讃歌

(96)

木津川 計

認知症妻を忘れる本格派

相馬 一花

夫を忘れる本格派の妻もいる。「私には夫がいるから早く出ていって」に仕方なく外へ出ると、携帯電話に妻から「あなた、どこにいるの。早く帰ってきて」とかかってくるから家へ帰る。すると「お宅どちらさん？」が、専門医は言う。「奥さんは若い昔に戻っていて、ご亭主は凜々しかった昔のイメーヂなのです。けっして忘れてはいません。ですから、悲しまず、優しいおじさんになるのです」と。一花さんも優しいおばさんになるのです。

熟れてゆく桃老いとは斯くのこと

白川 淑子

「二三年白髪を抜いてやめにする」「柳多留」の昔から嘆きの老いは、ことに女性に切実だった。「春みじかし何に不滅の命ぞとちからある乳を手にさぐらせぬ」晶子も無情の衰えをひそかに嘆いた夜もあったろう。少年の頃、僕は道端の老婆が垂れた長い乳

を肩へ放り投げるのを見て、驚愕した夏があった。

永六輔さんが軽井沢の旅館で岡本太郎と出会った。「お久しぶりです」に岡本は「俺は過去はない」。淑子さん、この生き方です。

メタボと言われ医者とケンカをして帰る

松本文子

ガンと言うからガンとやられた思いになる。別な表現はないものか。同じ伝で「老人大学」も年寄りくさく、「シニア大学」に変わっていったのだが、早いこと「死にや」と言われているみたいで、最近の評判が悪い。

メタボと言うからボテボテに聞こえる。

文子さんは怒り、医者は困り、へどうすりやいいのさ思案橋、で僕は頭を抱える。いつぞ文子さん「メタボを廃絶する会」を組織し、運動に走り回れば一石二鳥は確実ですが。

眉少しあげて女の列にいる

中井アキ

眉目秀麗というほどに眉は秀でてこそが期待された。明治大学の校歌もだから「眉秀でたる若人が／撞くや時代の暁の鐘」と胸を張った。眉は何事かの決意の表現であったから、今号で岸野あやめさんも詠んでいる。「くつきりと眉を描いて娘の決意」。わたしもとアキさんも眉を少しあげた、とい

うことは柳眉を逆立てて女の列に立ったのだ。誰だ、アキさんを怒らせたのは。

エビも力二も嫌いで安くついています

黒田 茂代

小商いに行つた帰りは、大エビ三匹を盛つたフライを食べる夜がある。金持ちになつた気分になるから情けない。が、カニを食べない訳は、穿り、せせる格好が卑しいから女性に憚る。情けなくなるエビ、憚られるカニだが、本当は好きだ、と詠んだらこの句の値打ちが下がる。茂代さんは瘦せ我慢を張つたのである。「武士は食えねど高楊子」はその妻も同様だった。茂代さんに好きなエビとカニの食べられる日のどうか来ることを。

人脈は町内会だけが頼り

井丸昌紀

定年になって逼塞する亭主に嫁さんが嫌がらせを言う。「何か趣味ないの?」ないからうずくまっているのに。「散歩にでも行つてきたら?」もつらいなあ。こないだ聞いてびっくりした。「どうして三度三度ご飯食べるのよ?」それに「うちの娘の結婚相手どこか当てないの?」あればとくに引き会わせてるが、昌紀さん同様町内会だけが頼りとあつては、わが家でも肩身が狭い。

(「上方芸能」誌発行人)

中島生々庵句抄

(句集『生々楽天』から 昭和五十一年発行)

昭和三十六年～四十年

動中静あり桜島の煙淡し

島原の雨われ三歳の日が恋し

さらば島原 暎の父よ雨かすむ

九十九島かすむは郷愁の涙らし

ふるさとよその山なみを崩すまじ

父母眠る ここふるさとの秋豊か

欧州とびある記

タラップでも一度振り向いて見たくなり

空の青 北極に来て極まれり

暮れかね暮れかねてハングブルグ夜となる

情熱と孤独ゲーテが生きているデスク

ヴェルテルの悩みもここで書いたやら

古城は寂しされど青春ハイデルベルヒ

夜景静かにアムステルダム水の街

ロンドン塔忘れてほしい影もあり

窓々の古きでロンドン街が暮れ

ループルでミレー ゴーガン ルノアール

凱旋門という名のここに眠る夢

飛び降り随意金網がないエッフェル塔

汽笛一声なしチューリッヒ離れたり

登山電車カーブにカメラ忙しすぎ

氷河の底 心細さが凍りつき



西 出 楓 楽 選

大洲市 花岡 順子

奮い立つ気持ちに言葉などいらぬ
ポケットに未知数の夢持つている
喝采へ芸を磨いているのです

倦怠期虫はさなぎに成っていた
九割が真実だから騙される
忘れたいことでポケットはじけそう

富田林市 山野 寿之

私の積木をあの人が揺する
心配りが出来ぬ振りして生きてきた
愛ひとつ道草をして深くなる
切符二枚その中程に恋がある
立ち上がる子をいつまでも父は待つ
影法師私の過去を知りたがる

香南市 桑名 孝雄

人生観がゆらゆら揺れるまま生きる
極楽より竜宮城は姫ばかり
身辺整理庭木も思い切り減らす

庭木剪定脚立の上でまだともう

指差し呼称おいぼれなりの事故予防
オスブレイも怖いが自転車もこわい

鳥取県 大塚 美代子

若い日は遠回りして迷う道
路地裏の道に詳しい遊び猫
カーナビを頼って自分見失う
でこぼこの道にも苦あり楽もあり
近道を行けばまさかの獣道
真つ直ぐに走る少年瞳が光る

堺市 羽田野 洋介

酒止めてしみじみと聞く酒の唄
古傷も笑い話のクラス会

気をつけろとあれほど言っておいたのに
約束にも賞味期限があると知る
正直で得したことがあったかな
あの頃にやる気を出せば今頃は

富山市 有澤嘉晃

子の自立妨げているおせっかい
生きるのに焦り出してるやがて古希

その時は読めるつもりの走り書き
ワンマンな部長にもある隠し味

二人いて静かな時間これからも

天職と決めた仕事の不況風

今治市 渡邊伊津志

石の上に座ると人が透てくる

日本語を知らず絵文字で対話する

川柳はフオークだけよりストレート

豊中市 池田純子

臨月の娘おっとり母の顔

白髪でもいいか私もバアバです

極め方分からないからありのまま

お散歩の犬も長袖着始める

ひつじ雲都会の空を駆けまわる

快拳をもこれからですと山中氏

塩竈市 木田比呂朗

十二月また断捨離が笑いだす

ケータイにそつと感謝をする師走

煤払いいつものように口は出す

賀状書く予定今年も早く立て

飲み会の優先順位迷ってる

腰痛もどうやら年を越せそうだ

羽曳野市 藤原大子

過ぎ去れば小さな事で悩んでた

都合上目と耳悪くさせている

のんびりも同じ一日あわてない

幸せを育てて光る台所
肩書を取ると心も軽くなり
灰汁少し残す人間味のゆとり
行列の長さが味を知っている
スランプの球だゆつくり受け止める
政局を詠んで下五が決まらない

八尾市 山根妙子

久々に学舎訪ね娘に戻る

エアロ終え息急きながら顔笑う

早や日暮れ待つ人なくも帰途急ぐ

夏服の長い出番もいとま乞い

新涼に電話の時間長くなる

緩やかなどんでん返し新党首

大阪市 柴本ばつは

ローカルな空港タラップで降りる

生垣はブーゲンビリア屋久の島

ドライバーはおばちゃんですが荒っぽい

猿も鹿もさわいでくれる森の道

屋久島は半袖でした十二月

木洩れ日のわずかにとどく屋久の森

奈良県 谷川 憲

満月を猪口に浮かべて秋を飲む
近隣の外交遠慮しておれぬ
妻を立て我が家の平和保たれる
内視鏡で見た腹の中黒くない
予報士のバストも揺れて晴れマーク

和歌山市 磯部 義雄

にぎり飯母を丸ごと食べた味
なるほどと相づちをしてうわの空
ネクタイを締め直して葬儀場
ダイエットお金かけずに走り込み
猫の手の替りロボットの手借りる

和歌山市 北原 昭枝

秋の雨遠い日ばかり降ってくる
迷わずに座った椅子が軋み出す
本当のことを知ってる箸袋
几帳面過ぎて守りに穴があく
デコボコの迷路もあつて行く余生

紀の川市 楠原 富子

抜かりなく生きた人生風の中
経験を積んでだるまは起き上がる
均等な愛を注いで輪をつなぐ
赤い糸たぐりあつたか受精卵
深く譲った椅子に夢託す

和歌山県 森下 よりこ

石榴割れて夏の終りをしめくくる
夏バテせぬゴーヤの夢を褒めてやる
コスモスが揺れる母さん待つあたり
独りぐらしになつてわがまま仕放題
気がかりが一つ消えたら進む食

鳥取市 大前 安子

苦勞した人は力説などしない
苦勞の荷ゆつくり降ろす居間がある
苦勞とは思わず乗った始発駅
重い荷は振り分けにした人と居る
苦勞の荷遣る気が軽くしてくれた

鳥取市 谷口 回春子

プライドが邪魔して次の道塞ぐ
欲望の大河に堰は築けない
難敵に勝つて八百長疑われ
幸せへ向かうカーナビセットする
幸せか自問自答の日々過ぐす

倉吉市 中村 毅

来夏までゆつくり休め扇風機
昔はと言う年ごろになつてきた
脛にある傷は軋んでできたもの
黄門が健在ならば即廃炉
講演会舟を漕ぐ人メモる人

倉吉市 前田 喜美子

衣替え捨てる線引き出来ぬまま
お味噌汁むせて涙の泣き笑い
寶石の出番なくした農の指
天災にあれこれ策が間に合わぬ
コオロギが鳴いてくつろぐ仕舞い風呂

境港市 中井 虎尾

風の色田んぼに吹けば黄金色
すすき原ゆれているのが風の道
一番のピリになるのもむつかしい
下駄箱と言うけど中は靴ばかり
世の中を下手に歩いて七十四

米子市 生田 寒之

愛犬が逝つて犬小屋茶毘に付す
秋雨にパジャマの上にシャツ羽織る
騙された数だけ眉に白髪生え
痛くない歯医者の音が気に障る
曼珠沙華に浄土の色を見る想い

米子市 野川 宣子

びつたりと貧乏神がついて来る
儚い風に友は攫われ雲のはて
ドキドキも無くてさみしい日をたたむ
円満をたつぷり盛ったカレー皿
泥水をたつぷり浴びてこそ総理

米子市 見山 温子

横文字は辞書より孫に聞いている
幸せは目に見えぬから愚痴ばかり
喉元すぎ猛暑恋しい秋の風
ゆくゆくはと後の言葉が気にかかる
敬老会まだ仲間には入らない

米子市 湯浅 久司

盤の上温めた駒が敵になる
年金の額に采配される趣味
チャイム鳴り集金人は妻を呼ぶ
例外はあるが昔の方がいい
一合の米なら馴れた水加減

鳥取県 飯野 菖子

真似のない自分の道を生きてきた
境界がすつきりしないまま空家
体じゅうネジが緩んで抜けそうだ
笑顔には老いを隠せる術もある
陽は昇る感謝かんしゃの日々生きる

鳥取県 加賀田 志延

コスモスが今年も百恵連れてくる
三枚となった暦に焦りだす
のんびりは性に合わぬが昼寝中
くつろいだ西日の窓へ守宮来る
愚痴捨てる場所があるから仏顔

鳥取県 下田 茂登子

松江市 山根 邦代

三食と薬忘れていない老い
大声で喋り人間軽くする

これからは良き人生と言えるよう
エッセンス利いた言葉に励まされ

冥土の土産何がいいのか考える
腹立ちは独りで喋り納めてる

奥山が色づき出して風さわぐ
栗ご飯笑顔と共にお裾分け

ヤケ酒が飲めたあの頃若かった

今朝の空私の心晴れマーク

鳥取県 田口 清帆

雲南市 菅田 かつ子

幸せは今日の感謝の箸を置く

エプロンに気取るものなど無い暮らし

向き合うた微笑の中で許し合う

ほほどという頃合の難しさ

老い二人互いに杖になつてゐる

ほほどどの距離をおいてる犬と猿

自己主張どこに捨てたら丸くなる

どこをどう抜けて行こうか土竜道

明日という手がありました寝るとする

嫁さんが継ぐ気になつてきた強さ

松江市 河西 草庵

岡山市 工藤 千代子

ふかし芋むかし昔を語り出す

毒少し吐き菊の香に咽せてゐる

台風一過爆音高く遠ざかる

雑巾で拭いたことさえある涙

介護士の笑顔の陰に義母がいる

記念日は淡く豆腐も煮くずれる

言い草に呆れて口が閉まらな

美しい童話にもある敵役

リヤカーといつしよに戦後の闇ぐる

夕顔の孤独と夜を分かち合う

松江市 藤井 寿代

岡山市 藤成 操江

秋晴れに底無しの笑顔をもらう

叱る人なくて丸あるく掃いておく掃除

遊びつかれて夕日を呑んだ三輪車

錠剤もばつちり入れた旅カバン

満月にハートマークをぶらさげる

加齢だと言われ納得して帰る

東京のキミも見てるか傘マーク

体重計肉も甘味も手控える

真つすぐな父の言葉は滝だった

ジョークだと言うけど少し刺がある

瀬戸内市 東 槇 ますみ

ひたむきに生きてきたなとコップ酒
転がり癖ついてしまった毛糸玉
色あせた二人を繋ぐフエキ糊
錠剤をゴクリゆつくり今日が逝く
赤い糸乾いた音で揺れている

備前市 森 ふみか

朝は母夜は女房のグチを聴く
荷を全部背負い心も曲りだし
もの言わぬ青柿ひとつ落ちて見せ
糸電話まん中あたりねじれてる
東京へ行つて表を見て帰る

広島市 岸 本 清

いつの世も働きの者は出しやばらず
悪友は厚かましいが憎めない
ドアを閉め靴を明日へ向けておく
悔しさをつくり笑顔に閉じ込める
やけ酒もブレイキかかる歳になり

竹原市 國 實 力

じつくりと聞けば根も葉もある噂
不本意な今日に茶漬を流し込む
原因はワタシ豆腐の買い忘れ
わがままな足は老いても靴を選ぶ
ひと目惚れ植木市での話です

竹原市 土 井 輝 恵

八月は休み気儘な趣味の会
あれだけの事に体調崩すとは
お電話の声イメージとピッタンコ
級友は同じところでドッコイシヨ
寅さんの雲よ私も連れてつて

竹原市 六 田 半 徳

食べるほど薬をのんで今日を生き
マニフェスト実行出来るものだけを
マヒの手で紙飛行機に夢を折る
雨あがり新しい風もつと吹け
便利さの裏にカードの恐ろしさ

山口市 中 前 幸 子

レプリカの愛が未完の絵の中に
紙風船昔ばなしがしたくなる
情念の川を流れる火のドラマ
雨上がり虹のシンフォニーを聴く
コスモスの少女と夕焼けに染まる

松山市 神 野 きつこ

障がいがあつて微笑む天使たち
石鎚も赤く染まって秋祭り
ぼろぼろと芋蔓式に嘘がばれ
定年後夫の横は猫の席
子育ての評価はもつと後で出す

高知市 三谷 待太郎

一滴も大河も神の涙から
湿を打つそんな風情を懐かしみ
せせらぎの音聞きながらボトル水
蛙でも激しい豪雨はしゃげない
古池や基準値超えて跳び込めず

阿波市 三浦 千津子

今日の無事明日の命をふと思う
残り火は消さないように心掛け
道草をした分こころ豊かなり
髪切つて昨日と違う道選ぶ
過去形で語る苦労は美しい

宿毛市 増田 純子

気まぐれな雨が目に降る頬に降る
おもしろう生きる哀楽散りばめて
強がつています大きな傘の中
テディーベア抱いているのはおばあさん
あかるい方へ明るい方へ花わたし

北九州市 小松 紀子

その人飲んだら缶は始末して
あつという句が作りたい作れない
曖昧に笑い正論ひっこめる
どの党に替えても民意宙に浮く
まだいける白髪をそめて独り言

佐賀市 清水 園實

体重計そつと乗つても同じ針
駅までもわざわざ歩きダイエツト
八キロもやせたと語る運転手
彼岸過ぎまだ役のこしかかし立ち
孫育ち運動会に栗ごはん

山鹿市 三谷 たん吉

やる気なし目覚めも悪い普通の日
目覚め良しガッツ十分ゴルフの日
日暮れどきかかる電話はすぐに出る
にらんでるどれがバレたか考える
本当の女の魅力六十路過ぎ

福島県 七ツ森 客山

断捨離の気合いで植木剪り落とす
いい電話そこから秘密漏れて行く
そのままで笑つていいよ仁王さま
義理で出る結婚式に雨が降る
重い腰あげればそこで電話切れ

東京都 井上 つよし

呆れる程の長電話して妻元氣
ハンカチを忘れて汗がドツと出る
秋来たる夜長も楽し深夜便
シルバースhirt意地で坐らぬ若づくり
お隣りに聞こえてますよ大きくしやみ

横浜市 川島良子

踏み出せば大きく変つてゆく景色

絶頂期下降期ボクは生きている

大切な話を仕舞う桐箆箆

自業自得そこを何とか仏さま

幸せな時は長くは続かない

岐阜市 平野あずま

思わざる入院妻にマル秘ばれ

柳名を記した入院申し込み

好調だ病院食が待ち遠し

看護士の若いヒップに活貫う

食卓の花退院に笑み浮かべ

豊橋市 藤田千休

入学は補欠卒業では追試

お情けと卒業証書知っている

檜山へひとり旅立つ登山靴

離婚印粋な別れの夢をみる

パソコンも妻も動かぬ反抗期

京都市 清水英旺

いらぬお世話メニユーについたキロカロリ

つくばいにあつけらかと青蛙

栖鳳の絵彷彿させる白い月

アナログは泰然自若迷わない

ムソルグスキー展覧会に誘い来る

大阪市 太田としお

九回のツアーアウトまで勝っていた

閑空に着けば保険が口惜しい

副作用死期を早めたガン治療

婦人会最後旦那の棚卸し

死ぬ時に総決算をする積り

大阪市 岡田元

買い時とへそくりはたきばれた嘘

八十路来てわが青春に悔い多し

花一輪日々の暮らしに色を添え

考えて考え抜いてやつたへま

老いの夢見てるだけでは実らない

大阪市 高杉力

忘年会部長の横が空いている

還暦のテニスお世辞を言い合つて

いいことがあつたようねとビール注ぎ

二人して落としたところを探してる

一人旅しても自分が見つかからぬ

池田市 上山堅坊

悪いのは全て私ですましとく

どん底で必ずする神の知恵

八十路坂やつと限界守る酒

すまんねと神が寄り添う青テント

好きな人想うだけでも湧く力

糖尿病極めています二十年

池田市 多田 契子

趣味十種極めてられないままに今

額の絵を替えて無理やり秋作る

精神科行けと言われてシャキツとし

まるい月私の願い叶いそう

貝塚市 吉道 あかね

南海トラフ必ず来るという不安

記念日の今宵素直なロゼワイン

四万十の青と一緒に来た手紙

故里にウインクをする星がいる

心にも筋力つける本を読む

河内長野市 大島 友子

貯金箱先ずは開け方チェックから

オレオレとかかる電話を洒落で斬る

宴たけなわお国自慢で盛り上がる

日記にも書けぬ思いを抱えてる

赤い紐で蝶蝶結びの腐れ縁

河内長野市 辻村 ヒロ

思い出が脚色されて華になる

絵手紙に枝付きイガと栗ごはん

のんびりで皮肉通じぬ友が好き

ネジ緩め結び目緩め生きている

孫殿が我が家におなり大騒ぎ

年金と保険枕に妻昼寝

河内長野市 藤塚 克三

亡き母と歩いた小道孫連れて

明日退院美味しい順にリクエスト

最初愚痴したたか飲んで泣き上戸

絵画展額縁だけは負けてない

河内長野市 山本 エミ

晩年の残り火祝うお赤飯

隠し事あつてわくわく生きられる

靴紐を結び出なおす老いの坂

コーヒーはりハビリかねて飲み歩き

核とミサイル使うと狭いこの地球

岸和田市 増田 隆昭

楽しい会ならば少々高くても

世間体気にすることをやめた古希

虚栄心捨てて楽しい輪の中に

経験談白内障のアドバイス

子供よりペットが目立つ遊歩道

堺市 梅木 澄空

悲しいがひとまず物が喉通る

別居中親が倒れてより戻す

イケメンの法話に耳がルスになる

驚いた後で腹立つ旨い嘘

同業のチラシばかりが目に残まる

堺市 増田 和幸

豊中市 荒巻 夢

いつの世も防衛費にはシロアリが
宇宙では地球は一つ青い星

涼風に細胞すべて立ち上る
出欠に迷う米寿のクラス会

文明が有為な青年職奪い

上げた手を自分に返す歳となる
唯ひと声叫ぶとしたら何だろう

東電は死人出ないと胸を張り

最後かとカトレアつけて臨む式

先進国いずこも金融死に死にか

豊中市 貝塚 正子

輪の中で私ひとりが浮いている

高槻市 田中 由美子

人恋しああ人恋しい寒い夜
行かないで布団が止める寒い朝

すかたんもチョンボもあつて人間味

また余所見のびていますよ鼻の下
噛み砕くように僧侶は経を読む

万歩計なくて二人の散歩道

ゆれたよに見えた名画の金魚の尾

神の手でそつと閉じたい尊厳死

予定日へピアノソナタを聞かせてる

シニアの誇りゆつくりと歩をはこぶ

高槻市 鳥居 宏

虹を見せ闇も見ました昭和の世
胸張った昭和一桁生き残る

高槻市 鳥居 宏

豊中市 源田 啓生

欲しいものちよつぴりだった頃の幸

負の遺産残した昭和今も継ぐ
叩かれて固まる杭と曲がる杭

絵画よりサインが値段決めている

明日にさてこれからをどう生きる

外国はどうだこうだと言いつ過ぎる

節電で過労死認定扇風機

今日もまた眼鏡捜して五分間

尊い命ささげて散つた知覧の碑

フクシマは見えない敵と戦いだ

妻の口停電してもフル稼働

高槻市 三谷 白黒

寝屋川市 岡本 勲

孫達は立つてただけで名役者

信号を守ると会社遅刻する

お役所は競争の無い別世界

散り際は男の価値を決めるとき

ちよつと待て孫が先です何事も

散り際は男の価値を決めるとき

ちよつと待て孫が先です何事も

散り際は男の価値を決めるとき

枚方市 河田 洋子

八尾市 西川 義明

それぞれの部屋で寛ぐ老い二人
発表会ひとときスター気取りです

一時を趣味に汗して今日の幸

一時を二人で過ごせ日々感謝

厚化粧苦手すっぱん通してる

藤井寺市 肥山 一文

古希迎え上り下りがなくなつた

せつかな俺でも酒はゆつくりと

お互いを許しあうまで五十年

孫が来て溶かす妻とのわだかまり

マジックのような政治に目が泳ぐ

松原市 市川 雄太

一日をゴロゴロ過ごしたいままに

維新の芽西の各地に植えてきた

内閣の人事に影が潜んでる

独り言勝手に一人歩きする

カレンダー用事覚えてくれている

箕面市 村田 恵子

子を思う親の気持ちは順送り

お悔み欄だんだん歳が近くなる

知らなんだ両足跳びつてむつかしい

列島に雨平均に降れば良い

子らの部屋古い賞状誇らしく

年末は打ち出の小槌たんと欲し

着ると言い見ると脱いでる母介護

病む母へご祈祷肌着そつと着せ

瓦礫処理皆で協力こそ絆

難関を突破の孫へ祝う鯛

大阪府 神野 千恵子

秋空に誘われふわり遠回り

祝日の意味は問わずにただ休む

耳鳴りにどんなもんだとジャズを聴く

聞き耳をたてるとバカバカしい話

維新という言葉どんどん軽くなり

神戸市 木村 忠義

妻に借りだんだんふえてきた老後

お辞儀をすると医師が気遣う僕の腰

焦っては駄目完治するまで我慢

一匹の虫の音は哀しく聞こえ

虫たちの演奏会だ僕が客

神戸市 新保 登美子

芸ひとつ出来ぬベットの甘え癖

利かぬ子とイルカの芸に出る吐息

げんまんの指のネイルは念入りに

あの時はその気だったという契り

亡父母と話がしたい茜雲

神戸市 山根 弘子

次の世も同じ夫婦になる予定
夫婦でも語り合えない日々もあり
イメージを変えた我が子が他人めく
家計簿の予算立てても火の車
語り部の涙渴かぬ原爆忌

尼崎市 小池 幸子

ススキに団子今宵眺める月の冴え
飼い主を探す子猫の眼に負けた
駄菓子屋に昭和の夢を見つけたり
避妊して野良の猫ちゃん世話してる
刈取った稲田にひこばえ秋日和

川西市 山口 不動

女文字厚い封書にざわめけり
老人のバックパッカー怪しまれ
解けぬ式女心は謎のまま
重い荷を降ろしつつ来た二人旅
避難地区誰も帰らぬ家が泣く

篠山市 石田 久子

風鈴もじつと堪えてる屋下がり
腰曲がり初めて夫と腕を組む
鼻唄が朝から出るよ快調だ
冷えた手をぬくめて妻の背中かく
お互いにいたわりあった夫婦坂

篠山市 北澤 稠民

しみじみと友を偲んで苦い酒
しみじみと古希の足跡振り返る
移り行く四季にとぎめき生きている
酔いさめてした約束を忘れてる
謝りはいつもメールに言わせてる

三田市 上田 ひとみ

強情なところはたぶん父さん似
いい声で村田英雄も唄う父
父さんは欲しかったんだ男の子
お母さんどこが好きなの父さんの
悲しいねまああるく弱くなった父

宝塚市 丸山 孔一

熊出るの看板だけで涼を呼ぶ(夏の北海道にて3句)
北の人三十キロをちよつとそこ
日本にも地平線見る土地がある
世の果てか豪雨早魃大地震
衣更え捨てた衣服をまた探す

西宮市 泉水 冴子

さばくのが苦手でうちも魚離れ
三分ですぐ酔うのですバス嫌い
素っぴんにさせる鏡へ気を許す
大臣に選ぶ離党をされぬよう
官僚のずる賢さに敵わない

奈良市 尾畑 なを江

叱られたセリフでまたも叱る親
お掃除の能率上げる演歌ぶし
アンテナで掘り出し物をキャッチする
イワシ雲また冬が来る冷え性に

奈良市 前田 弘恵

枕元積ん読本が高くなり
一頁読んだつづきは夢で読み
乾杯のビール一口関の山
学ぶほど奥の深さに迷い道

和歌山市 さかた きく

ぶつぶつと独り言出る蟹の泡
墓石に温もり求め月参り
スカイツリーお隣さんは月かしら
人のあくび思わず貰うお人良し

和歌山市 坂部 かずみ

遊びにも身体が軋む音がする
温泉行きの話になって仲直り
幸せな明日が続けと花に水
新聞を閉じて一日終了す

和歌山市 平田 元三

空夢と知って追つてるジャンボくじ
次拝辞願う一筆ない賀状
色褪せた本を相手に夜が更ける
広い視野裏の裏まで見えている

岩出市 村中 悦男

うちの孫欲目だろうか光ってる
斜めから見ると無欲な顔に見え
入口で風が出口をさがしてる
アドリブで風向き変える知恵がある

田辺市 大峠 可動

殺生をいっぱいしたな蝗捕り
生も死も神のころだ貰い受け
醜いいくさだ白紙になれぬ主義主張
晩秋の風はひゆるひゆる泣き虫で

田辺市 小川 イセ

おはようと笑顔のリレー通学路
ローソクを灯して祖父母父母の顔
手作りカード孫からもらう宝物
命育む土に感謝の飯を炊く

鳥取市 近藤 秋星

逝く年来る年富士山頂で握手する
好季節の秋は短いすぐに冬
体内時計はとうに正午になっている
幼稚園の芋パーティーの客になり

鳥取市 坂本 とも湖

波瀾万丈そんな人生幸せか
飲み助の胃袋きつとザルだろう
人情も金もザルでは掬えまい
老母の背も猛暑に負けている弱気

鳥取市 津村 律子

美しい人だと思ふきれいな句
我が村に卒寿白寿も十二名
韓国ドラマ母の嫉と重ね見る
日本にも道徳ドラマ欲しいよね

鳥取市 山下 凱柳

慶事の日だけは本物ビール飲む
還暦も若手で通る過疎の村
一ヶ月でも大臣すれば箔が付く
先見えた今更禁酒などはせぬ

倉吉市 岡崎 美知江

風向きが変わると見える明日の道
にがい水幾度ものんで強くなる
指と指からませ遊ぶばけ防止
スイッチオン朝の眼ぎめの第一歩

倉吉市 田中 紀美恵

一分が無口な夫婦長すぎる
彼岸花赤く染めゆく田舎道
味自慢何ひとつない冷奴
持ち味を消してはならぬ塩加減

倉吉市 堀 かずこ

奥深い心は見せぬ誰にでも
秋の夜は虫の声さえ切ないよ
愛しても添えぬ不幸のクジをひく
淋しいよ心の霧はいつ晴れる

米子市 池岡 たけし

煽てられ年をごまかし澄まし顔
秋しずか暖から寒へ受け継がれ
思い寄せ辛さを忍ぶ片思い
ほろ苦く空しい恋の走馬灯

米子市 加藤 正二

やつこらさどつこいしょと気合かけ
村興し寝てばかりでは居られない
呆け知らず老いを楽しむ五七五
日中韩言葉のあやがずれている

米子市 後藤 美恵子

胸射止めた七宝焼の赤とんぼ
うつむいて歩く花嫁稀になる
月光浴しつつ夢路をたどる老い
忍び込む虫が友だち独りの夜

米子市 田村 周子

意味深の言葉がぐんと胸にくる
運動会応援団も引退だ
台風がそれたと聞いて安堵する
血糖値気になりながら栗ごはん

鳥取県 岡村 孝明

傘寿過ぎ健齒に謝して歯を磨く
老いの身は不安介護は妻頼む
散歩道芒が揺れて足軽い
クラス会不調の友の噂聞く

鳥取県 吉野 いさお

仕事ではとても目立たぬ鍋奉行
年金に過不足のない暮し向き
見栄張ればカード破産のツケが来る
思慮深く振る舞っている懐手

松江市 相見 柳 歩

ス Copp で恋の肥やしを充分に
正解の数では恋も実らない
このからだ粒に戻して天へ行く
必要と言つてくださる上司様

松江市 武島 ちよえ

一服のお茶で浮かんだ知恵一つ
継ぎ接ぎをしてまで着せたのは昔
初物が続きまたまた生きのびる
食の秋下腹だけに結果出る

出雲市 黒目 英男

情報を発して明日を切り開く
綱取りに日馬の意地が実を結ぶ
ひたむきに努力を重ね今がある
上を向いて歩こう今は旅途中

安来市 原 煩悩児

妻愛し今日も施設へ会いに行く
心不全茸便りは聞かぬこと

姿消ゆ鳴子案山子にガス鉄砲
さて今日も一日何かしゃべったかな

岡山市 前田 恵美子

月の中兎は住んでいますよね
洗濯を畳みながらに手アイロン
栗ご飯少し多目に炊いとう
鈴虫も生きているのは雌ばかり

岡山市 永見 心咲

かあさんと散歩しましよと犬誘う
パトカーを見ると敬礼したくなる
十二月迎えた途端気忙しい
真剣に聞いているふりの聞き流し

竹原市 若年 幸子

魂を大掃除する秋の風
ケータイも電話も鳴らず秋深む
残り火へ娘優しい風をくれ
七十路まだピンクの息を暖める

宇部市 高山 清子

付き合えば無口が故のあたたか味
潤滑油程度のお世辞しか言えず
貰い火をしない位置から口を出す
煩惱の炎八十路の身を焦がす

福岡県 本田 さくら

ダンベルに秋だ体操せかされる
飛行機に負けじとカラス粒になる
こけたち夜はふるさと自慢する
亡母さんを連れてきたよと曼珠沙華

唐津市 岩崎 實

自転車も厳しくなりし交通禍
年寄りにとしよりくさいと服選ひ

三食が頭離れぬまま老いて

ヨタヨタの足を動かし水まけり

唐津市 北村 松風

タスキ繼ぐ天下の嶮の二日間

蜘蛛の巣に宝石光る朝の雨

酒席抜け君と僕との三次会

故郷の訛り主賓の県人会

唐津市 吉富 節子

東北の被災者思い呑む不服

唐津焼の赤獅子が待つ唐津駅

友が居て人生豊か苦が楽に

介護して初めて頭下げた兄

佐賀県 真島 久美子

バカな振り上手に近道を探す

手を握る強さよ秋は秋らしく

ライバルはいないヘラヘラ笑う

狼が来るぞ来るぞと淋しい日

シドニー 坂上 のり子

雑沓の駅でキョロキョロ人探し

コスモスがパツと光って咲いた朝

ゴールデンエイジ残りの日々だ輝こう

超多忙誘いの声に悲鳴上げ

札幌市 佐藤 登美子

秋日和夫連れ出すコンサート

豊作の稲へ安堵の作業服

片田舎満天の星降り注ぐ

古希の会一人二人と鬼籍入り

弘前市 高森 一吞

ネクタイを外せば視野が広くなる

勝負する度に命が削られる

丸かじり出来る前歯でリング噛む

水道水異常気象で藻の異臭

東京都 大竹 一良

甲子園魔ものの顔をおがみたい

通帳を開いてにこり年金日

甘言についのせられて墓穴ほり

葛藤を忘れてつかる秘湯の里

東京都 高岡 弥生

梅ちゃんの総集編でお茶する

私にもやって来たのよ膝痛が

お湯割の美味しい季節がすぐそこに

新しいパソコンの前座るだけ

横浜市 巖田 かず枝

娘と嫁にいつも平等心掛け

日本が元気になったノーベル賞

夫との会話の中身犬と孫

腕白が虫が死んだと号泣し

横浜市 興水 弘

ジョギングで足より口が先を行く

墓前では語りきれない父の恩

五年後の孫の成長夢えがく

やけ酒の肩をいびつな月照らす

相模原市 赤木 妙子

朱に染めた雲に抱かれて陽が沈む

透明な秋風町をかけめぐる

古い日記なんと美しセピア色

断捨離で身軽になると気も楽に

佐渡市 高野 不二

介護度の質問だとは気がつかず

せめて横綱一人はほしい日本人

どれがきいたかわからぬ試供品

なんとなく効いてる様な試供品

静岡市 渡辺 芳子

良い船長い日本どうなるの

日本丸沈没だけはごめんです

大和魂どこに捨てたか議員さん

かたづけのつもり散らかり出る吐息

熱海市 三谷 圭角

敬老会衣裳で若さ競い合い

過ぎし日の演歌の歌詞に感じ入り

嘘まこと見分けに苦勞する世間

わが国技柔も相撲も乗っ取られ

江南市 脇田 雅美

ホッカホカチンとは知らず残り飯

白い傘台風一過山となる

筆書きの便りをもらいホッとする

つるつるにヘチマの雫ぬつて寝る

愛知県 樺 嶺志

畏友逝き知る遺言の大切さ

死亡欄つい目が行くは歳病名

部屋の隅ゴルフバッグが淋しげに

三連休行く所なく空を見る

八幡市 今井 万紗子

良妻を演じぎるのは疲れます

会釈してわたくし流にのぼる坂

もしかして子等の反面教師かも

難を言えば鈍さ加減が物足りぬ

大阪市 浅井 公平

年寄りには可愛くなれば愛される

短いと思えば余生味が出る

ポロポロと出てくる過去の苦い味

しつこいな政治家だけで大さわぎ

大阪市 安藤 なつこ

座禅して天にも地にも耳澄ます

千回のウソ本当をつくれるか

百歳を元気が今のターゲット

捨てましよう書けないボールペンと過去

大阪市 木村 青生

猫よりも鈴をつけたいぬれ落葉

メール打つ絵文字のような顔をして

大阪のおばちゃんアメを配り合う

つけまつげつけて人形の顔になる

大阪市 寺本 実

卒業し無事にニートの仲間入り

ピン札をよけて揃える御香典

参加数気になる会のお会計

台風も老いてはただの低気圧

大阪市 栃尾 奏子

余白みな吐息でうめるスケジュール

猜疑心秒針少し狂わせて

くちづけに赤い実ひとつ落ちました

ゆつくりと溺れて美しい誤解

大阪市 梅里 南天

窓の外遠ざかっていく咳の音

走ってもついてくるのは影ひとつ

七十路の人の打球を返されず

同郷とノーベル賞に胸を張る

大阪市 平井 露芳

胃袋もホットで夏をはや忘れ

竹コプター2本で支えるオスプレイ

忘却のとどのつまりは認知症

要注意電子辞書にも電池切れ

大阪市 前川 善之

政治にも古い知恵より若い知恵

節電すみ今度は値上げ要請か

暖房は電気使わず日向ぼこ

生きる道探して熊は街に出る

大阪市 松田 聰

釣り糸を垂らしたとたん餌とられ

目を覚ませ心の中の青春よ

マンションのどこで鳴くのか虫の声

カーナビに頼ったあげく遠まわり

大阪市 吉田 知之

夫婦共耳遠くなり喧嘩ごし

万歩計家の中までつけておく

ラッパ吹く焼芋今は懐かしい

メモした字後で読んだら分らない

泉大津市 助川 和美

コンビニで雑誌立ち読むゲリラ雨

お月様うさぎ餅つき信じた

似合うよと鏡が言うの赤い服

昔から女は強い妻を見る

泉佐野市 稲葉 洋

酒と月整い秋の夜も佳境

感傷に耽るに酔いと虫の音と

うつむけば嵩にかかってくる寒気

無事晦日その分寿命減ってゆく

貝塚市 石田 ひろ子

雨戸繰るわたしを呼んだ十三夜
一人居の夕餉に月も招き入れ
米の出来見回るように赤とんぼ
惚けたかな合点のゆかぬ札の数

河内長野市 穂口 正子

ぶつかつて喧嘩しているうちが花
息子には年金額は言つてない
やつとこさ隠せぬ皺も受け入れた
一万歩目指しサプリを選んでる

河内長野市 渡邊 修

子育て後首から上に高医療
インプラント車一台口の中
大銀杏明日を夢見て四股を踏む
デパ地下で試食重ねて買いもせず

岸和田市 中岡 香代

腹立てばお鍋の豆も煮え滾る
ダンデイーは関西弁じゃ似合わない
ハンデイーをバネに子どもが遅しい
コスモスのゆらゆら揺れる決意力

堺市 大和 峯二

弱点も時には人の魅力なり
廃炉まで見通しつけて子や孫へ
国民を痛苦で染める消費税
ナニワから全国ワヤにならぬよう

堺市 近藤 治子

浅はかさかくす言い分けしてしまふ
ダイエツトスイーツ前に目が泳ぐ
隠れてる良いところ見つけほめ伸ばす
ガードしたつもりもれてるプライバシー

豊中市 石橋 優明

受ける手に光のしづく秋の空
駆けぬける命のしづき子らの声
夜の闇上半身から沈みゆく
星明かりスプーン一杯の記憶

豊中市 西村 康子

遺言を書いてさっぱりする予定
トマト好きたつぷり入れたマイカレー
物忘れした事忘れ大騒ぎ
iPS医療世界をかけめぐる

富田林市 関 よしみ

木洩れ日にふわりと肩へ止まる亡母
曖昧な彩を晒して染める古希
恐いものないので牙は丸く研ぐ
逃避して一人の私育ててる

富田林市 古田 千華

瑠璃色の藪蘭の珠両の掌に
私を守ってくれる愛無限
母の日も敬老の日も自画自讃
老僧は飢渴憂いて落葉掃く

寢屋川市 荒川 鈍 甲

お喋りのタコ焼きと居る安堵感

燃えつきた卑弥呼の果てか曼珠沙華

芸術の解らぬ長と居る悲哀

警察の不祥事日ごと世紀末

寢屋川市 小谷 滋 彦

原発を拒んで集うゼロの波

あれやこれ追われて残る焦燥感

色あせて蜘蛛絡み合う赤い糸

居酒屋で俺大将と呼ばれてる

羽曳野市 安本 美 喜

宇宙の神秘剥がれてビジネスに

お歳暮商戦頼むか止めようか

ワイワイと食べるご馳走ディセンター

電気屋さん靴のカガトを踏みつぶし

阪南市 坂口 公 子

覚めた夜は星と語らう昔の話

自分では未だ未だいけるという自信

手回しが良過ぎて重い遺言書

十五夜のいかにも清い美しさ

東大阪市 西田 いくひろ

自惚れが来ると仲間がしらけだす

握り飯よりサンドイッチが子に受ける

懐メロに酔うと目頭熱くなる

水をやる植木に僕も癒やされる

枚方市 坂本 ミヨノ

米寿母の孫と愛犬押す車

ちぎれ雲浮浪児か秋空流る

おふくろの味届く月妻笑う

秋夜長体育祭の賞に酒

枚方市 松原 保

解散をさけび自身も散りました

楽しみは稲の育ちを見て歩く

公文見る孫の能力俺を抜く

コースター乗るよりスリルオスブレイ

藤井寺市 田付 絹 枝

コスモスに猛暑の傷を癒される

献眼の亡夫のひとみは生きている

使えるか献体欄にサインする

顔隠し影で糸引く卑怯者

箕面市 酒井 紀 子

手を洗う心も洗う墓参り

いい顔だ綺麗な心顔に出る

ひとり旅覚悟をのせて発車する

白足袋におんなの心秘めてます

箕面市 寺井 柳 童

仏像にどきつとさせる美しさ

就活の日々磨り減った靴の底

血糖値食欲の秋禁句です

新米に体重計は不釣合

八尾市 田邊 浩三

息止めて心経念じレントゲン
列を見て後ろに並ぶタコ焼屋
楽しみは芋麦黒糖選ぶ時
肩タキ券半額になる敬老日

八尾市 前田 紀雄

日馬富士横綱相撲出来ますか
川柳の行脚苦も有り楽も有る
全没が続く心に鬱が出る
日の丸に傷が付きます境界線

大阪府 小栢 こずえ

引き出しの空っぽ埋める秋の夜
日に日にと老いて行く身と育つ子と
年相応言われて返す言葉失せ
読書するつもりで本が添い寝する

大阪府 高木 道子

蒼い時代語る時計の高速度
身の程でお供物を待つカラス共
プライドも中位になり好々爺
仏頭の眼たじろく秋日向

大阪府 畑中 節子

栗の実の坂道転ぶ昼さがり
彼岸花手折り曾孫の首飾り
読み終るまでは大切新聞紙
今日も無事澄んだ夜空の流れ星

神戸市 大島 まさる

ベットにも年金明日と言いわけし
強い字の友の手紙にカラ元気
こよみだけ秋になつてエコ姿
夢をみて夢をもとめて夢ない日

神戸市 玄番 美恵子

今生きて心に響く蝉しぐれ
結び目を切つて覚悟の独り立ち
ゆるやかに時が流れて白寿まで
人生の時間を止める術ほしい

神戸市 能勢 利子

散歩道句材探して指折つて
電気つき今日も元気と知る隣保
マツタケの味も匂いも遠くなる
昔はねと五歳の孫の言う昔

尼崎市 井上 龍

苦が楽に昔話の花が咲く
苦勞人わざわざ背負う悩みごと
ウインクで誘つてみたらアツカンベ
笑い声集う仲間が響き合い

加東市 岩本 美緒子

世話になる方への干支画喜ばれ
病院行き付き添いの要る歳となり
即入院点滴三日有無もなく
小つぶでも怖い薬のワフファリン

川西市 日野岡 和之

目いっぱい思い受け継ぐ応援歌
イチローは天才ゆえの孤高道
世渡りもまん中まつすぐ玉の汗
限界と言われてからの底力

篠山市 酒井 健二

振り返りやはり大事は僕でした
地図見れば日本列島右上がり
閉じている思い聴いてる縄のれん
閉じている思いじつくり聴いている

篠山市 佐々木 勇

消えそうで消えぬ私の生命線
毎日が薬相手に敵もなし
指一本押して飯炊き恙無く
好き嫌いなどは言わないひな燕

篠山市 谷田 多美子

扇風機風鈴しもう豆台風
思い出はみななつかしく曼珠沙華
般若心経書いても世情治まらず
腰痛も食欲はまだおとろえず

篠山市 永井 かほる

何時迄もいつしよに居たい好きな人
セールスマン何度も来られついはまる
一日をこけない様にそろそろと
コーヒーでねむれぬ夜のつらい声

篠山市 藤井 美智子

も一人の自分に相談買いました
百賀受け元気な笑顔老母至福
ぎっくり腰なつてみないとわからない
病乗り越えた老犬いとおしい

三田市 足立 つな子

加齢です水を含むとほつとする
気は若い身体動かず老いの波
花立ててようお参りと御挨拶
家の味惣菜を買う手抜きママ

三田市 雑賀 一泉

民意だと他人のせいにする政治
雑草が花壇の中でデカイ顔
メール打つ都度に会話を遠ざける
大事故を起こしてからの騒ぎよう

三田市 辻 開子

秋風とコスモス畑で亡父思う
今日もまたマイペースだが終えられた
リハビリを継続させる難しさ
親切をたくさん受けて生かされる

西宮市 株元 玲子

夏終り真つ黒の手をじつと見る
彼岸花に手招きされて墓参り
老夫婦デコボココンビまだ続く
あれこれとやってみたくて生きている

(山口久子さんと酒井健二さんの句は45頁にあります)

弘前市 稲見 則彦

京都市 今井 弘之

定年退職をして二年目の夏、ふと目にした回覧板に、かなり地味ではあったが、「川柳しませんか」のタイトルのプリントが挿まれていた。

それまで、川柳との関わりが全くなかった私だったが、ノート一冊と鉛筆一本を持って、歩いて五分ほどの会場へと向かったのが事の始まりであった。会場へはいると、同じ地域の住人という事もあり、すぐにその場にとけ込む事ができた。しかし問題は、川柳のイロハを知りたくて参加したのに、いきなり、席題「墓」を三句作る事だった。すらすら筆を走らせている方々を横目に、私はと言うとひたすら指を折って、書いては消し消しては書く事の繰り返しで、掌が汗でべっと濡れていた。

城西川柳愛好会、富士慕情氏が主宰するこの句会に足を運んで四年が過ぎた。この間、丸ごと素人の私も、川柳が臍氣にわかってきた。「川柳塔みちのく」や、総本山「川柳塔社」の同人になれたのも慕情氏のお力添えである。

趣味の範疇を越え、人間を詠むこの世界と出会えた事に感謝あるのみで、同人諸氏を見習い多読・多作・多捨の初心を忘れず、精進したいと思う。

ご指導・ご叱正を是非に賜りたい。

私が川柳を始めたのは、同窓会で西出楓楽さんから勧めていただいたことがきっかけです。最初、直々に添削していただいて、それを持って都倉求芽さんの「京都塔の会」へ出席させていただきました。しかし勤めもあり、平日開催の句会に毎回出席させていただくことはかなわず、年に一、二度出席させていただくという不良会員でしたが、三年前に退職してからは、休まず出席させていただき、和やかな雰囲気の中で川柳を楽しませていただいております。

その間、楓楽さんの句集「天秤座」を読ませていただきました。ご夫君の看病、そしてお別れの前後では、思わず目頭が熱くなりました。このとき、川柳というのは五七五の十七文字だけで完結するものではなく、句を連ねることによって、物語を展開する能力を持った文学であることを教えていただいたのです。

さらに、川柳を通じて、そのベースになっている日本語、さらには言葉というものの面白さ、奥深さに目覚めました。「あなたのことをもっと知りたい」は愛の言葉で、「あなたのことが分かってしまったわ」は別れの言葉であるとか（金川欣二「脳がほぐれる言語学」）。「言葉」に恋をしてしまったようです。どうぞよろしくお願い致します。

こんにちは 新同人です

紀の川市 宇野 幹子

義父母の看病の後、実父母の看病にも明け暮れる日から解放された平成十六年、友人に誘われ和歌山三幸川柳会に入会しました。そこで三宅保州先生、木本朱夏先生ほか良き先輩に恵まれ、たくさんの教えを受けて今は川柳の無い毎日が考えられません。

尊敬する先生、好きな一句等、私からすれば全部感銘を受ける句であり畏敬の念を抱く先生ばかりです。

今川柳の本当の姿を知り、作句の楽しみや読む楽しみ等を感じています。

川柳を始めてもうすぐ八年、苦しい時も多ありますが、毎月の句会や川柳塔誌を心待ちに、また、同人の一人として仲間に加えて戴いたことに感謝しながら、これからも頑張りたいと思います。

どうか皆様良き御指導をお願い致します。

川柳を始めた頃詠んだ一句

のた打って産んだ一句をいとおしむ

奈良市 大久保 眞澄

平成二十二年三月、定年退職。その日を恐れていた？子供達のためにも、自分のためにも、要するにボケル可能性を遅らせるために、何か始めなくてはと思い、興味のあつた短詩型に挑むことにしました。路郎師の名も知らず、川柳が一番ラクそうに見えたという、不屈きな新同人です。

初めてすぐにこれはエライことになったと自分の見識のなさを感じ知らされましたが、その時は既に「ハマッて」いたようです。その後の苦難の日々は今更書くに及びません。勉強にと、米田恭昌先生から先人の句をたくさん紹介して頂き、更にシンドくなりましたが、何度もスゴイと声を出してしまいました。不遜な言い方ですが、栗先生の句が好きで、「**骸骨の講義骸骨横をむき**」などは、何とも言えない面白さを感じて、正直、驚いてしまいました。

油絵も少し描きますが、人物画が好きですし、自分の拙い句を見ても、つくづくアタリマエの人間が好きなんだと実感しています。まだ柳歴二年のひよこで諸先輩方の足手まといでしかありませんが、好奇心を持ち続けて早く足元に辿り着きたいと思っています。子供達が恐れているボケル時期も少し延期できるかなという期待も込めて、努力するつもりです。ので、お見捨てなきようお願いいたします。

こんにちは 新同人です

三田市 尾崎 一子

紀の川市 北山 絹子

この度、川柳塔まつりに参加させていただきました。新同人紹介いただき光栄に存じます。平成十一年網膜症を患い退職しほどなく視力〇・〇八の障害を持つ身となりました。「僕が目になってやる落ち込むな」と言った主人が、平成十五年癌で他界、どん底をみるとはこの様な事を、言うのでしようか。そんなある日平成十八年、川柳しませんが、と声をかけていただきました。川柳三田めだかの学校です。先生のお人柄、川柳とは……と講義されました。北野哲男先生の出逢いです。以来川柳三田の末席に加えていただきました。皆さんの多彩な顔ぶれ、人生の大先輩人望あつた方の集まりです。せつせと通いました。外の空気も大切にすめられ川柳塔に入会させて頂きました。四苦八苦しながらの毎日生きている実感です。大会でのお話「川柳に表われた死生観」を拝聴し看護人生二十五年をふり返る機会を得る事になりました。闘病における生と死の背中合わせ不安、痛み、私達は生きる希望、痛みをやわらげてさしあげる心と手しかありませんでした。目が不自由になっても生きているよるこび、家族、皆さんのやさしさを残りの人生に川柳を通して、よい思い出、感謝を言葉として又生き様を子等の道標に生きて参ります。ありがとうございます。

私が川柳と出会ったのは古い話です。

二十五年前、家事をしながら地元ラジオ放送を聴いている時、川柳教室という番組が耳に入ってきました。自分では川柳と俳句の区別もよく解らずにお題に添うた句を、五七五で投句したところ、私の下手な句を先生が誉めて下さいました。それが病み付きになりました。

それから年月が流れ、親友の勧めで和歌山三幸川柳会へ入会させていただきました。

平成十八年頃、三宅保州主幹がお声を掛けて下さり、川柳塔へ入会させていただきました。

そして、今年の三月同人の仲間入りをさせていただきました。尊敬する川柳人は、三宅保州先生です。

両輪の一つになってくれる妻

三宅 保州

手のかかる夫を演じ続けよう

三宅 保州

私の好きな句で心に残っています。家族の絆が目に浮かびます。川柳句集『たまゆら』からで、共感を覚えます。

他の趣味は十五年位続けたちぎり絵です。和紙の手触りに心が癒されます。絵てがみの方も嗜んでいます。

諸先生方はじめ、先輩の皆様今後共よろしく御指導をお願い申し上げます。

こんにちは 新同人です

河内長野市 木見谷 孝代

二十数年前、初めて時実新子さんの句集「有夫恋」に出会い、これが川柳なのかと衝撃を受けました。ユーモアや時事を詠むのが川柳と思っていましたから、ここまで自己表現出来るものかと。とても私に出来るようなものではないと思っていました。それが五年前、近所の友人に「公民館で川柳をやっているけど、おもしろいからやってみないか。」と誘われ、もう一人の友人と教室を覗きに行くと、あまりの楽しそうな雰囲気引き込まれました。二つ空席があるということ、即「長柳会」に入会。私より年輩の方々がいい句を詠み、深刺としている姿に打たれ、月二回の句会が楽しみです。川柳塔の誌友になり四年、先輩方の推薦で、同人にならせていただくことになりました。もっと精進しなさいということだろうと受け止めています。

趣味は野菜作りと絵手紙。川柳絵手紙を川柳の友人達に喜んでいただいています。

閻魂をくれた他人のにぎりめし 楓 楽

私の好きな句です。句会ではいつも大きなにぎりめしをいただき、私の栄養となっています。

雑草は期待されずに強くなる 孝代

今後共よろしくご指導の程お願いいたします。

吹田市 藏田 光子

俺に似よ俺に似るなと子を思い 路 郎

この句碑が近くの中島小児科医院の庭にありました。待ち時間にいつも読んでいたのが川柳との出会いだったと思いい出しております。

川柳を始めましたきっかけは、近くにおられた今は亡き門谷たず子さんに何度も奨められ「楽しいですよ私でよければ、見てあげますから」と言って戴き、西宮北口の句会にお連れ下さいました。それ以来カルチャーもご紹介いただき先生始め多くの方がたとの出会いがあり、お友達になりました事を、嬉しく思っております。

句の方はいま一つですが、いつも頭の片隅にはお題があります。春夏秋冬、四季を通じて何とか一句をと思い、多読、多作、多捨を心掛けてはいますものの、そのようにはまいりません。月に一度の句会で心あらたにしております。見つけ、表現法、等等勉強させていただくことばかりです。

先生方、ご先輩方のご指導、皆みなさまにあらためまして、御礼申し上げます。今後共よろしくお願い致します。

こんにちは 新同人です

海南市 小谷 小雪

「川柳の句会」は楽しいのよ、と義姉が出席をすすめてくれた。何を材料に、どう表現すればよいのか不安でいっぱいだったが、拍手で迎えられ、一句を評価され、うれしくなった記憶がある。

しかし、川柳の送受信は、元気でなければ難しい。また脳に負荷をかけるのは、とてもしんどいことである。句会では、生き生きとした柳人も、チャレンジするなかで、「心の若さ」を保持されているにちがいない。

私は、川柳の輪を大きなものにと願っている。人と人とのつながりが希薄になっていくなか、津々浦々の人と、言葉で共感でき、お互いを認め合えるという楽しさを広げたいと思う。

つながっているなと思いきやる気出る 小雪

軽い気持ちで川柳の門を敲けど、見上げれば、厳しい石段が続いているようでもある。

今という時を抱きしめ、多くの偶然に感謝しながら、私の個性の表現を発信していきたい。

コオロギの自宅侵入なら許す

小雪

看板は耐える力としておこつ

小雪

米子市 後藤 美恵子

川柳については、十七文字で季語は不要以外は何の知識もありませんでした。書くことが好きだった私は、ただ感性を頼りに地方新聞に投句を始めました。平には抜けても川柳を安易に考えていた報いか上達しませんでした。そんな折り、亡夫がチヨコチヨコと詠んだ句が客になったのです。「口惜しさに腕を磨いて勝負する」(美恵子) とうとう天位に抜け、川柳に嵌っていきました。その後、鈴木公弘先生のお誘いを頂き師事をしております。

衝撃を受けた句

手と足をもいだ丸太にしてかへし

鶴 彬

憧れの作家の句

妻をころしてゆらりゆらりと訪ね来よ

時実新子

墓の下男の下に眠りたや

時実新子

奔放な内面的独白、追真的な情熱を詠いあげる(月の子の解説より)。いつかは詠みたいと鈴木先生に言ってみたら、経験不足ではと……(笑い)。

趣味は、永年のゴルフ、茶道、華道等休止。七十過ぎての手習いで社交ダンス。川柳とで文武両道と称しています。これからも楽しみながら苦しみながら川柳を友として参りたいと思っております。

篠山市 酒井 真由

同人とは塔を支える一本の柱になるということである。

橘 高 薫 風

どのような柱になるのかは、個々の資質によつてさまざまであろう。実作者として立ちゆくのは言うまでもないが同時に人としての器を磨かねばならぬとつくづく思う。

十月、丹波篠山は一面の実りの秋となる。稲の収穫が終るとすぐに枝豆の出荷がはじまり、農家は多忙を極める。

そして、城下や近在の町々ではつきつきと祭りの幕が開く。収穫を祝つて山の神・田の神・地霊に感謝の祈りを捧げるのである。

秋が深まるにつれて盆地は朝毎に深い霧に包まれる。霧と夜の冷気が菌を育み、松茸狩のシーズンが訪れる。

丹波杜氏が灘、伏見へと旅立ち、やがて猟期を迎える頃には静かな初冬の風景となる。

底冷えのする長い長い冬。牡丹鍋の湯気が立ちのぼる。外はしんと雪。丹波の人情は温かい。

六万石の盆地の城下町から「川柳塔」へ、また各地の大会へと仲間と共に「いのちある句」を発信する欲びは尽きない。

私たちの塔だ天まで伸ばさんか 河内 天笑

堺市 澤井 敏治

◆堺聖テモテ教会（日本聖公会）の川柳会に誘われたのは平成十九年。今では本人も信じられないが、月1題2句に四苦八苦の二年間。ご指導くださった柿花和夫さんから川柳雑誌や句集をお借りした。その中で「橘高薫風三百句集」に出会ったのが、のめりこみきつかけであろうと思う。辞書を引ながら、三百句をパソコン入力させてもらった。六大家はもちろん、川柳塔も麻生路郎のことも知らず、川柳とは「面白五七五」と思っていたわたくしの川柳観は根底から覆された。本格的にと、平成二十一年（七十二歳）で誌友となった。

◆労働歌謡が歌えば凄かろう 薫 風

蹈躡踏む阿形忤形人間座

毒の世の達陀の火と閻伽の水

初光赤兎馬老いて嘶かず

手術如き何狼狽えるゲツセマネ たもつ

◆①信仰面ではなく、新共同訳聖書。特に、旧約聖書の知恵文学の「コヘレトの言葉・知恵の書・シラ書」。②タゴール詩集「ギタンジャリ」（高良とみ訳）【ネット検案】
◆スポーツクラブ通いは三十七年。あと150kmで地球一周の4万km、十一月に達成する予定。

こんにちは 新同人です

高槻市 初代 正彦

神戸市 白川 淑子

川柳を始めたのは七年前。定年後、テニスやゴルフなど主にスポーツを愉しんでいたところ、「割合知的で面白いよ」と先輩からお誘いをいただき、不思議なほど新鮮な感じがありました。これが、会社OBの川柳同好会へ入ったきっかけです。しかし、所詮曖昧な気持ちで始めた川柳は甘くありません。当初は何とか投句していましたが、やがて壁にぶちあたり興味を失いかけていました。

そんな時、約四年前に大阪より文化センターの川柳セミナー受講を勧められ、以来同セミナーで引続きお世話になっているのが、前たもつ先生。親切丁寧なご指導のおかげで川柳の面白さがようやく分かりかけてきた気がします。

好きな句は

俺に似よ俺に似るなと子を思い

麻生 路郎

恋人の膝は檸檬のまるさかな

橋高 薫風

今日よりも明日へ大きな穴を掘る

前 たもつ

句をつくる時、今の自分の姿、心に浮かんだ思いを素直な気持ちで表すことが大切と言われますが、今後、多少なりともそんな意識で句を詠むことを心掛けて参りたいと思っています。

皆様のご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

初めて公民館で何げなく手にした川柳さんの会報を見て強いカルチャーショックを受けました。
長い間探し求めていたものにやっと出会えた思いでした。
特に軽妙なユーモア句に触発されました。

日曜市大阪弁に値切られる

北野 哲男

救急車元気な音でやって来る

堀 正和

据え膳を食ったばかりにほぼ奴隸

福田 好文

月一回開かれる肩のこらない和氣藹藹の句会に出て大笑いしている内に今まで肩肘張って生きて来た自分の阿呆らしさに気付き心が徐々に解放されていくのを覚えました。川柳が人間淘汰の短詩文芸で有る事を痛感しています。

川柳を始めて五年、はつはつ余所の句会にも参加させて頂き又あちこちの大会にも出席して視野を広げ学んでいます。

このたび伝統有る川柳塔の同人に加えて頂き身の引き締まる思いです。未熟者ですが川柳に出会えた幸せを噛みしめ精進して行く所存です。今まで温かく見守り御指導下さった北野哲男先生、堀正和会長、諸先輩に厚くお礼を申し上げます。
川柳の普及に勤められた功績を讃えられ、三田市の文化功労賞に輝かれた北野先生は私達三田川柳協会全員の誇りです。

一歩また一歩を綴る一行詩

淑子

こんにちは 新同人です

弘前市 高橋 洋子

はじめまして、この度川柳塔の同人のお仲間に入れていただきました。これからどうぞよろしくお願いを申し上げます。

私の川柳の始発駅は、波多野五楽庵先生が講師として開講されましたカルチャー教室でした。古川柳も交えて、川柳の「いろはのい」からご指導をいただき、その奥深さに胸を打たれ「川柳っておもしろいものだなあ」と惹かれていきましました。

その後「川柳塔みちのく」の月例会にお誘いをいただき会員の皆様方からも多くのことを学ばせていただきながら今日に至っております。

私は体を動かすスポーツが大好きで、正直なところ活字とはあんまり縁のないことでしたが、川柳に出会ったおかげで毎月届く柳誌は勿論のこと新聞や雑誌でも「五七五の世界」を楽しみ感動すること頻ります。

今は子供達は自立し時々遠くに住む母の介護ですが川柳とのご縁は大切にしていこうと思っております。

私の好きな句はたくさんございますが、今は奥田みつ子先生の「ピンチにはうつむかないで空を見る」「これからは楽しさだけを見るレンズ」がお気に入りです。

河内長野市 谷 久美子

私が川柳と出合ったのは、九死に一生を得た闘病中に、ある新聞に載っていたサラリーマン川柳「まだ寝てる帰ってみればもう寝てる」作者は覚えていませんが、自分の生活に重ねクソツと笑わせてくれた一句です。

それから十数年後、普通の生活が出来る様になり、何か趣味をと思った時、坂上淳司先生が開かれた、ブラザ川柳同好会がある事を知り、まだ頭に残っていた一句を思い出し、平成十九年十一月に入会させていただきました。句会にも参加し、自分の句が選ばれた時の嬉しさ、誇らしさで、川柳が楽しみの一つになりました。長柳会の方々とも知り合い、楽しい句会に参加もさせていただき乍ら、平成二十二年一月号より、川柳塔の一員に加えていただきました。

水煙抄では、西出楓楽先生、川上大輪先生、初歩教室の鈴木公弘先生に、句を拾っていただく事が、毎月の楽しみでした。勉強になった本は、新家完司先生の、「川柳の理論と実践」です。川柳との出会いから四年六ヶ月、初心からの、坂上淳司先生、長柳会の板尾岳人先生、村上直樹先生、山岡富美子先生の、御推薦により、平成二十四年七月号から、同人としてスタート致しました。未熟者ではございますが、今後ともよろしくお願い致します。

こんにちは 新同人です

紀の川市 辻 内 次 根

座右の句に

聖夜の餐神父の靴は常のまま

薫 風

川柳塔誌で拾ったと思うのですが、日記帳の表紙の裏に書いてあります。本当はこれと同じ位それ以上に好きな句が

足摺の雨は遍路へ地から降る

薫 風 です。

目標はこのような句を作りたい、出来ないことは承知で、思っています。舞台は足摺。人物は遍路。激しい雨。大河小説の序章のように思えるのです。

この句と対峙した時、手足が凍んでしまします。しかしそんなになんて考えこんでしまうと先へ進めません。道を修めた人の言葉、過去を映さない将来も映さない鏡のように、今ここにいる自分だけを映して精進するしかないかも知れません。

足摺の雨は遍路へ地から降る、はよくよく考えてみますと人生の序章ではなくて、終章かも知れないと思ったりします。

だんだん体力が落ちて背負う荷物が重くなり、道のりが厳しくなる、これはまさしく重い荷物を背負って、激しい雨の中を歩く遍路と重ね合わせてみると深い句だと思います。どうしようもない定めを背負って自分で歩かねばならない。足摺の雨は本当に激しいです。

一句にここまで考えるのは考えすぎでしょうか。

和歌山市 土 屋 起世子

女手ひとつで守ってきた家業を息子夫婦に譲ったものの私の体にはばっかりと大きな穴が空いた様になりました。そんな時立ち寄った本屋さんで見付けたのは、田辺聖子著『川柳でんでん太鼓』でした。その一冊を読んだ私は、川柳に魅力を感じました。

そこで勇気を出して和歌山三幸川柳会に入会致しました。

それまでソロバンだけの自営業に生きて来た私ですが、主幹はじめ仲間の人達の優しさで私を変えて頂きました。

あなたにも僕にもきつとある翼 小島 蘭幸

私の大好きな句です。同人になった今私はわたくしの翼を大きく広げ飛び立とうと思っています。

皆様どうかこれからもよろしくお願い致します。

こんにちは 新同人です

高槻市 富田 保子

堺市 内藤 憲彦

川柳の切っ掛けは高槻婦人学級に森中恵美子先生をお招きしての川柳教室が最初です。よって川柳は主人(美義)より十年先輩なのですが、スポーツジムや他のカルチャースクールと重なり句会参加より、全国紙誌やNHK等への投句の方が、つまり、**花に生き人に生かされ六十年**でした。そして書架に有った楓楽理事長さんの天秤座、濡れた手で句想メモする**台所**に魅了され先生とのお手紙交換、誌友・同人へと今日に至って居ります。

一方、全国区での入選句が溜まり、どちらからと無く何かに纏めたいが発端となり夫婦句集「**二人三脚**」を。昨年わたしの古希記念に合わせ「**続・二人三脚**」を上梓、これも温かい柳友さまのご指導と学びのチャンスを与えて頂いたお陰です。本当に有難い事で御座います。

川柳は有難い文化ですが、反面想定外の着信もありました。ホイホイと発表されてる時は良いのですが、載らなくなりまして「もう歳か、入院? 或いは」の噂も聞えてきます。人間スランプの時もありますわよ。優秀な柳友さんはどう対処されているのか、羨ましい時期も多々ありました。

今は、**片足をずらし女は線づくる**が少し重く感じられる心境ですが、**孫宅の微笑み届く嫁メール**に囲まれ平凡な専業主婦で一生終えられたらが鄙の里出身者の願いで御座います。今後家事と締切日に追われながらも前を目指し日々精進をと思つて居ります。

◇定年の翌月から川柳を始めました。会社OBの同好会で諸先輩に指導頂き約五年です。現在は天満橋の川柳教室で前たもつ先生に、丁寧に御指導を頂いております。

お天道さま低い屋根にも日を照らす 前 たもつ

大きくて、温かくて、私の座右の句です。

◇川柳は自分を見つめること。常にアンテナを磨き、日々の身のまわりから実感したことを詠おうと思います。それが自分史として一冊にできたらと考えています。

本当の辛抱日記には省く 榎本日の出

日々様々なこと。逆に元気をいただく句です。

◇「塔まつり」に初めて参加したのが、一〇〇〇号の記念大会でした。木津川先生の講演にはびっくりしました。「命ある句をつくれ」「二句を遺せ」「人間陶冶の詩」のお話に感動しました。身が引き締まりました。

二階を降りてどこへ行く身ぞ 麻生 路郎

まことに若輩ながら、自身の肝に銘じております。

◇「命の句」には程遠く「絵日記風」をウロウロしておりますが、同人となり心新たに川柳を続けて参ります。皆様の指導の程よろしくお願い申し上げます。

紙とペン余生楽しむ友とする

憲彦

こんにちは 新同人です

米子市 中原 章子

私が本格的に川柳を始めることができたのは、七年前に鈴木公弘先生に、お声をかけて頂いたことがきっかけです。それまでは、地方新聞の川柳欄に投句を続け、一喜一憂していました。

鈴木先生の川柳会に入会、毎月一回の例会に出席するようになりました。そのうち各地の大会に出席させて頂くようになり、井の中の蛙の挑戦が始ったのです。

第21回全日本川柳2010年鳥取大会開催に当たっては、実行委員の一員として参加させて頂きました。福岡大会、北海道大会に視察同行、鈴木先生の不眠不休、命がけの奮闘により、大役を果たすことが出来ました。貴重な体験をさせて頂き感謝致しております。

翌年の仙台大会は、東日本大震災後とあって心配しましたが、取り行われ出席させて頂き感激ひとしおでした。

八十路を迎え、やっと川柳の入り口に立つことが出来ました。同人として句を詠み続けることは、私の「心の入浴」になり癒やされ浄化される思いです。「我以外皆師」をモットーに、生ある限り川柳と共に歩んで参る覚悟でございます。

よろしくご指導お願い致します。

和歌山市 福井 菜摘

人生の折り返しを過ぎた頃でした。

「川柳の作り方」近江砂人先生の著に出会い、ほどなく「三幸川柳教室」に入会させて頂いた。温かい諸先生方にご指導を戴きながら、会員の皆様の川柳を愛する姿勢に感動し、いつしか川柳の虜になっていました。

「三幸川柳会」主幹、三宅保州先生の「川柳は十七音の無限大」に意欲が湧き熱くなりました。「生き甲斐は川柳と言えるようにしよう」と教わっています。でも「広くて深い川柳の道」様々な人間模様に触れつつ、楽しみ苦しみ疏きながら、二十余年経った今、沢山の事を学び、多くの人達と出会えたことの幸せを噛み締めています。そのうえ今回、同人のお知らせを受け身に余る幸せと感謝しております。これを機に前向きに励んで参りたいと思っています。

好きな句の一部でございます。

水平線を見てると迷い消えていた 小島 蘭幸

人恋し人煩わし波の音 西尾 栞

見る人は見ている駅の未生流 小出 智子

これまでに育てていただいた方へのご恩を忘れず、自分自身を見つめながら、ステップアップしてゆきたいと思っています。皆様これからもよろしくお願い申し上げます。

こんにちは 新同人です

柳 歴

河内長野市 松岡 篤

二〇〇六年夏、某新聞の時事川柳として初掲載の句
クールビズ言うて電車は冷やし過ぎ

そして翌年、同じ新聞で

ネクタイがクールビズ明け待っている

を掲載頂き、二分の二の打率で舞い上がっていました。

二〇〇八年リタイヤ。二〇〇九年三月地域柳会入会、同年

一二月川柳塔誌友、そして今回同人の仲間入りをさせていた

だきました。

趣味・特技

自己紹介代わりに今までに川柳塔に掲載頂いた拙句を記載

させていただきます。

古き良き昭和が残る立飲み屋

酔っ払い辻褄合わぬ武勇伝

居酒屋のハイテンションは姫の声

要するに興味・特技共、「飲み助」なんです。

今後ともご指導よろしくお願い致します。

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版

514頁

頒価 三〇〇〇円

(郵送料共)

目次

麻生路郎アルバム

麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」

麻生路郎文集・麻生路郎語録

麻生路郎物語（東野大八）

麻生路郎の人と作品

麻生路郎作品「福寿草」

麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜

麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

電話 06-6779-3490
花野ビル201号

川柳塔社

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

新川柳鑑賞

(10)

麻生 路郎

うちのばあさんなどと云われてるとも
知らず

(初 甫)

自分の妻君のことを、しきりにうちのばあさん、うちのばあさんという人があるが、その妻君は、そんなことはいつこうにごぞんじなく、まだまだ若いつもりで三面鏡を買って、すがたかたちにうきみをやつしているものである。しかし、このうちのばあさん呼ばわりは必ずしも、妻君を老いほれ扱っている訳ではなく、近親感がそう言わせているのであることは、君とこのばあさんと他人から言われたとしたら決していい顔はしないだろう。

奥さんは乍末筆だけのひと

(妄 夢)

男と男とのつきあいはかなり親しくしていても、お互いにその奥さんとは顔を知っていると言う程度、イヤ顔さえ知らないことの方が多いが、手紙の末筆には乍末筆奥

さんよろしくなどと書く。幾年つきあっている、その線からは一步も出ない。そこをとらえたのが、この句である。二人にとってはアクセサリイ的存在の奥さんだとも言えよう。

子供等が待っていますと妻の文

(好 郎)

この妻、どっかに封建制の匂いがする。愛する夫に、送る手紙にも、あけすけに少しも早く帰って下さいとは書かないで、子供等が待っていますと間接的な書き方をしている。子供等よりも、もつともつと待っているのは自分なのであるが、それをそう書かないところに潜在的な愛情が感じられるのである。日本の在来女性の真情を巧みにつかんだ句である。

パン買って喰べといてネと妻は留守

(文 平)

話し言葉によつて情景を出した面白い句である。映画に誘われたのか、婦人の集まりに出かけるのか、それはこの場合問題ではない。兎に角外出するのに、食事の準備もしないで出てゆく、若い妻の言いそうなことを的確につかんでいる。

妻として子として見れば詐欺ぐらい

(谷 水)

詐欺として囹圄の人となつたが、妻にとつ

ては矢張りよい夫であり、子としてはなつかしい父なのであることを、強調した句である。下五の「詐欺ぐらい」と言う措字によつて、血のつながりと言うものが、罪悪を超越するほどの強さで表現されているのでこの句にいのちが生じたのだと思う。

にじりよる様に近づく十二月

(花 村)

カレンダーが一枚一枚と薄くなつてゆく。そして十二月がそこに見えて来た。社員はボーナスの皮算用をはじめるし、重役は十二月をうまく切り抜ける目算が立たず、お先真つ暗でジリジリイライラして来る。そこを、「にじりよる様に」と表現したのである。これは例を会社の経営者に取つたが、商人にしてもサラリーマンにしても、この句にヒシヒシと胸を衝かれる人たちもある。表現によつて生きた句である。

十二月襖をしめるのも忘れ

(方 大)

俳句に「盗人もあと閉ざしゆく夜寒かな」と云うのがあるが、十二月ともなれば、その寒さは一入で、隙間風さえ首をちぢめるくらいだのに襖をしめるのも忘れると云うのであるから、いかに忙しかがうかがえるではないか。

英語 de Senryu ⑫

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代
(岐阜保健短期大学)

銀行と縁もないのに忙しく
*nothing to do
at the bank
yet I am busy*

ひとり立てば 風ふところに入りにはけり
*standing alone
the wind passes
through the opening of my clothes*

～リバーウィローのため息～ (R・H・ブライスの仕事4: 俳句と川柳)

俳句・川柳を英訳したブライスは「蕪村は芭蕉に従い、子規は蕪村に従った。しかし芭蕉と一茶は誰の真似もせず、彼ら独自の道を歩んだ」と自己の俳句観を語りました。禅の造詣が深かった芭蕉を「人生の詩人」、芸術家・蕪村を「画室の詩人」、波乱万丈の人生を送った一茶を「運命の詩人」と呼びました。四人の中で一番日本人らしいのは一茶で、「蚤ども、夜永だろうぞさびしかろ」を紹介し、「この句には仏教思想が人間の真性を示し、一茶は人間味豊かな人である」(HAIKU Vol.1 北星堂書店 1942)と評価しました。一方、人間の喜怒哀楽を表現するとして川柳を俳句以上に好みました。例えば「蚤」の句では剣花坊の「肥りたる蚤を潰せば孕み居り」を提示して、「この川柳に漂う無常観は俳句以上で、真に宗教的です。人生は時に不条理です。われわれは孕んでいる蚤を潰し、神は妊婦を破壊し給うのです」(『世界の諷刺詩川柳』1950)と日本人には見られないブライスらしい解説をしました。また川柳は「人生の批評」(Senryu 北星堂書店 1949)と言い切るブライスにとって、日本の知識人が川柳を俳句より低く評価することが理解できませんでした。俳句も川柳も世界文芸と考えるブライスにとって、川柳と俳句は表現の内容と視点が異なるだけでした。俳句と川柳の違いを「エマソンがいつている様に『事物が権力を握つて、人間を支配している』のが、川柳の見方である。川柳と俳句の大きな相違は、俳句が、平安時のものであり、人生の精華であるのに對し、川柳は、苦難、不幸、屈從時のものである。川柳は、地中の迷路を手探りで行く人生という苦い根を表現する物なのである。」(『世界の諷刺詩川柳』1950)と述べました。また両者の滑稽においては、「川柳の方が、目的と結果、理想と現実、肉體と精神、威厳と無知との對立が容易に見られる。俳句は川柳より遙かに不鮮明であるが、深くて、老翁で、隠れながらもほのかに匂っている」(同書)と語っています。まさにブライス風の俳句・川柳観です。

誹風柳多留一篇研究 88

増田 忠彦・山口 昭

小栗 清吾・伊吹 和男

山田 昭夫

清 博美

687 かねやすハお七を見るとたゞきたて

増田 今に変わらぬ商家の呼び込み。本郷の口中薬屋の兼康は駒込の八百屋お七の家とも近い。兼康で呼び入れの口上をする若者は美形のお七が表を通ると、決まって声を張り上げたことだろう。

兼康では効能書きを見世に貼り付け、通行人に向かつて宣伝・口上していたらしい。

かねやすハ嘶を書いてかべ、張り 三13
どうわすれするとかねやすふりかへり

清 賛。

明三義3

688 色じやうのぬけた事いふとやのかゝ

増田 「どやのかか」は前回に山田氏が解説された。私娼宿をまかされているおかみの言葉は、色も情けもない粗っぱさである。ふり込とてつこにをへぬどやのか、

傍四30

伊吹 賛。半分以上男。
清 賛。

689 駕わきのおしこんで行はやりいしや

山口 かこわき【駕籠脇】は、貴人の乗っている駕籠のそばに徒歩で付き添うこと。また、その従者。駕籠回り（日国）。

往診する患者が多い流行医者で、予定が次々にあるので、お供の者が駕籠に押し込むようにして次の場所に急ぐのであらう。まるで今日のタレント並みである。

はやりいしや両手を駕のふちへかけ

明五亀1

はやりいしや手紙を持て駕にのり

安八櫻2

清 賛。こまめに動くからまた流行る。

690 ひんの能いばゝあ扇子の芝でなき

山口 平家に謀反し、宇治川の合戦に敗れた源三位頼政は平等院に逃げ込み、もはや是までと庭の芝の上に扇を敷き、その上で自刃したという。このエピソードは「平家物語」や謡曲「頼政」にも謡われており、そのとき詠んだ歌が

埋木の花さく事もなかりしに

みのなる果ぞかなしかりける

である。

また、この話以前、頼政が鳥羽上皇の女官菖蒲の前に懸想し、機知に富んだ歌を詠んで、上皇から菖蒲の前を賜ったとも、鶴退治の褒美に賜ったともいう話があり、主題句の「品の良い婆」とはその菖蒲の前のことである。夫の死を悲しんで年をとつてすでに老婆とな

つた菖蒲の前が泣いたろうという想像。

かるわざの切にあふぎの上へのり 一五 36
むだ骨を折て扇の芝となり 三五 10

山田 賛。

しんくわいな事であやめハ後家になり

安七信 2

清 賛。老いた菖蒲の句は珍しい。

691 薬とりとうく始皇まちぼうけ

山口『漢楚軍談』に「始皇帝、萬世まで天下の君たるべく、また長生不死の薬を望む」とあつて、秦の始皇帝は方士徐福に命じて東海に薬をとりにやらせた。しかし、徐福は船団を組んで出発したが、そのまま行方不明となった、と言う伝説がある。句はそのことを詠んだもので、一説に徐福は日本の紀州熊野に漂着したという言い伝えもある。

薬とり始皇までもくらせとも 四三 20
跡白雲と蓬萊の薬取り 梅二〇 10

清 賛。

692 よし町ハこしなとかけて針仕事

山口 芳町はこ存じ陰間茶屋のことであり、陰間のことである。芳町の風景を詠ったので

あろうことは推測できるが、陰間は一般の女性と同じように針仕事などをしたのだろうか。よく分らないところである。吉原や岡場所には「おはり」とよばれる裁縫専門の女性がいて、特別の場合でなければ遊女は針仕事などしないようであるが、逆に陰間はより女性的に振る舞うために針仕事などしたのかもしれない。また、そこがこの句のおもしろ味だろうか。

小栗 不明。陰間が針仕事をするとも思えないし、「腰をかける」が、何のための表現がよくわからない。

伊吹 同右。吉原の張見世で客待ちの遊女がお茶を挽いたように、客待ちの陰間が針仕事をしたのでしようか？

山田 右のようなことなのでしよう。清『川柳江戸砂子』上、「史伝」二十六にも採り入れてあるが、解はない。小生も不解。

693 するか丁宝永山を芝へ出し

山口 宝永四年十一月富士山が大噴火して、その後に宝永山が出来た。このことを下敷きにして三井越後屋が芝に支店を出したことを詠んだものである。「駿河町」はこ承知のよう

うに三井越後屋の代名詞で、なにかと富士と結びつけられる。

この芝の店は越後屋ではなく、松阪屋を屋号とした。本家二代三井高平の三女の婿小野田治左衛門によって寛文元年、本町二丁目に傘下の店ではあるが松阪屋として開店し、明和三年に芝口に移った。主題句はこのことを詠んだものである。なお、江戸で松阪屋はこの店のことで、今日の松阪屋デパートとは違う。

芝口へするがの姿を亭本うゑ 安四仁 1
芝口へ引つ切りをはるするが丁 安四信 5

清 賛。

694 ほえたとかへすものかとせげんいひ

山口「吠える」とは動物が吠えるように大声で泣き叫ぶ形容である。女衞が「帰さない」と言っているのであるから、これは何らかの事情で売られて来た娘であろう。自分のこれからの身の上を思いやって泣き叫んでいるのである。哀れな場面である。

ほへるならほへろとせげんそ引くなり 明四松 3
ほへるならうるぞとせげん子をしかり 明五梅 4

清 賛。

49

愛染帖

新家 完司 選

羽曳野市 徳山みつこ

年賀予約まだ朝顔が咲いている

(評) 今年の予約は九月一日から。どのような事情でそんなに早くなったか知らないが、現実離れし過ぎているのではないか。

鳥取市 池澤 大鯨

空き家なら過疎の里にはいくらでも

(評) 狭いアパートでも家賃五万円以下では難しいという都会。過疎地には仕事も娯楽施設も少ないが、空き家だけはいっぱいある。

大阪市 谷口 義

むつかしいことは分かりませんと言う

(評) 賢そうに振る舞おうとするから無理が生じて恥をかくことになる。パカボンのババの言葉を借りると「これでいいのだ!」。

西宮市 片山 忠

次の世はバンダになって生まれた

(評) 空調完備の部屋で、働くこともなく食べる心配もない。神さまか国寶の如く至れり尽くせり。私もそのような身分になりたい。

和歌山市 古久保和子

バン屑を取り合う鳩に似たニュース

(評) 地球規模から見れば失関諸島などバン屑。だが、地下資源が絡んでくるので無視できない。日中共に冷静に対処願いたい。

貝塚市 吉道あかね

指切りをもつ何年もしていない

(評) 中年を過ぎても、小指と小指を絡ませ

て「↑指きりげんまん嘘ついたら針千本のくます」と、素面で出来る人を尊敬する。

大阪市 江島谷勝弘

シンブルな句は6Bで虚飾する
てにをはを未だに使いこなせない

鳥取市 岸本 孝子

スマートなときの写真を持ち歩く
ゆつくりと別れたいから家族葬

田辺市 岡本 昇

台風一過福島の空なお晴れぬ
足踏みの脱穀機には唄がある

河内長野市 山岡富美子

握手した温もりほどの距離がすぎ
羞恥心失くさぬように鏡拭く

堺市 村上 玄也

相撲取りガッツポーズを諫められ
妻よりも早く目覚めて二度寝する

佐賀県 真島久美子

泣き方を忘れたみたい情けない
丁寧な終わりを告げにくる秋だ

三田市 上田ひとみ

栗を買う去年栗の木伐ったので
犬とならアイコンタクト自信あり

弘前市 高瀬 霜石

のんべえは尺貫法で生きている
三食は多いと思ひながら食う

長岡京市 山田 葉子

わたくしはここにいますと金木犀

豊橋市 藤田 千休
シーサーによく似た妻としく枯野

(評) 勿論謙遜だが「最強の相棒」と頼っておられるのだらう。しかし、本句を目にした奥さまから「川柳禁止令」が出そう。

大阪府 米澤 俣子

捨てられぬものに形見とブライドと

(評) たしかに、どちらも捨て難い。しかし、ブライドはしばしば邪魔になるが、形見は筆筒の奥に仕舞っておけば邪魔にはならない。

大阪市 坂 裕之

日帰りのバスツアーでもいる土産

(評) 旅の楽しみの一つは土産を買うことだが、義務的だと楽しくはない。日帰りでも旅は旅。喜ぶ顔を思い浮かべて品定めしよう。

弘前市 今 愁女

晩年の恋はいちやつくこともなし

(評) 若者がいちゃつくのは許せるが、年寄りの気持が悪い。恋をするのは大いに結構だが、歳相応の節度をお願いしたい。

大阪市 榎本 舞夢

ノーベル賞若くハンサム尚嬉し
西宮市 藤本 直

よく解るノーベル賞に大拍手
奈良市 大久保真澄

足元注意畳のヘリが狙つてゐる
奈良市 加門 萌子

少子化の運動会は早く済む
鳥取市 夏目 一粋

欠点も個性なのだが生かせない
大阪市 栃尾 奏子

理想論語るマイクは金メッキ
堺市 内藤 憲彦

お手本にしたい背中がそばにある
堺市 内藤 憲彦

またまた千羽鶴になるハズレ券
河内長野市 穂口 正子

LOVEが無い義理で埋まったカレンダー
三田市 堀 正和

許さへんぶつける石はたとと有る
三田市 堀 正和

その通り朝のコラムの切れがよい
香芝市 大内 朝子

入院へ散髪をして爪も切る
香芝市 大内 朝子

ロゼワイン二杯で行けるパラダイス
紀の川市 辻内 次根

松茸を横目にエリリングですます
紀の川市 辻内 次根

乾布摩擦骨の形が浮き上がる
七十五歳男の尻はグロテスク

酒と歌「愉快スイッチ」入ります
河内長野市 藤塚 克三

遅い朝ワイドショーから血の匂い
鳥取県 加賀田志延

傷跡もわが家の歴史古机
豊中市 水野 黒兔

キャバシティー超えた記憶は辿らない
岡山市 永見 心咲

新任が今日も力んでチョーク折る
大阪市 木村 青生

口紅を塗って元気にするお口
岡山市 工藤千代子

スーパードルマタマゴにまた釣られ
大阪市 井丸 昌紀

イメージの良い人だった酔うまでは
大阪市 井丸 昌紀

爆音でアホを宣伝するバイク
豊中市 松尾美智代

女五人一泊の旅しゃべりすぎ
豊中市 松尾美智代

弾みすぎて帰りのバスは皆眠る
鳥取市 土橋はるお

ボロボロの服着てどじょう掘りする
鳥取市 土橋はるお

安全第一真つ赤な服のお婆さん
備前市 森 ふみか

通帳を開けると煙立ち昇る
備前市 森 ふみか

眉間の皺に塗り込む柔軟剤
備前市 森 ふみか

鏡の中の疲れた老人がボクだ
散骨もいいがやっぱり樹木葬

想う人ズラリ並んでいるあの世
大阪府 古今堂蕉子

ハープティー脱法ハープとは違う
枚方市 丹後屋 肇

透析を読書時間に当てている
枚方市 丹後屋 肇

要支援1のランクに四肢を踏む
西宮市 吉井菜々子

食欲に走る気の毒な私
西宮市 吉井菜々子

皮ジャンでやわな男を防御する
堺市 矢倉 五月

息止めてみれば長い一分間
堺市 羽田野洋介

しくじった後で読んでいる注意書
堺市 羽田野洋介

乗りますよ楽に儲かる話なら
堺市 羽田野洋介

ややこしいやがてそのうち近いうち
堺市 羽田野洋介

あなたより先に逝けぬと思う秋
芦屋市 黒田 能子

一日を楽しく過ごすそれです
芦屋市 黒田 能子

私にも九回裏があるので
大阪市 太田としお

につぼんは偉いと思う無人店
鳥取県 斉尾くにこ

バトカーが居ると自動車遅くなる
浜松市 岡田 史郎

茶がうまいまだまだ心折れずいる
西宮市 牧瀬富喜子

孔子様の生まれた国と思えない
堺市 志田 千代

唐津市 仁部 四郎

長生きは才能ですと医者が言う
神戸市 能勢 利子

松江市 石橋 芳山
富田林市 古田 千華

落し穴嵌ってあげる一度だけ
大阪市 高杉 力

ツツコミをマスター大阪三年目
鳥取県 大塚美代子

自惚れて帰りの道を間違える
鳥取県 俣野登志子

冗談と本音聞き分けられず鬱
枚方市 伊達 郁夫

本音には酒の助けが要るのです
藤井寺市 鴨谷瑠美子

ウエストの辺りに秋を感じとる
京都市 都倉 求芽

秋が来た秋にべんちやら言うお酒
橿原市 安土 理恵

秋ですな粋な小店につい長居
弘前市 福士 慕情

お題目唱え仏を喜ばす
和歌山市 上田 紀子

認知症の世界は限りなく凄
川西市 山口 不動

毎日が生前葬と思つてる

青森県 松山 芳生
高槻市 島田千鶴子

神無月夏の余韻はまだ冷めぬ
米子市 高田 振作

ヘチマよりゴーヤがもてた夏でした
和歌山市 柏原 夕胡

恥をかくのは恥ずかしいことじゃない
河内長野市 梶原 弘光

厄除けにだんじり担ぎ筋肉痛
橿原市 居谷真理子

子を持たぬ娘の髪に白いもの
香南市 桑名 孝雄

大利根も赤城も僕の青春歌
大阪市 笠嶋 恵美

新札のお釣りも味なおもてなし
大阪市 伏見 雅明

言い訳をすぐに信じる人と住む
京都市 三宅 満子

偉人伝読ませたけれど普通の子
鳥取市 近藤 秋星

大器晚成信じた親が馬鹿だった
大阪市 大川 桃花

化粧してやつとスイッチ入る朝
亀岡市 井上 森生

赤スカーフこころぬくぬく風邪引かぬ
藤井寺市 太田扶美代

桃買いに往つてりんごを買つてくる

鳥取市 前田 楓花
鳥取市 吉田 弘子

犬と寝るいい子と話しかけながら
岩出市 村中 悦男

記憶力小犬にさえも負けそう
東かがわ市 川崎ひかり

うちの湯も名湯である旅帰り
消費税上がればゴミは減るだろか
寝屋川市 小谷 滋彦

みちのくの海泳いだか秋刀魚喰う
奈良県 渡辺 富子

しつこさが抜けたら夫はけてきた
泉佐野市 稲葉 洋

眠たいなその内醒めぬ眠りくる
鳥取県 山下 節子

幸せかどうか他人にはわからない
堺市 大和 峯二

年金の暮らしに慣れてこじんまり
瀬戸内市 東横ますみ

節電へ多忙きわめるコンセント
堺市 大隅 克博

ストライクゾーンが違う嫁姑
和歌山市 楠見 章子

曇天ヘシヤッター街は風ばかり
鳥取市 倉益 一瑠

医学書を読んで病を重くする
富田林市 山野 寿之

スケジュール真つ黒にしてよく遊ぶ

塩竈市 木田比呂朗
限界を不意に言い出す足の裏

和歌山県 森下よりこ
昔の映画やたら煙草を吸っている

高槻市 左右田泰雄
八十路でも山盛りランチ平らげる

鳥取市 永原 昌鼓
招かざる虫がひねもす耳で鳴く

高知県 小澤 幸泉
夢の中まだ逃げ道を考える

三田市 田中 章子
青空がとってもまぶしいのも老いか

堺市 増田 和幸
妻旅に何にも出来ず早寝する

尼崎市 春城 年代
曲らんとする腰必死に矯めている

広島市 岸本 清
水溜り冒険心が顔を出す

神戸市 白川 淑子
食堂もシネマも一人自分流

弘前市 稲見 則彦
地球儀の油の切れた鈍い音

大阪市 小泉ひさ乃
秋到来片付けたいし出掛けたい

鳥取市 高浜 勇
国民のガス抜きに鳥ねらつてゐる

鳥取市 岸本 宏章
暴動を愛国無罪とはなんだ

富田林市 中井 アキ
ブランドのジョークが弾む女子の会

神戸市 山口 光久
百均の店がひと時遊ばせる

藤井寺市 高田美代子
アカベラで歌う私流にうたう

鳥取市 大前 安子
油虫あなとも生きるために這う

札幌市 三浦 強一
自分史に怒涛の如き昭和編

西宮市 泉水 冴子
バス待ちの間に三句ほど生まれ

枚方市 松原 保
朝歩くルートを変えた育つ稲

シドニー 坂上のり子
おはようとオクターブ上げ声掛ける

唐津市 樋口 輝夫
金策の苦勞見せないクラス会

和歌山市 松尾 和香
残り時間全開させて生きている

羽曳野市 永田 章司
根回しで予定通りに議事すすむ

鳥取市 西谷 悦子
秋冷えへ温い布団が恋人に

日野市 大竹 一良
古文書を開いて眠る心地よさ

和歌山市 福井 菜摘
追伸に一句を入れて風を待つ

阿波市 三浦千津子
横文字のクイズへ暫し黙っとく

吹田市 野下 之男
今日だけの体育の日のウォーキング

米子市 中原 章子
夫婦でも御免なさいが言える仲

橋本市 石田 隆彦
ガミガミの風吹き荒ぶ倦怠期

貝塚市 石田ひろ子
腹の立つ時は黙ってみかん剥く

西脇市 七反田順子
人情がありすぎて役外される

和歌山市 平田 元三
たつぷりを口が迎えるコップ酒

鳥取県 細田 裕花
団塊のちよびり辛い煮ころがし

大阪市 田浦 實
締切りがあるから老いに締まりつき

西宮市 緒方美津子
方程式解いて娘が針持たぬ

明石市 梶谷 和郎
乗客は寝るかスマホに二分され

紀の川市 楠原 富子
気配りも過ぎれば只の御節介

大阪市 松尾柳右子
テレビから知恵もらうけどすぐ忘れ

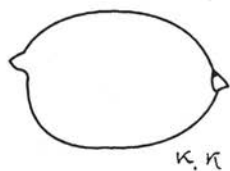
三田市 足立つな子
ふるさとは代替わりして遠くなり

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 756句)



「ガード」 奥田 みつ子 選

人情と美味い酒ありガード下
靴磨き花売りもいたガード下
ガード下屋台仲間の心地良さ
立ち飲み屋やつぱり似合うガード下
ガード下ひと日の癒着くお酒
ガード下天下論ずる爺の酒
ガード下昭和が生きる屋台酒
両親は子どもを守るためにある
定年のそれから妻のガードマン
肉食系女子に守ってもらうべく
錆びた脳磨きオレオレガードする
増税に財布の口をガードする
護身にも団子虫派とカマキリ派
SPでガード出来ない口の咎
かばい立てついたくなる好きな人

奈良県 谷川 憲
池田市 栗田 久子
河内長野市 大島 友子
大阪府 江島谷勝弘
神戸市 山崎 武彦
砂川市 大橋 政良
八尾市 高杉 千歩
京都市 高島 啓子
札幌市 三浦 強一
弘前市 高瀬 霜石
三田市 堀 正和
加西市 金川 宣子
枚方市 海老池 洋
西宮市 緒方美津子
堺市 加島 由一

「ガード」 森山 盛桜 選

大団円ガードしたまま嘘のまま
ガードレールのある道ばかり選ってきた
ボディガードとアッシー君がボクの役
男だからガードになると限らない
ガードレール乗り越えてきたまさか
妻や子のガードのために苦い酒
鼻歌で元氣 私のガードマン
ガードレール命救ったらしい傷
腕を組むただそれだけで身を護る
百歳をしつかりガードする薬
ガチガチに鎧をつけて人恋し
九条でガードされてる草食系
虎の子をガードするのに四苦八苦
善き人のガードの甘い千鳥足
ディフェンスが甘く諸島は蜂の巣だ

備前市 森 ふみか
羽曳野市 吉村久仁雄
西宮市 足立 茂
橿原市 安土 理恵
羽曳野市 徳山みつこ
大阪市 川端 一步
松江市 藤井 寿代
羽曳野市 宇都宮ちづる
吹田市 太田 昭
横浜市 菊地 政勝
犬山市 金子美千代
貝塚市 石田ひろ子
富山市 有澤 嘉晃
穂口 正子
河内長野市 丸山 健三
長野県 丸山 健三

泣き笑い夫がガードの半世紀

地震台風古いへガードをする頭脳

次世代の宝をガード登下校

がちがちのガードで自由まで奪う

暗い道月のガードで歩が弾む

ガードして呉れた父の背うすくなる

ガードマンと挨拶交わす行き帰り

金の力固いガードも挟じ開ける

車道側歩いてくれる優男

守ります風に炎になりながら

我が国のガードを余所の国がする

人命のガードに尽きた消防士

わたくしを守る両手は空けておく

吠え立てる犬は我が家のガードマン

人権と言う名でガードせぬ役所

お転婆がひ弱い兄をガードする

うまい話は乗らぬ虎の子ガードする

お喋りが女性の老化ガードする

ガード越えて私を奪取した夫

一人ぐらし私を守るのもわたし

ジョギングの後ろについてくれる孫

年金にガードされてる定年後

偉くなり悪友たちを遠ざける

河内長野市 谷 久美子

西宮市 亀岡 哲子

鳥取市 吉田 弘子

和歌山市 福本 英子

神戸市 山根 弘子

西宮市 牧瀬富喜子

尼崎市 春城 年代

羽曳野市 永田 章司

篠山市 酒井 健二

大阪市 梶尾 奏子

出雲市 竹治ちかし

三田市 上垣キヨミ

佐賀県 真島久美子

芦屋市 黒田 能子

八尾市 内海 幸生

堺市 梅本 澄空

貝塚市 吉道あかね

米子市 後藤美恵子

奈良市 大久保眞澄

和歌山市 森下よりこ

八尾市 田邊 浩三

寝屋川市 岡本 勲

堺市 奥 時雄

一人ぐらし私を守るのもわたし

天高く妻のガードも元気でず

ガードしてくれるのは近くの他人

どこをどうガードしますかオスブレイ

偉くなり悪友たちを遠ざける

唇が寒くならないようマスク

机上では安全だった防波堤

ガード下それほど自由見付からぬ

限界をガードしながらマイペース

恋拾うガードレールの向こう側

飲めません飲めませんとは言つてある

がらくたでガードされてるこの元氣

積みまけたらガード一挙に崩れそう

朱に染まる余白残しているガード

往く人と来る人守る道祖神

胃薬でガードしてから敵陣へ

ライバルへガードが甘い振りをする

ガードなどいらぬわたしは仏さま

無言劇ガードのいない終電車

ガードした跡が崩れている日記

しがらみもこだわりもないガード下

息抜きにガードも開く時がある

無視という形でガードしてしまう

和歌山県 森下よりこ

松山市 高橋 宏臣

堺市 志田 千代

大阪市 津守 柳伸

堺市 奥 時雄

奈良市 大久保眞澄

橋本市 石田 隆彦

八尾市 田邊 浩三

寝屋川市 小谷 滋彦

松江市 相見 柳歩

三田市 上田ひとみ

大阪市 柴本ばつは

四条畷市 吉岡 修

大和郡山市 坊農 柳弘

大阪府 初山 隆盛

和歌山市 古久保和子

大阪市 井丸 昌紀

鳥取市 夏目 一粹

富田林市 片岡智恵子

松江市 松本 文子

豊中市 藤井 則彦

高石市 浅野 房子

寝屋川市 籠島 恵子

真夏の陽ゴーヤヘチマでガードする

大阪市 板東 倫子

デデ虫をガードするよに雨になる

八尾市 宮崎シマ子

デートにはいつも弟連れてくる

弘前市 稲見 則彦

領海侵犯日本のガード甘すぎる

鳥取市 山下 凱柳

国よりも党をガードの永田町

宇部市 平田 実男

ガードレールに手向けられてる白い花

堺市 村上 玄也

子にガードされても哀し老いの意地

和歌山市 堀 富美子

笑わせて心のガード解きほぐす

松江市 三島 淞丘

鎧兜脱ぐと景色が丸く見え

大阪府 神野千恵子

ガードしてくれるのは近くの他人

堺市 志田 千代

定年後妻のガードで生きてます

大阪市 大西 晴雄

銀行の監視カメラにVサイン

和歌山市 古久保和子

セキユリティガードする物無い庶民

箕面市 出口セツ子

火も水も防いで詩人にはなれず

橿原市 居谷真理子

淋しくて下手なジョークで身を守る

藤井寺市 太田扶美代

ど忘れのガードに回る電子辞書

大阪府 畑中 節子

往く人と来る人守る道祖神

大阪府 初山 隆盛

初対面笑顔でさりげなくガード

鳥取県 細田 裕花

あの世から見えない父母のガードある

豊中市 池田 純子

秀 句

少年が夢を磨いたガード下

寝屋川市 荒川 鈍甲

子を守る母のガードの揺るぎない

和歌山市 福井 菜摘

戦後史を書くに欠かせぬガード下

大阪市 升成 好

裏木戸に太い横木を挿す安堵

シドニー 坂上りのり子

厄介な男をシャットアウトする

和歌山市 柏原 夕胡

ガードしていても囁きには弱い

倉吉市 牧野 芳光

雑音をガードしきれぬ二重窓

京都市 高島 啓子

攻め切るか逃げてしまいかガードの目

大阪市 古今堂蕉子

わたくしのガードレールは傷だらけ

西宮市 吉井菜々子

守ります風になりにながら

大阪市 栃尾 奏子

雑学を積んで余生をガードする

松江市 三島 淞丘

人間のガードを喰う自然界

鳥取市 中村 金祥

食べるなど全身ガードしてゐる海胆

池田市 上山 堅坊

大切なところ針葉樹で囲む

出雲市 伊藤 玲子

来客が好きで番犬無理みたい

大阪市 原田すみ子

どこまでも爪は隠してイヤリング

富田林市 中井 アキ

火も水も防いで詩人にはなれず

橿原市 居谷真理子

保護色に染まりはんなりガードする

和歌山市 武本 碧

ぬるま湯につけるとガードよくしゃべる

瀬戸内市 東横ますみ

風船でいたくてガード下を出る

鳥取県 斉尾くにこ

護身にも団子虫派とカマキリ派

枚方市 海老池 洋

花を買う男の背なほノーガード

大阪市 升成 好

秀 句

華満ちた所で崩れだすガード

松江市 石橋 芳山

弓形の眉毛ガードを越えられず

八尾市 中岡 妙

守護霊に押されて一歩前へ出る

弘前市 高瀬 霜石

民族の詩歌 (7)

—音便と川柳

三好 專平

川柳塔八十周年記念誌が、二〇〇四年に出ている。その中の河内天笑氏の句より

阪神に恋煩ろうてから久し

悪人もうれしい時は笑顔よし

人間の夢は力をもっている

恋甘しその百倍もくるしんで

この四句のなかに、所謂「音便」がすべて含まれている。「ウ・イ・促・撥音便」の四つである。「H」「K」「T」「M」の子音が脱落し、母音のみとなり、発音しやすくなっている。子音はどうしてもあれこれと口の中や唇を使う、それで「しんどい」。このエネルギーを省略しようと、人間はするのである。天笑氏の句に音便が多いから取り上げたわけではない。民衆の詩である川柳は、口語を多用するので、どうしても音便が多くなる。川柳

塔9月号「水煙抄」より

冷奴に飽きてきた頃秋がくる

ますみ

黄昏に漂っている罪の数

ちよ子

にがい水幾度も飲んで強くなる

美知江

叱責も時おり呆け笑っておく

美緒子

「ウ音便」は少なく、「つ」が圧倒的に多い(約半分)。次に「イ音便」。水煙抄

二〇四人、七四六句中、音便は全部で100個使われている。ちなみに、カタカナは外来語で一八六個、和語で五三個。時代の趨勢というべきか。

大阪弁は、音便の多い言葉である。商人の街らしい。てっとり早く、ざつぱらんにお客をひきつけんならん。「おおきに」すんまへん「よっしゃ。+まかしといてんか。」

この頃の若もの言葉に、「チョウ好き」「メツチャイイ」「デモる」「マジスカ」最初と最後だけで、真ん中を言わない「中抜き言葉」が流行っている。もちろんこういう言葉は昔から「隠語」として存在した。簡便性というよりも、秘密性・仲間意識をしめすものであった。ヤクザや警察・学生のあいだに多いこの省略語もある種の音便といえなくもない。五七五の短い詩には便利である。桜桃忌・原爆忌などというのも、季語の代わりにとい

うよりも「季語」として使われる。象徴表現というべきか。

高倉健が「普通の演技が一番難しい」と、主演映画「あなたへ」の感想の中で言っている。彼のからだから出てくる味わいは絶品である。音便も、表現を自然に近づけよう、時代の流れに合わせようとして生まれてきた。平安時代のはじめからこの音便は起っている。奈良時代にはほとんどない。生活の変化が言語にもたらした変化であり、現代ではそれが加速し、複雑化している。――平家物語になると、武士の言葉がどんどん音便を増やした。さらに、江戸時代になると、上方が文化の中心地になり、音便が大いに増えた。

日本語は膠着語で、いくらでもベタベタと続けることや外来語を取り入れることができる。造語力は豊かである。ドイツ語もおびただしく続けられるが、日本語にはかなわない。「東京特許許可局総務部秘書課兼受付主任補佐係北野華子」というのがあった。

「冷奴に飽きてきた頃秋がくる」では味気ない。音便や省略の魔力にとりつかれる。「長崎ばってん、江戸べらぼう」と言われるように、地方には豊かな音便がある。これを川柳に活用しない手はない。

『麻生路郎読本』 余滴 (12)

神経衰弱の路郎 ②

栗原道夫

昭和2年3月1日(火)に長男ロンドン
を亡くした路郎は、ロンドンの一周忌を迎
えるころ神経衰弱になった。

「川柳雑誌」昭和3年3月号に、路郎
は「長男ロンドンの一周忌」の題で、次の
七句を発表している。

お父さんはやはり 川柳々々云つてるよ
お前があたりと思ひ出すと 煙草ばかり
吸ふ

お父さんはネ 覺束なくも生きてゐる
日あたりのいゝうちだが物足りなさに變
りない

信心をはじめたおツ母さんも可哀さうだ
お父さんの神経衰弱がわかるかい
湯さめするまでお前と話そ 夢に來よ

これらの句は「長男ロンドンの一周忌」

という題があつて味わるもので、一句と
しての独立性には欠けるが、亡き子供を偲
ぶ路郎の思いが切々と伝わってくる。「日
あたりのいゝうち」は、ロンドンを亡くし
た鳴尾から引越した南北のあいた日当た
りのよい西成区千本通の家のこと。「おッ
母さん」は蔑乃のこと。学生のころキリス
ト教の洗礼を受けた蔑乃が、また教会に通
い始めたのだろうか。六句目に「お父さん
の神経衰弱がわかるかい」がある。

「川柳雑誌」同年8月号「編輯後記」に、
「路郎主幹は晩春以來神経衰弱で弱つて
居られます、回春を祈つて止みません(革
郎生)」とあり、数ヶ月経つても神経衰弱
が快復していないことがうかがえる。「川
柳雑誌」同号に、路郎は「生の疼き」の題
で、次の八句を発表している。

お辭儀する醜體の見ゆ 吞めばとて

子よ 妻よ ばらばらになれば淨土なり
亡きロンドンを思ふ(二句)

みじかしといふか ほんとに生きた子に
戯れに死ねれば こころやすからん
今日も店にゆきたるのみ 机のほこり
この上の貧しさへ落ちこまんか 佳し
わがままを 父 特權と思ひあらず
俺の子といふのがあつて おそろしく

「亡きロンドンを思ふ」という前書き
のある句は一句だけだが、その他の句(「お
辭儀する」の句を除く)も亡きロンドンの
ことが念頭にあつて作られたものである
う。有名な「子よ 妻よ ばらばらになれ
ば淨土なり」は、このときの作。「今日も
店に」の「店」は、路郎の勤務先の桃谷順
天館のことか。神経衰弱で仕事が手に着か
ない様子を詠んだもの。

そして、函館の亀井花童子から「來遊せ
ずや」との手紙を受け取つていた路郎は、と
うとうと北海道に旅立つてしまふのである。

「川柳雑誌」同年9月号「編輯後記」に、
「路郎先生は遂に神経衰弱が重くなられ、
八月十七日夜、月評會に出席されながら評
をされず北海道に旅立たれて了つた。北海

道の清涼な空気と、暖かい人情は必ずや先生
の病魔を退治して下さるものと期待して
ゐる（革郎生）とあり、10月号「編輯後記」
には、（▼路郎先生は八月十六日の夜漂然
として羽越線の列車に乗り北海道へと旅立
たれた。北海道では函館の龜井花童子氏の
御好意に依り同氏の宅に滞在中諸所を見物
されて、北海道の自然の美に打たれて或
程度まで病苦をも忘れられたさうである。

▼二十日の朝偶然來函された川上三太郎、
川柳雨吉（筆者註―大正14年前田雀郎の都
川柳会創立に參画。河柳雨吉）の兩氏と會
はれ、渡島川柳社主催で同夜路郎三太郎兩
先生の爲めに盛んな歡迎會並に歡迎宴が
催されたさうです。▼同夜先生が直ぐに歸
られると思はれ尾山夜半杖氏が遠く札幌か
ら愛嬢を伴れて出席されたのに對し、非常
に感激されたと云ふことです。▼又小樽で
は柳吟社の諸兄、氷原社（筆者註―代表は
田中五呂八）の方々の好意で漫談に時を移
し、驛まで特に見送つて頂き無事に函館に
歸られ、二十六日に函館を出發し、青森で
喜田飯山（筆者註―川柳雜誌青森支部幹
事）、東京で岩崎柳路（筆者註―川柳雜誌
東京支部幹事）の兩君に會はれ、二十八日

に歸阪されました。▼路郎先生は北海道滯
在中、龜井花童子の好意で札幌、小樽函館
の三市を見物され、神尾三休氏（筆者註―
大正6年、札幌川柳會とオホツク會を合わ
せて札幌アツシ會を結成、「アツシ」發行）
と當別のトラビスト修道院を訪ひ、函館立
待岬の共同墓地にある石川啄木の碑に詣で
られるなど、短時日の間に諸所方々の見物
が出来たことを非常に喜ばれ、東道の役
を勤めて下さつた方々に感謝されてゐまし
た。（革郎記）とある。

路郎の旅立つた日が、9月号「編輯後記」
では「八月十七日夜」、10月号では「八月
十六日の夜」となっている。次に紹介する
「川柳雜誌」昭和4年8月号に掲載された
路郎のエッセイによると、8月19日に函館
立待岬を訪れたことが知れる。當時の交通
事情を調べた訳ではないが、17日の夜の
發で19日に函館で遊ぶのは無理だと思われ
るので、16日の夜の出發が正しいと思う。

私墓

麻生路郎

（前略）

昨年の夏、函館に遊んだ時、花童子の案
内で歌人石川啄木の碑を訪れた。碑は立待

岬の共同墓地で、すぐ海に臨んだところに
あつたが、その碑が豫想以上に立派であつ
たのに驚かされた。東海の渡島ヶ磯で泣き
ながら蟹と戯れてゐた貧乏詩人の啄木の碑
としては、頗るふさはしくないほどに堂々
とした碑であつた。

『私が死んだら』と私は花童子に「私の
碑は餘り立派なものでなくていい。寧ろ墓
は淋しい位がいい」と思ふ。ただこの立待
岬の尖端に建てられたら建て、欲しい」と
云つた。『尤もこれは一つの空想に過ぎな
いが、人間の空想は時に實現せないもので
もない。空想さへせぬことが實現すること
さへあるのだ。おそらく啄木もこんな立派
な碑が、こんなところに建つとは夢にすら
見なかつただらうと思ふ』といふやうなこ
とを話した。

花童子も『僕が出来たら建てあげよう』
と慰め顔に云つて呉れた。私は死んでから
のいい落ちつき場所が出来たやうに思つた。
それは八月十九日の美しく輝いた日だつた。

啄木の碑は岬の尖端から二丁ばかりの手
前にあつたが、それから更に二丁ばかり手
前に自然石の手ころの墓があつた。私はそ
れを指さして『墓はこの位でいい、ね。あま

り堂々とした墓は、しんみりとしたものを持たないからいやだ。これ位な墓なら知らぬ人の墓でも何んだか談しかけたいやうな気がする」

と、いふと花童子は、その墓の碑面を眺めて

『これは若原鎮吉の墓だよ』

と、彼も不思議なところで不思議なものを見たやうに云つた。

『若原鎮吉といふと？』

『鎮吉は新聞記者で、川柳もやつてゐたが若くして死んだのだ』

『さうかね。さう云へば川柳家に鎮吉といふ名があつたやうな気がする』

こゝで花童子と私は暫くいろいろなことを談合つた。

偶然にも私は函館まで来て川柳家の墓に呼びかけてゐたのであつた。啄木にしても、鎮吉にしても若い詩人は斯うして永遠に眠つてゐるのであつた。が、それにしても六厘坊の墓が未だにないといふことは寂しいことだと思つた。何かの機会に若くして死んだ天才六厘坊の墓だけはどつかへ建てやりたいと思つてゐる。

(以下略)

「川柳雑誌」昭和3年10月号「各地柳壇」に「路郎氏 三太郎氏 歓迎句會(函館)」の報告を花童子が書いてゐる。

〔路郎氏は憧れの北海道へ來られた。そして*三太郎氏と偶然にも落合つたので、身体が勝れない路郎氏に御迷惑と思ひながらも、三太郎氏と同伴された、雨吉氏及び札幌から路郎氏に逢ひに來た夜半杖氏等の爲に、八月廿日午後五時より句會を開き閉會後席を改めて歓迎宴に移り主客一人残らず隠し藝に柳談に花を咲かして散會せるは拾壹時だつた〕

*「東北川柳」昭和3年8月28日発行「編輯机上」で、大谷五花村が次のように書いてゐる。(☒川上三太郎君が突然、札幌へ行つて、放送するのだとして、汽車の中から投じた、葉書を呉れた、飽きが來て、聞いた事もない、書齋のラヂオの前に久し振りで腰を落ち着いたら、仲々ウマク、やつてのけたのに感心した、三太郎通になつて、家内迄がウマイウマイとほめながら、デモ少し、御急ぎになつていらつしやるとぬかした)

歓迎句會の路郎の入選句と選句を挙げておく。

「板」

花童子選

踏みならせば板に悲しみのみ残り
板掘に捨兒の聲のいたくし

「泡」

夜半杖選

凡人のたゞ見れば泡がつぶやきぬ

「蟲」

雨吉選

餌箱から蚯蚓が出てゐる雨つゞき

虫をおそろゝ妻の美し

「半分」

三太郎選

半分の返事それと云つづく

路郎選「天井」の三才と軸吟。

(人) 口開いて寝る病人と天井と 三太郎

(地) 天井へ兒の可愛さが浮いて來る 狂水

(天) おゝ狂人青天井へかけた腰 吐牛

(軸) 奥様一人天井が鳴る 路郎

棄鉢は天井の知つた事でなし 同

北海道で路郎が世話になつた亀井花童子

は、明治26年2月2日(木)北海道函館区

(現・函館市)に生まれ、昭和32年6月20

日(木)に、満64歳で死去。大正7年、渡

嶋川柳社を創設、「忍路」を創刊、函館柳

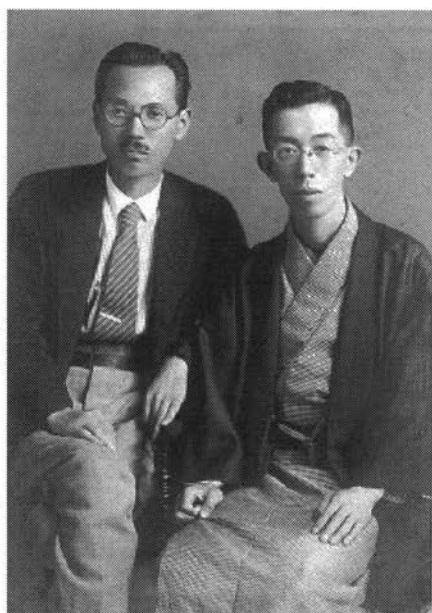
界の礎石を築く。小林不浪人と共催で海峽

親善川柳大会を開催。私財を投じ関東・関

西の著名柳人を招聘した。(川柳総合大事典

第一巻人物編) 参照

「川柳雑誌」3号（大正13年4月15日発行）の「編輯後記」に、〈北海の健吟家龜井花童子が三月十四日に入社した。同時に第十二支部を函館市青柳町五〇番地に置くことになった。既に三月二十五日には同地で第一回の支部句會を開催して參會者二十



花童子（右）と路郎（左）・札幌今井呉服店にて。写真提供は西村哲夫氏。

その邊で探せば判る丈たけを聞き
平常着ふだんぎを買かふて呉くれるも夫つまであり
淺ましい心こころを起おこす小間使こまゑひ

花童子は、大正14年4月に来阪し、川柳雑誌社は、19日に花童子歓迎句會を開催している。五葉・水府・紋太をはじめ五十数名の出席者であつた。また、翌年5月にも来阪した。「川柳雑誌」

（大正15年6月1日発行）「編輯後記」に、〈▼函館の同人、龜井花童子が来阪したので十九日の夕南で逢ひ新町の九軒で呑んだ。翌

二十日の夜は同人の召集を行ひ「落語を聴く會」（筆者註）北陽の花月で初代春団治を聞いた）をやつた。（中略）花童子は廿二日に大阪を立つた。又今年の秋か來年の春には來るよと云つて梅田驛頭で別れた。窓硝子を越して夫人の微笑が見えた」とある。

（一）龜井六郎（二）花童子（三）花玉門（四）函館市青柳町五〇（五）明治廿六年二月二日生（六）貸地業（七）「直つすぐに歩けば人に突當り」（八）中肉中背にして従順な女（九）「ポイントのところで一搖れ眼をさまし」（一〇）長唄、芝居、落語（一一）有（一二）趣味を餌に鯛を釣る奴（一三）大正三年春

「又今年の秋か來年の春には來るよと云つて」とあるが、昭和2年は路郎の家族が皆倒れ、長男ロンドンが亡くなつたため、花童子が来阪することになつた。そして昭和3年、花童子は友情から神経衰弱の路郎を北海道まで呼び寄せたのであつた。

当時の「川柳雑誌」には「川柳家の戸籍調べ」という欄があり、龜井花童子は「川柳雑誌大正14年11月号に掲載されている。次の質問事項に本人が答える形である。

（一）姓名（二）雅號（三）別號（四）現住所（五）生年月日（六）職業（七）好きな句（八）好きなタイプの女（九）自信の句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）嫌ひなもの（一三）川柳に手を染めた年月

質問に対する花童子の答が、
（一）龜井六郎（二）花童子（三）花玉門（四）函館市青柳町五〇（五）明治廿六年二月二日生（六）貸地業（七）「直つすぐに歩けば人に突當り」（八）中肉中背にして従順な女（九）「ポイントのところで一搖れ眼をさまし」（一〇）長唄、芝居、落語（一一）有（一二）趣味を餌に鯛を釣る奴（一三）大正三年春

二名といふ盛會振りであつた」とあり、花童子は5月号に「川柳塔」欄へ初投句、6月号では、次の六句が巻頭を飾っている。
葉櫻へ来て物足らぬ顔で呑み
何時も來る八百屋の聲を丁稚眞似
朋輩のよしみ元結二本借り

「閉じる」

大橋 政良 選



眼を閉じて少年の夢空を飛ぶ
閉じこめたものを忘れた玉手箱
決断が付かず雨傘閉じたまま
エピソードどんな言葉で閉じようか
言いつ分を閉じた口からカニの泡
孫の顔見ると財布は閉まらない
本を閉じしばらく夢の中にいる
閉店セール開店よりも多い客
閉店のセール人出は新記録
今日の無事感謝で閉じる赤ワイン
目を閉じて心も閉じて黙り込む
大好きなあなたが逃げぬよう閉じる
目を閉じて無念夢想の境地なり
見たい夢あるからそっと目を閉じる
後継ぎがなくて老舗の消えてゆく
心配で閉じることなき埴輪の目
金に負け口を閉ざして貝になる
人生の扉を閉じる音がする
ピリオドを打ってスタート第二幕
バイオリズム今は心を閉じている

弘前市 岡本 花匠
三田市 田中 章子
和泉市 横山 捷也
鳥取市 深澤千恵子
鳥取県 齊尾くにこ
河内長野市 松岡 篤
八尾市 村上ミツ子
大阪府 米澤 俣子
日高市 根岸 方子
京都市 榊本 宏子
鳥取市 谷口回春子
香芝市 大内 朝子
大阪市 吉村 一風
大阪市 高杉 力
堺市 澤井 敏治
高槻市 富田 美義
鳥取市 夏目 一粋
宝塚市 丸山 孔一
大山市 吉田 幸子
羽曳野市 徳山みつこ

目を閉じて風の音など聴いている
閉じた眼に母さんいつも若いまま
鈴虫が命を閉じる夢花火
目を閉じて思う昭和の上り坂
目を閉じていいことだけをフアイルする
ぴったりと口を閉ざした貝の意地
幹事ではないので今日は貝になる
閉会の辞なら僕にもやれそうだ
閉じこもる鬱が飛び立つ秋の空
どうしても見たいあなたのグーの中
目を閉じる極楽浄土阿弥陀様
今にして封印をする長い恋

佳

大洲市 花岡 順子
河内長野市 山岡富美子
弘前市 高森 一吞
亀岡市 井上 森生
和歌山市 武本 碧
今治市 渡邊伊津志
明石市 梶谷 和郎
香南市 桑名 孝雄
池田市 上山 堅坊
唐津市 坂本 蜂朗
唐津市 岩崎 實
京都市 坪井 孝一
奈良市 米田 恭昌
高槻市 富田 保子
河内長野市 藤塚 克三
札幌市 三浦 強一
弘前市 高瀬 霜石
藤井寺市 鈴木いさお
堺市 遠山 唯教
札幌市 小沢 淳

目を閉じてみえないものが見えてくる
目を開けてみえないものが見えてくる
口堅く閉じて語らぬ貝になる

軸

「けじめ」

宮 崎 シマ子選



名司会話のけじめ旨くつけ

犬は犬小屋けじめだと言いきかす

長話妻のけじめはほなまたね

いじめつつけじめが欲しいお友達

アメリカにイエスイエスでノーがない

人間らしく育てる為のアメとムチ

紅葉して冬へのけじめ落葉樹

遊びアリとけじめを付けた働きアリ

つかの間の虹にけじめの文字が無い

けじめひとつ洗い流した通り雨

夫婦にもけじめがあつて車間距離

娘の脱皮心につつけ糸残し

昨日と今日のけじめをつける日記帳

私利私欲けじめ逆さに浮いている

百円を借りつ放しのままである

妻は鬼いじめに近いけじめ決め

エンディングノートに書いた尊厳死

SOSまで金を出さないことにする

夫婦でも朝の挨拶手を抜かぬ

刺青はけじめのしかた知っている

高槻市	島田千鶴子	豊中市	吉田 陽子	吹田市	水野 黒兎	堺市	増田 敏子	西予市	黒田 茂代	鳥取県	竹信 照彦	亀岡市	井上 森生	長野県	丸山 健三	三田市	久保田千代	貝塚市	吉道あかね	神戸市	山崎 武彦	豊中市	松尾美智代	八尾市	中岡 妙	堺市	志田 千代	河内長野市	藤塚 克三	札幌市	三浦 強一	和歌山市	柏原 夕胡	明石市	桃谷 和郎	弘前市	高森 一吞
-----	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	----	-------	-------	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------

印籠が無くてけじめをどうつける
生きている内にお金は使い切る
くよくよのけじめをつけた論吉殿

九条がけじめ日本の今がある
一円玉割勘用に用意する

兄弟のけじめに兄を立てておく
人からのけじめは痛いものがある

泣いて泣いて泣いてけじめがつきました
両親をあんた等とは呼ばせない

過去帳に薄墨色で書くけじめ
二世帯で住んでけじめのアレやコレ

限りなく灰色黒は黒でしょう

佳

ごめんねが言えたらけじめつくな
屈しない媚びないすばらしいけじめ

竹の節一つひとつが関所です

娘の掌のひとつの駒になるつもり

シルバーもけじめ忘れた夢を抱く

人

逆境を哭くか試練と割り切るか

地

けじめつけ切り取り線の外にいる

天

母と子のけじめ産声その日から

軸

デパ地下で財布のけじめ守ってる

四条畷市	吉岡 修	藤井寺市	鈴木いさお	鳥取県	山下 節子	西宮市	泉水 呀子	奈良市	大久保真澄	和歌山市	福本 英子	藤井寺市	加賀田志延	三田市	尾崎 一子	大阪市	柴本ばつは	堺市	矢倉 五月	東大阪市	北村 賢子	鳥取市	大前 安子	鳥取県	石谷美恵子	海田市	小谷 小雪	富田林市	中井 アキ	池田市	上山 堅坊	弘前市	高瀬 霜石	神戸市	山口 光久	三田市	上垣キヨミ
------	------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------

「しんしん」

吉田 弘子 選



しんしんと波乱の年が暮れてゆく
クライマックスしんしんと降る紙の雪
しんしんと切々と聞く津軽三味
雪しんしん夫の残業待つ夜更け
後悔の念がしんしん胸を噛む
沖繩の音がしんしん胸に浸む
しんしんと心に滲みた母の愚痴
人垣へ興味しんしん背伸びする
答え出ぬまましんしんと夜が更ける
終活に興味しんしん老い二人
老いてまだ興味津津袋とじ
聴診器命の鼓動覗いてる
興味しんしん女のサブリ無駄ばなし
しんしんとトトロ居そうな深い森
新進へ道譲るまであるドラマ
降りやまぬ雪が無口な街にする
無医村の風しんしんと冬に入る
しんしんと冷えた視線が胸を刺す
雪しんしん微罪を隠す雪の嵩
しんしんと脳に染み着いてるシヨパン

泉佐野市 稲葉 洋
京都市 榎本 宏子
奈良市 加門 萌子
藤井寺市 若松 雅枝
鳥取県 石谷美恵子
鳥取県 竹信 照彦
鳥取県 谷口回春子
大山市 金子美千代
和歌山市 福井 菜摘
高槻市 富田 保子
富田林市 山野 寿之
大和郡山市 坊農 柳弘
高槻市 富田 美義
東大阪市 北村 賢子
鳥取県 西谷 悦子
鳥取市 岸本 宏章
紀の川市 宇野 幹子
吹田市 木下 敏子
弘前市 福士 慕情
海南市 堂上 泰女

人生の紆余曲折をしんみりと
石塔の無口しんしん胸を刺す
六根清浄朝靄ついて登頂する
母さんの繰りごと聞いている小雨
心神は丈夫蹴つても叩いても
光陰の如く駸駸喜寿傘寿
屋久杉の栄枯盛衰しんしんと
しんしんと不器用になる十指だ
裏切りへ心しんしん氷点下
心身の違和感見せる赤い服
しんしんと湧き出る子らの好奇心
しんしんと声なき森の道を行く

佳

折り返す道しんしんと無に迫る
分け入ればしんしんとする神の森
興味津津無限の夢ノーベル賞
しんしんから始まる冬の物語
愛された記憶が積りだす深夜

人

しんしんと出雲大社に神集う

地

読経する迷いしんしん浄化する

天

しんしんの社の奥に棲む神話

軸

吹雪よりしんしんが好き山静か

大山市 吉田 幸子
富田林市 中井 アキ
弘前市 今 愁女
弘前市 高瀬 霜石
鳥取市 福西 茶子
堺市 澤井 敏治
大阪市 柴本ばつは
三田市 堀 正和
和歌山市 武本 碧
堺市 荻野 像山
堺市 村上 玄也
高槻市 片山かずお
八尾市 宮西 弥生
大洲市 花岡 順子
松江市 河西 草庵
青森県 松山 芳生
鳥取県 斉尾くにこ
米子市 高田 振作
河内長野市 藤塚 克三
出雲市 竹治ちかし



川柳を詠った川柳

九月三十日に鳥根県川柳連盟の大会が開催されましたが、その席上での「おはなし」を依頼されました。演題は「川柳の理論と実践」と事務局から指定がありました。これは拙著と同じですので、「私の本についてお話しするのですか？」と訊ねましたところ「それでも結構ですし、別のことで構いません」ということ。講演時間は一時間とのことでした。

自著については自慢臭くなりがちであり、堅い話になりまずので半分にして、あとは肩の凝らない「川柳を詠った川柳」を取り上げてコメントしたのが左記の句です。作句の苦労など共感できる内容が多いと思いますので、鳥根県大会に出席された方には重複しますが、ご紹介させていただきます。

【私と川柳】

とりあえずやってみたのが今の趣味
飛び込んで泳いで趣味の深いこと

川柳が手頃な杖になっている
川柳と酒でこの世の春を生き

私の中心線に一行詩

私のサブリメントは五七五

【作句の苦労】

いいヒント探し求めてウォーキング
句が出来ず遠回りする散歩道
雑踏で五七五を拾ってる
濡れた手で句想メモする台所

西	坂	田	亀	江	笠	大	上	竹	落
出	本	邊	尾	島	嶋	内	山	信	合
楓	蜂	浩	邦	谷	惠	朝	堅	照	文
楽	朗	三	彦	弘	美	子	坊	彦	彦

雀チーク便座ホコホコ一句練る
トイレから生まれた句でも天を突く
坊さんのお経聞きつつ句をひねる
句のネタを時どき拾うコラム欄
脳味噌を耕す辞書と赤いシャツ
川柳家の辞書に退屈見当たらず
字余りを気にかけて過ぎて句が出来ず
推敲のあけく字数が不足する
四苦八苦初心忘れて句に迷う
お静かにいまは没句の化粧中
嬉しい日次々浮かぶ句のヒント
鉛筆を舐めても知恵はもう出ない
錆止めに恋だ愛だの句を作る
体調を崩しいい句が浮かばない
冬枯れに抜けぬ甘さの五七五
錆びた脳蘇生させてる五七五
自分の句忘れて同じ句を作る
正直に詠んだつもりでもめる
夜よりも朝の作句が生きがい
生きざまが句に現れてくる怖さ
豊満な胸より欲しい豊かな句
自分から惚れ込む粹な句でなくちゃ
失敗にただでは起きぬ句を拾う
先送りしてもいい句は生まれ
句が出来ぬままの姿で寝てました
句吟する枕にボールペンの跡

加	家	中	大	井	谷	田	岸	志	金	石	飛	田	片	古	平	藤	井	水	有	乙	蘭	泉	岩	中	太
賀	田	原	川	上	中	本	本	田	森	田	永	中	山	久	田	田	上	野	本	倉	田	水	崎	宇	田
志	章	章	桃	森	久	章	孝	千	德	隆	ふ	章	かず	保	実	千	勝	黒	武	史	獏	牙	玲	秀	とし
延	寛	子	花	生	美	子	子	代	三	彦	り	子	お	和	男	休	視	兎	隆	史	沓	子	子	四	子

初級教習室

題 — 隠れる

前 たもつ

題「隠れる」のピンチヒッターを何の準備もないまま急に引き受けることになりました。ご了承ください。一つだけ思っていることは作者の気持、原句の表現を余り損わないように添削できればということです。

【自動詞と他動詞】

題の「隠れる」は自動詞です。他動詞「隠す」でつくっている句が3分の1程ありました。私は基本的には自動詞と他動詞は区別する方ですが、今回は両方対象としました。

原身を隠し偽名をつかう哀れ人 つな子

添身を隠し偽名をつかう逃亡者

原雑踏に身を隠しての逃亡犯 紀雄

添雑踏に身を隠しての逃亡者

原新婚時隠した角が少し見え 開子

添新婚時寝ていた角が見え隠れ

後にも「隠す」の句が出てきますが、少し工夫すれば自動詞になります。

【字足らず字余りの句】

原甘い誘いきつと謎が隠れてる (株) 玲子

添甘い誘いきつと企み隠れてる

原脇役は主役に隠れて味を出す 青生

添脇役は主役に隠れ味を出す

原かくれんぼ上手く隠れて忘れられ (徳) 正子

添かくれんぼ上手く隠れて忘れられ

玲子さんの句は中六の字足らず、後の二句は中八の字余りの句です。

【五七五の順を入れ替える】

原隠れてる松茸探すスキの鍋 ひろ子

添松茸が隠れたままのスキの鍋

原隠れんぼとつて替った塾通い 史郎

添塾通いとつて替ったかくれんぼ

原汚染ガラ隠れる所我が町で 定廣

添我が町に隠れる所あるガレキ

原厚化粧しあわせ皺が隠れてる 滋彦

添しあわせの皺が隠れる厚化粧

句を読み返して、流れやリズムが悪い時は五七五の位置を入れ替えてみてください。

【意味が重なる表現】

原隠しても仕草少しも隠せない こずえ

添隠しても仕草にちゃんと出ています

原優勝の陰に隠れた控えの身 富子

添優勝の隠れて磨く控えの身

原隠れみの後ろ盾には役立たず 勝治

添隠れみの魂胆見えて役立たず

陰と隠れる、隠れみのと後ろ盾は同じ意味

の言葉はどちらかを省く方がよい。

【かくれんぼの句】

原かくれんぼ隠れて寝わり大さわき 久子

添かくれんぼ寝込んでしまいい大さわき

隠れて寝おりは文語体、上五とも意味が重なります。

原子供時代思い出させる隠れんぼ 雄太

原孫の足見ても見ぬ振り隠れんぼ 温子

この二句は添削不要です。今回の句の中で「かくれんぼ」が一番多かった。ここで墨作二郎さんの名句をご鑑賞ください。

かくれんぼ 誰も探しに来てくれぬ

【少し推敲すればよくなる句】

原ドック入り隠れた病氣あぶり出す 憲

添ドック入り隠れた病 名乗り出る

原支払い日都合が悪く雲隠れ 克三

添支払い日義理を欠きます雲隠れ

原隠れてもどうせ尻尾をすぐに出す 凱柳

添隠れてもどうせ尻尾を出すあなた

あなたの一言で句が生き生きしてきます。

原隠れたいつらい運命身の上だ 英男

添隠れたいつらい運命身に背負い

「運命」にさだめとルビあり、読みはうんめい。

原隠れた才あると信じて精進す 利子

添隠された才能信じ辞書を繰る

原初めてのお使い隠れついていく 治子

添 お使いへ隠れるようにしていく

お使いについて行くのだから、「初めての」の書き出しは省く方がよい。

【少し直すだけでよい句に】

原人 知れず応援をする隠れファン きつこ

添 澄まし顔で応援する隠れファン

原大臣の椅子が許さぬ隠しごと (大和) 子

添 大臣の椅子のあたりに隠しごと

肩の力を抜いて直すという句になります。

原太陽も隠れたい日があるんだよ (蘭) 洋子

添 太陽も隠れたい日があるだろう

原 バトカーが隠れて見張り真剣に (石) 久子

添 バトカーが隠れて見張るその視線

「見張り真剣に」は語呂はもうひとつ。

原 虫喰いを隠れる部位に仕立替え 絹 枝

添 虫喰いを隠れる場所に仕立替え

原 いい話裏に隠れる落し穴 志津子

添 いい話裏に潜んだ落し穴

中七を「裏に潜んだ」と題を読み込まないのも作句の一つです。後にも出てきます。

原 隠れ里一人じめするこの至福 (富) 恵子

添 隠れ里一人締めしている至福

原 読み書きができて隠れた認知症 大子

添 読み書きのお陰隠れた認知症

原 隠れないで勇気を出そう好奇心 律子

添 隠れない勇気が誘う好奇心

原 縄飛びで見え隠れする膝小僧 晴 雄

添 縄飛びの見え隠れする膝小僧

原 人見知りそつと隠れる母の陰

添 人見知りそつと隠れる母の裾

【題を読み込まない句】

原 さりげなく話す言葉に情を見る 安子

原 見てる間に霧が足場を覆う山 (畑) 節子

原 どなたかな顔一ぱいのマスクして

題を読み込まない句は少なかつた。

【入選句】

逃げ隠れしても消せない原発禍 利 夫

原 子炉の隠れた恐さあれやこれ 一 泉

病む人に病名隠すつらい嘘 ミヨノ

一人旅蕎麦の花咲く隠れ里 ひろ子

ビル谷間隠れる様に生きる蟻 心 咲

好きこそが隠れた才を呼び起す 寒 之

シワの中隠れくぼが苦笑い 友 子

顔の染み隠れる術をあれこれ 眞砂子

古稀過ぎて胸に隠れる傷も増え 孔 一

隠れても逃げてタメナ時がある (高) 弥生

金木犀隠しきれんと風の私語 道 子

B級の遊びになった隠れん坊 (山) 妙子

露天風呂月も恥じらい見え隠れ 燭 節子

六年も隠れていたと蟬騒ぐ 元 三

要るときに隠れるなんとずるい知恵 エミ

隠れない方が案外よく粉れ 志 延

騒がしい風が止むまで身を隠す 孝 明

日米がモザイク掛けたオスブレイ 義 雄

【秀句】

秋空に隠した棘がゆさぶられ 明 美

さわやかな秋空に心の奥に隠していた罪の意識とでも言おうか。心の棘にゆさぶられた

気持を共有することができました。

時どきは隠れたいだる影法師 昭 枝

昭枝さんならずとも、私などよくも八十年

もついて来てくれた影法師に感謝いっぱいで

す。時々隠れてもいいんです影法師。

好きな鬼見つけて欲しいかくれんぼ 磯部 義雄

好きな鬼は同級生のミヨちゃんですか、それともお隣のお姉ちゃんでしょうか。子ども

の頃の淡い思い出を代弁してくれました。

(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

《平成24年度初歩教室年間賞》

鈴 木 公 弘 選

気を抜いたとたん崩れてきた積み木

近藤 治子

ぼろぼろと森のドラマになる木の実

山本 エミ

言い合える友とおんなじ舌になる

前田 洋子

(新年度からは太田昭氏に変わります)

川柳塔鑑賞

同人吟 寺川弘一

— 11月号から

海老池 洋

川柳塔十月号、新家完司さんの「せんりゅう飛行船」から引用させて貰います。

「他人の作品を読むときは、先入観を持たず素直に向き合うのが礼儀です。そして、できるだけ作者の心情を正確に汲み取りたいものです。しかし、わずかに十七音での表現であり、注釈ありませんので、時には的外れな鑑賞をしている場合もあります。……作者と生活習慣や価値観が違うことによつて、浅読みになったり深読み過ぎたりすることがあります。」

以上を踏まえて、作品に出来るだけ忠実に作家とのコラボを大切に鑑賞させて頂きました。

薔薇の花咲いたくらいで娘に電話

太田 扶美代

我が家でも、子供からの電話は妻が独占しています。男親としては共通の話題が殆どありません。妻と娘は女同士で、話題が

尽きることが無いようです。黙って居れば何時までもきりが無いようです。

父の日に身長縮んだねと言われ

山本蛙城

母の日があるから、付け足しのよう父の日が出来たのでは、などと僻むなかれ。縮んだと言った息子がこんなに大きくなったのは、誰のおかげかと内心で呟いて居るのかも。

青いまま落ちるりんごもあるのです

福士慕情

理想の育児ってなんだろう。兄弟五人が揃って東大を出てバリバリ活躍しているなんていう家庭は、DNAが優れていて少し不公平だと思う。

青いりんごが落ちるのは、引力のせいだけではなくて、気象条件、土壌などの環境条件にもより、しかしこれを運命だと言うのかも。

ストライクゾーン広げて丸く生き

生きていく上の、ストライクゾーンのジャッジは自分自身、より正確な選球眼が求められます。iPS細胞の山中教授が野球は3割で大打者、実験は1割で大成功と言いました。

踏いた石であふれるほくの蔵

高瀬 霜石

踏いた石には、それぞれに思い出があり、教訓があり、ワインセラーのように蔵の中に、大切に保管されているのでしょうか。

時々、蔵を覗いては保管している石から、新しい勇氣と元気を貰いましょう。

手の皺にわが遍歴が浮いている

岸 桂子

生命線も運命線も、そして感情線も私の生きざまを正確に現している手相でしょうか。その上にある私が生きてきた遍歴の皺、私は一生懸命に頑張つて生きて来ました。

足枷のように絡まる朝の靴

森山 盛桜

今朝も元気な顔をして、出かけます。私には守るべき家族があり、責任があり、それが私の幸せです。妻は私の靴を、いつもピカピカに磨いて送り出してくれます。

行き帰り同じ景色のはずなのに

井 丸 昌 紀

通勤電車で見える景色は、旅先で見える景色と違ってモノクロのままです。

万事好調だった日、また不調で落ちこんだ日等、同じ景色でも喜怒哀楽それぞれの気分によって、違う景色に見えるのでしょうか。

ジャンプする助走を今も続けてる

伊 達 郁 夫

助走期間が長い、短い、人によって違うでしょう。でも、ジャンプするタイミングは、必ずやって来ます。日頃からジョギングをして体力をつけておかねばなりません。

萌えたくてレッスンワンを読みなおす

吉 岡 修

「萌え」と言うのは、「芽が出る」と言う意味が「心に春を感じる」と言った語感になったそうです。人生到處青山あり、いつまでもレッスンワンを忘れない若さと、探求心を持ち続けたいものですね。

生かされて白いページにある明日

森 茜

白い手帖は、自由自在に使えます。なものにも囚われない理想を書いて、白いペー

ジは私の小宇宙です。明日への活力を培う世界です。大切な白い手帖には、夢と希望の明日があります。

浮雲としばらく歩く坂の町

水 野 黒 兔

坂に登れば其処には夢があり、遙かな虹が見えるのでしょうか。浮き雲を道連れにしてマイペースを崩さないスローライフ、幸せはいつも身近にあるのでしょうか。

秋を詠む芒一本あればよい

高 田 美代子

虫が鳴く詩人になれど虫がなく

佐 藤 古 拙

秋は誰でも詩人になり易い、詩情に浸って右脳左脳をフルに活動させて、豊かな人生を満喫しましょう。

コンピニのおでんは策士だと思つ

古 久 保 和 子

コンピニなんかに。僕は入らないと決めていました。若い子達は、ちよつとした文具類を買うのもコンピニで、学生時代からコンピニ生活が当たり前になって居り、だから僕らには無縁だと思つていたのに、きっかけは忘れましたが、偶然入ったコンピニの多彩で、コンパクトな商品群、成程ここ

には新しい時代の生活がある、まさにコンピニは、現代の策士だと思いました。

似たようなケースと束にされている

籠 島 恵 子

富士山は日本一だと誰でも知っています。日本で2番目の山は殆どの人が知らないでしょう。何事も一番でなければダメだというお話しです。「以下同文」の束にされる群れにされるのは面白くないですね。

2番ではどうして駄目なんですか？ と

言つた人も居りましたけれど。

怨念を目玉に籠めて蟬の殻

村 上 直 樹

狭い我が家の庭ですが、思わぬ所に蟬の殻、ヤツデの葉の裏、上がりかまちのコンクリに、孫に見せたいとそつとしておきました。蟬は羽化する前の地下生活が幸せだったと、成虫になってから鳴き叫ぶのでしょうか。

四つ角の花屋閉まってから長い

高 島 啓 子

故郷の銀座と言われた商店街も、今ではシャッター通り、花屋の小父さん小母さんはどうしているのでしょうか。古いアルバムを開くと懐かしい昔の風景が今も蘇ります。

水煙抄鑑賞

—11月号から

村上直樹

シニアの誇りゆつくりと歩をはこぶ

鳥居 宏

成し遂げて人生を達観した作者の心境を感じる。お互いかくありたいもの。なかなかこうはいかぬもの。人間の強さ弱さを見せつける。

おつむてんでん絞って知恵がひとしずく

河西草庵

「亀の甲より年の功」益益盛んな作者に負けず、お互い家庭に、社会に存在感を増したものの。まだまだ捨てた物ではありませんぞ。

棚ボタはいつもとにらに落ちてくる

原 洋志

人生ままならぬもの。だからこそ面白くも悲しいドラマも生まれる。せめて明日こそ、今日より一歩前進が、好事が訪れることを信じたい。いやきつと訪れるに違いない。

次の世の話そこまで暇じゃない

国 實 力

悟り切っている様でも、弱きもの汝の名はニンゲン。齟齬として今日も一生懸命に走っている現実を見せつけられる思い。

賞味期限過ぎてはいるが食べれます

松田 聡

まさかご自分の事ではないでしょう。鍛え抜いた「心と体」工夫をすれば無期限？に使えます。捨てた物ではありません。

向き合って話せばきつと溶け合える

藤成操江

国際も政界も隣組も親と子も…お互い裸になつて自己主張と思ひやり…仲良く出来ないものか。出来る事を信じよう。

にんげんになれるいつばい泣く笑う

増田純子

心から笑って泣いて…そんな日もあったなあ。すつきりしてきつと明日からの元気が湧いてくる。限りなく空は広い。

薄絹を着せてはなんなり言う本音

大島友子

相手構わずストレートに自己主張だけの世の中。せめて作者のように淑やかに、しなやかに。それでも本音だけは決して曲げない強さの大切さ。

あいまいにまあまあですと躲してる

小池 幸子

生きる知恵の大切な一面。大抵の事はこの処世術で切り抜けられる大人の知恵。

過去形で話すのはやめました

前田 恵美子

明日に向けて生きてゆこうという作者の心意気や見事。お互いかくありたし、かくあれかし。

これからはゆらゆら揺れて甘えとこ

柴本 ばつは

人生悟りの境地か。でも生きる知恵がいっぱい詰まっている感じの句。この境地がなかなか難しい。

邪魔されず花と語って今日も暮れ

坂上 のり子

優雅さとちよつぱりの寂しさと…いずれは誰もがこのような心境の時を迎えるであろう。「人生の日曜日」をゆつたりと過ごしたもののだ。

背に腹は変えられませんが再稼働

坂本 とも湖

人類は永遠の大問題を突きつけられた。単純な「べき論」で答えは出せぬであろう。川柳に政治は禁物とは言いがた、お互い避けて通れない課題である。

第27回 国民文化祭・とくしま2012 (11月18日)

本年度国民文化祭は徳島県「徳島市立文化センター」で開催された。

事前投句、高校生・一般の部は2,356名、小・中学生の部は5,103名、当日参加は455名。

大会各賞は下記のとおり。

◎ 高校生・一般の部

文部科学大臣賞

泥んこの軍手で虹をつかまえる

徳島県

大西 貞子

国民文化祭実行委員会会長賞

土に触れ土の声聞く太い指

福島県

織田 順子

徳島県知事賞

揺れるつて具合がいいの倒れない 宮城県 斎藤 晃

第二十七回国民文化祭徳島県実行委員会会長賞

耳底に父の汽笛がまだ響く

兵庫県

寺尾 麦人

徳島県議会賞

やさしさを土偶の乳房からもらう

長崎県

平井 翔子

徳島県教育委員会教育長賞

チンという音で日本が進化する

大阪府

森中恵美子

徳島市長賞

長寿国尻尾がしこみ杖になる

千葉県

太田ヒロ子

徳島市教育委員会教育長賞

一本の滝が流れる父の背な

宮城県

鎌田 京子

(社)全日本川柳協会会長賞

ひとつづつ昔を拾う頭陀袋

広島県

増田マスエ

徳島県川柳作家連盟会長賞

宇宙見た少年の芽が進化する

岩手県

野口みのる

◎ 小・中学生の部

文部科学大臣賞

友達はおくの心のシャワーだな

小5

吉田 智哉

国民文化祭実行委員会会長賞

霧深い朝の部活へ急ぐ足

中3

安居 亮

徳島県知事賞

ベートーベン音楽室でみはつてる

小4

山下 凌河

第二十七回国民文化祭徳島県実行委員会会長賞

ながれぼしいつかてにする金メダル

小2

岡本 莉子

徳島県議会賞

ブランコが今と昔をゆれている

小6

内田 遼

徳島県教育委員会教育長賞

きょうりゅうはすがたをかえて生きている

小6

金山 涼風

徳島市長賞

深くつくそのためのいきが本音言う

中2

原 亜海

徳島市教育委員会教育長賞

流されず進んでいこうぼくの道

小5

田村 和也

(社)全日本川柳協会会長賞

どこまでもはだしで走る昔の子

中3

吉原 諒

徳島県川柳作家連盟会長賞

練習着チームの証泥まみれ

中3

乾 鷹純

二次選者 大木 俊秀・大野 風柳・河内 天笑・住田英比古・竹本瓢太郎

本社十一月句会

十一月七日(水)午後一時
アウイーナ大坂

十一月句会は123名(投句者9名の参加で開催。初参加は、市坪武臣氏(尼崎市)。

今月のお話は、北野哲男さん「出前する川柳試食会」と題し、川柳さん達の活動内容例えば、句報は手作りりで1週間て発送、公民館・図書館・病院等に句報を置く・会員に他の句会への参加、投句を勧める・展示会を年5〜6回以上開くなど、外部に発信する事を基本スタンスにして活動。その一環として川柳試食会を開いたそうです。

出前ですから注文があれば出掛けるといふことで、評判を呼んで近隣の市町からも申し込みもあり、年4〜5回以上開いている。試食会や展示会を通じて川柳が好きな人、自分も挑戦してみたいと思っている人が沢山居る事に気づいた事が励みになったといふとのことでした。

(まつお記)

月間賞は 上田ひとみさん(三田市)

(司会)蕉子・善純(脇取)扶美代・千代(受付)誠・キヨミ(清記)勝弘

席題「再生」

居谷真理子選

更生が利かぬ顔にも紅を引く
つけて叩く少うし髪が生えてきた
ひよつとして戻つてこぬか逃けた恋
再生の留守電で知るボクの声
古新聞折り目正してリサイクル
美しいこんなもので再生紙
再生紙と殊更書かれてる名刺
録音の故人の声に叱られる
再生の誓ひ吸ひ取るネオン街
復興はしても再生せぬ心
落ち込んだりしないとかげの尻尾だもん
切断と再生イモリから学ぶ
ボンコツの尻を叩いて走らせる
飲めばすぐプラス思考になる私
窓際の再生うながす温いお茶
巳の年だ一度むいて生き変わる
もう一度やる気にさせる朝が好き
一度をはいてピンクの肌になり
例えばあの人きつと再生紙
再婚も鐘の鳴る丘チャペル於て
きのう晚叩いたゴキブリに出合う
再生は止まらぬあの世でも会える
鼓膜再生また悪口が聞えだす
次の世はお猿に生まれ変わるかも
再生をしたいが妻がまだ寝ない
窓際で蜥蜴の尻尾数えてる

いさお
いさお
修
りこ
武臣
舞夢
玄也
不動
敏治
五月
理恵
森子
寿之
好
恭昌
日の出
好
紀子
ダン吉
柳弘
見清
信子
茂
完次
まつお
淳司

主婦にする夫のプロジェクト作る
笑顔だけ再生哀しみ消しておく
iPS死ねなくなるという恐怖
もうさらばした人へも強心剤
再生をしたのかスーツ着てはった
再生をしたら許容量が大に
佳
なにもなかったように再びのみどり
何も彼も含んで僕は再生紙
くり返しあな達に逢えるボタン押す
生え変わるしっぱはメイドインチャイナ
再生テープからボマードが匂う
人
再生の爪は優しいピンク色
地
天の句を書いた句箋は再生紙
天
あたためてやったら息をする道具
軸
舌の根も乾いた尻尾また生えた
兼題「句」 両川 無限選
句の人どのチャネルも顔を出す
日本が大好きになる句の旅
褒め上手句の野菜を貰うてくる
小さめのリュックとぶらり句を追う
成れの果て句を逃がした男です
心技体今が句です古希半ば
蕉子
希久子
かずお
かずお
瑠美子
ふりこ
蘭幸
寿之
ひとみ
由一
扶美代
アキ
哲男
扶美代
萌子
則彦
一歩
菜々子
ばっは
紀雄

朝市の野菜に旬を教えられ
旬だけ喰ぐ松茸は今が旬
転がつて旬をはずしたおんな坂
いち早く旬の話題をインプット
旬過ぎた女もエステ努力する
美しく老いて心に旬を抱く
口にせぬ間にマツタケの旬終わる
歳時記の旬がずれ出す温暖化
旬の風吹いて巢立ちの羽繕い
恋をする男はいつも旬である
お陽さまに味つけされた旬野菜
人生の節目ふしめにあつた旬
どの鍋も師走の味をてんこ盛り
わたくしは今が旬ですお買い得
離婚しておんなは旬を謳歌する
ドラフトで引く手あまたのユニホーム
自分の旬がいつか悩んでいるトマト
旬過ぎた男が集う縄のれん
髪染めて入れ歯入られても今が旬
恋ひとつ私に旬をくれました
復興の話をいつも真ん中に
ふる里の旬ありがとう荷をほどく
新米がどんと里から届く秋
原点を忘れた旬のない野菜
子育てにがつぶる四つの頃が旬
文化勲章ひたすら旬の男なり

佳

失名 玄也 わこ 能子 克己 敏治 武彦 久美子 由一 俣子 千恵子 信子 楓楽 美籠 かずお いさお 耕治 富美子 ダン吉 一風 克己 寿之 淳司 義子 寿之

生涯を旬でありたい土踏まず
旬少しはずしたけれど無農薬
今わたし旬だと思ふ赤い靴
旬すぎてから実力を試される
人
古日記練れば僕にもあつた旬
地
お目覚めは旬のフレッシュジュースから
天
柿みかん笑つた秋の真ん中で
軸
松茸の旬は禁猟区の中に
兼題「うんざり」 安土 理恵選

楓楽 扶美代 能子 保州 武彦 葉々子 希久子 美義 弘光 いさお まつお 美智代 楓楽 由一 かずお 隆彦 勝弘 いくひろ 玄也 完次 美籠

うんざりするほど愛されてもみたい
二十年同じ自慢を聞いている
うんざりしつつまんざらでもの鼻の下
もうずつとご飯作っているのです
四日目の吉野家妻は旅行中
あれこれと妻から指示が飛んでくる
言い訳はたつぷり聞いたもう寝よう
うんざりの記憶が残るお辛さん
お祝辞が続く代詠が続く
うんざりをちらり見られたのは不覚
上げ膳据え膳私は何をすればよい
長い長い我慢だつたな定年日
鞍替えも辞任も平気で議員
うんざりに負けぬ介護のいいリズム
葬儀屋と公園墓地がタッグ組む
いたずらな神にうんざりさせられる
外回り今日コーヒは六杯目
一度なら聞ける小言を二度三度
佳
度の過ぎたお世話わたしも大人です
十二月の予定にうんざりしている
また冬か足の先から冷えてきた
石段を見上げ参拝やめにする
うんざりの心を放つ秋の天
人
めくるめく恋にも飽きて出家する
地
くどいほど生きて昭和を語り継ぐ
章子 朝子 義子 ひとみ まつお かつお 耕治 蘭幸 森子 保州 真理子 蕉子 哲子 完次 五月 久美子 五月 信子 完司 六子 朝子 富子 直樹

天

うんざりとしてても月も陽も昇る

敏治

軸

本心を言えば夫婦でいられない

兼題「器用」

坊農

柳弘選

不器用な健さんに会う映画館

満子

不器用が運もたらしたIPS

隆彦

仕立て屋の器用な指が罪つくり

克己

石橋を叩いて器用にはなれず

森一

器用ではないが器用の相である

由一

美しい指が何でもよくこなす

ひとみ

器用さが邪魔になつてはいませんか

ダン吉

清盛に龍馬の器用さ欲しかった

求芽

右の顔左の顔を使い分け

章子

左目で眠り右目で本を読む

いさお

植木にもイルミネーション十二月

信子

どちらにも器用になびく風見鶏

恭昌

棟梁の器用さわかる鉋屑

保州

ここだけの話器用に世を渡る

五月

りんごむくその器用さに惚れました

章子

器用すぎ出しゃばり過ぎて疎まれる

靖博

ライバルを器用に斬つて苦い酒

和夫

私よりなでこの足器用そう

哲男

電球の取り替えだけはすぐ出来る

見清

恋人がふたり上手にこなしてる

朝子

独り者家事百般はお手のもの

克己

預貯金0しかし器用に生きてます

ばっは

分別をつけて今宵の飲み仲間

理恵

説明書見ずに操るアイパッド

宣子

彼女へのセーター編んでいる男

時雄

お隣の便利屋さんは人気者

勝弘

残菜を器用に料理ゴミ減らす

忠昭

喜怒哀楽すべて表現するシッポ

六点

天使にも魔女にもなれる女です

富子

器用だから夫になっていたんだ

宏子

茹で玉子ほど器用には生きられぬ

朱夏

世渡りが器用すぎて疎まれる

舞夢

佳

玉乗りが得意でいつまでもピエロ

富美子

アイシャドウ降る間際に書きあげる

直樹

火傷せぬ距離を保つて恋をする

楓楽

くるくるとまとめた髪がおしゃれです

ひとみ

不器用の運鈍根にかなわない

無限

朝のラッシュ器用に立つて寝てる人

りこ

地

善純

器用ではないのでしてません浮気

善純

にんげんを器用に差配するお金

完司

軸

器用には生きられなくてお人よし

完司

兼題「古顔」

木本

朱夏選

古顔で尊敬語ではないみたい

哲男

この星では縄文杉が最古参

完司

父母のいない故郷の大銀杏

真理子

回忌重ね居間に馴染んだお仏壇

宏子

大阪城の亀は見ていた夏の陣

保州

古顔の岩がどっか温かい

わこ

長老という名で貴賓席にいる

六点

古顔の昔語り寂がある

千代

古顔もちゃんと仕事がある祭り

キヨミ

古顔の自負が許さぬ助け舟

扶美

古顔が取り仕切つて金魚鉢

和夫

古顔の気持ちかわかるから辛い

アキ

古顔がずらりわが社の生き字引

森子

程のよい距離には古顔の女

ダン吉

さすが古参目と指がもの申す

美籠

古参には上座を空けるだけで良い

時雄

ベランダで古参のすみれ彩を増す

千恵子

古顔の目くばせやはりそらされず

わこ

古顔が老けた顔して「久しぶり」

恭昌

片隅の古顔合図なく帰る

公誠

古顔がヌーと現われ座を仕切る

見清

窓際に居ても知識は冷めてない

篤篤

高いところに古顔は置いておく

蘭幸

古顔にどなたですかと訊くパート

則彦

古顔のおかげ年金もろてます

義子

いざとなりや潰しバツチり効く古参

直樹

乾杯の音頭はきつと私だろ

勝弘

止まり木の端で古顔口挟む

弘光

古顔に摘み取られるな維新の芽

由一

おかたが名誉教授という叙勲
ロボットが古参の腕にかみついた

楓 楽
一 歩

俺様をオートロックが知らぬ振り
甲子園の主で風船配ってる

富美子
完 次

窓際に洗ひ晒した僕がいる
猿山の隅で元ボスひなたはこ

美代子
真理子

ご近所の酒場じやボスと呼ばれている
人

完 司

古顔になった人気者になっていた
地

扶美代

飾に掛ける古顔が消えた
天

蘭 幸

みんな古顔りんごの歌を知っている
軸

瑠美子

古参兵の手帖火の跡水の跡

兼題 「かぶる」

小島 蘭幸選

泥かぶる勇氣の人は寡黙です
虫の音が読経にかぶる七回忌

一 歩
まつお

稲刈りが似合うあなたの頬かぶり
かぶることもなくなりましたお歳暮に

加お里
信 子

かぶった面とるのはきつと閻魔さま
折角の美女に勿体ないブルカ

義 子
俣 子

しあわせの仮面ははずさないでおく
後期高齢そろそろ祝儀ほうかぶり

見 清
哲 子

息子とは女性のタイプまでかぶる

善 純

骨折ぐらい覚悟してます砂かぶり
堂々とかぶる火の粉は熱くない
銀髪に似合う帽子買いました

弘 一
淑 子

制帽を被った遠い日の誇り
なでしこに東洋の魔女ダブらせる

千枝子
富美子

防空頭巾かぶる少女が原風景
うっとり落ち葉をかぶる野の仏

由 一
富美子

かぶりもの取ればまばゆいお姫様
水垢離をしてもとれないしみひとつ

朝 子
みつ子

とばつちりの火の粉かぶったことがある
庶民に付けかぶせる値上げではないか

葉 子
朱 夏

火の粉も泥もかぶり解脫がまた出来ぬ
肩書きが取れて火の粉はかぶらない

楓 楽
千鶴子

砂かぶり続け地蔵になりました
泥かぶらぬ位置でブラックジョーク言う

五月
楓 楽

おっとり火の粉かぶっている器
はつとする昭和歌謡のカバー曲

朝 子
篤 子

蒲団かぶるとあたたかい夢の国
夏帽子被らぬままにまた仕舞う

完 司
好 子

捨てません埃かぶっていますんか
塵芥を被り便利な町に住む

耕 治
忠 昭

母の遺影と妻の横顔とがかぶる
秋帽子かぶって秋に添うかたち

瑠美子
森 子

泣いている形でお蒲団が丸い
いてねにかぶる私が消えるまで

義 子
義 子

かぶらないでこうありのままにいこう

義 子

野球帽目深に被り飲みに出る
偉い人らしい頬かぶりが似合う

完 司
扶美代

言ひ訳は嫌い被ったままで居る

ア キ

冬帽子妻のぬくもり降りてくる

理 恵

泣くためにかぶる僕らの野球帽

上田ひとみ

べっぴんさんとかぶった服はもう着ない

軸

十一月までの本社句会皆出席者は次の通りです。間違ひがありましたら、事務所まで申し出て下さい。(順不同)

安土理恵・足立 茂・石田隆彦・居谷真理子
上山堅坊・榎本舞夢・江見見清・榎本日の出
奥 時雄・柿花和夫・木本朱夏・江島谷勝弘
黒田能子・小島蘭幸・坂上淳司・太田扶美代
佐藤忠昭・澤井敏治・志田千代・奥田みつ子
島田誠一・谷口 義・都倉求芽・片山かずお
長浜美籠・西出楓楽・藤岡りこ・鴨谷瑠美子
坊農柳弘・前田紀雄・牧浦完次・久保田千代
水野黒兎・三宅保州・村上玄也・古今堂蕉子
村上直樹・森本弘風・山口光久・佐々木満作
山田耕治・山野寿之・吉村一風・鈴木いさお
飛水ふりこ・松尾美智代・山岡富美子

(47名)

お世直し

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

暑い夏電気節電えられぬ
人前で元氣な振りをしてるだけ
正比例ビールの量と腹回り
人並みに病んで暮らして八十路旅
砂丘など一回行けばもう飽きる
かき氷鼻のアタマも食べている
儚くも我今日ここに生きている
もう秋の色になつて婦人服

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

マシユマロの味を残して逝つた母
腸の味を覚えて以後大人
味わたつた誕生の味葬る味
おふくろの味は忘れて妻の味
遭されたレシビで作る妻の味
母の味包んで帰る秋祭り
母の味あと一匙を星に聞く

節子 野蒜 くにこ 照彦 紀の治 富恵 道子

薄味でも脳の血管切れたがな
ことごとと味がしみ込む落し蓋
味のある絵にされちやつたキリスト画
晴れた日は短い雨の日は長い
にんげんと触れあうまでの長い旅
夕映えに海と対話が長くなる
醍醐味は長いパットを決めた時
唯一のストレス解消長電話
記念樹が百二十年知つてゐる
影法師長くなつたと見る暦
入試には三度落ちてもへこたれぬ
手に落ちた妻を宥めて今にきた
落ちこぼれ就職までにごぎつた
新緑もやがて落葉となるさだめ
介護する湯舟に落ちぬよう必死
落ちる迄山の高さを忘れていた
堅物と言われる俺が恋に落ち
一行詩脳にことんと落ちる味
染められて有無を言わず五十年
純真な心が染まる青春期
妻の色知らず知らずに染められて
紅葉に染まると旨い熟し柿
薄紅に染めてみたいよ老いの空
竹島を白地に赤く染め直す
染め斑もあつて私の色とする

和歌山三幸川柳会

武本

百均の店は大人の遊園地

紀美恵 美代子 龍枝 完司 芳光 玲子 玲坊 耕治 義人 善江 勝憲 恭恵 貴恵 公恵 和子 美ツ千 滋 美知江 たけ代 久芽代 悦子 重忠 美美子 清 三津子 碧報 宏夫

下腹が抜け落ちそうなコースター
ベンチだけ増やした古い遊園地
遊園地で私も付ける迷子札
ストレスを抱えブランコ強く漕ぐ
宿題の絵を画くために遊園地
遊園地のような畑で日が沈む
そのうちにベッパ専用遊園地
若い日の夢が落ちてる遊園地
お金には飽き飽きしてる黄金虫
言う側もうんざりしてる馬の耳
もう切ろうどこで切ろうか長電話
あれこれと細かい指示がうざくなる
うんざりの種分け合っている絆
うんざりの日本の夏を流す風呂
うんざりの麦飯今は美容食
九十九折しかと歩いた土踏まず
近道を知らない足は強くなる
空蟬へ諸行無常の夏の道
信号機もとけてきそうな炎天下
寄り道をした空白が生きてくる
風貌が生きてきた道匂わせる
肩書きを脱げば見えない未来地図
復興の道に落とした再稼働
腰伸ばし余生を西へまた歩む
一本の道を歩いて来た誇り
もう何代続いたろうかけもの道
道なき道歩き婚家の灯に染まる
絶やしてはならぬ先祖が付けた道

豊 八重子 義雄 起世子 登美代 昭枝 俣夫 高夫 美花 准一 町子 かずみ 義泰 幹子 保州 和子 章子 夢子 菜摘 碧 富子 当代 絹子 元三 伊セ

次根

恩

孝子

ひろ子

純子

きく

朱夏

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

晴着一枚タンスで出番待つていた

晴れやかな笑顔で帰国メダリスト

無罪放免空はこんなに青かった

恋人と晴の挙式の日取り決め

長い目で見よう子育てで楽しもう

病院の長い廊下をひとめぐり

終戦記長い鉛筆用意する

長い助走だ大器晩成かも知れぬ

妻手術待合室は長かった

長い坂だった長い雨だった

めぐり来る祭太鼓の音をきく

幸せな花火が上がる夏祭り

悲喜とともに祈る神輿を皆かつぐ

支えあい祭りのような二人旅

伝統の祭りを残す地域力

村祭り被写体となり歩き出す

植樹祭その日のための作業服

飄飄と独り暮しをあめんぼう

EXILE聴いて細胞弾けさす

汎風

私を仕上げる年齢は宝
貰い泣きわたしの過去に似た話
帰省した弟まあるくたくましく
兄弟に食欲の秋やつてきた
手をつなぎたしかめ合っている絆
竹とんぼなりに持つてる青い空

川柳塔おつばこ吟社(香川) 川崎ひかり報

化学では計り切れない人の情
列車内人目気にせず化けている
敏しみが化ける時間を長くする
さよならをする時までも化粧する
浸食で変化していく故郷の浜
化学人やがて火星に届きそう
化けの皮むいてやるぞと時を待つ

川柳ふうもん吟社(鳥取) 夏目 一粹報

支持率を掏うそうけに穴があき
幸せへ向かうカーナビセットする
八百長も夫婦円満なる秘訣
幸せかなんで余計なおせっかい
ボランティア神はしっかり見てくれる
人情も金もそうけじゃ掏えない
八百長の毎日でした五十年
カーナビに無い人生の泣き笑い
カーナビが領土認めた離れ島
連れ添うて六十年を飽きもせず
陽の恵みいつばい受けて干すオムツ

厚子 栄香 歩美 史子 千枝 一路
ひかり はつ恵 よしみ いさむ 弘
あきら 放任

清信 無限

水野黒 兎選

すだち届く里には姉がひとりきり
裏切りにも真つ赤なカンナ咲き乱れ
一彩を足せば非凡な蟬時雨
わだかまり解ければ怒も透きとおる
強がり屋強がる程に一人ぼち
肩力コでメモは事件を黙秘する
無為無策テレビ見ても腹はへる
原発ゼロ山の彼方の遠くです
ゆつくりと帰るだあれも待つてない
円満にいつてららしい愚痴を聞く

耕治

佳句地十選

(11月号から)

安土理 惠選

居酒屋で踏んだ二の舞三の舞
神仏に無病息災だけ祈る
合掌を解いて両手の忙しさ
末永くよろしく墓地の両隣
泣きに来た海はとてつもなく広い
いつまでも騒いでいない蟬しぐれ
余白まで使って書いた胸の内
掴み取りには向いてない私の手
骨密度落ちててもブライドは保つ
ゆつくりと帰るだあれも待つてない

啓子

カーナビは知らないネズミ捕りの場所

結局はカーナビよりも人に聞く

そうけなど泥鰌すくいをやるらしい

ふくよかな容姿幸せそうに見える

八百長でなかった妻の認知症

八百長を蹴る勢いが欲に負け

八百長の政治論争聞く地獄

幸せか旅は必ず二人づれ

カーナビの追跡かわす逃亡者

孫の目に八百長芝居見抜かれる

泥水を被ってからの力瘤

父母の死に目に会わず幸せか

人生のカーナビ浄土まで迷路

役者が泣くあれは演技か八百長か

和尚さん時計ちらちら経を読む

五億円当てて名乗れぬ不幸せ

カーナビは文句言わない味方です

カーナビに頼り土地勘鈍くなる

カーナビに手古摺り前へ進めない

八百長ですえた議員に焼きを入れ

八百長と言うどろ沼で喘いでる

なれあいが何時しか墓穴掘っている

八百長に一喜一憂する勝負

夢捨てるたびに路傍の石となる

川柳らくだの会(鳥取) 岸本 宏章報

秋夜長時計みながら本閉じる
呆け防止今日のけじめだ日記書く

秋月

圭一郎

妻 子

金 祥

重 忠

美恵子

春 名

善 夫

喜 子

日 暮

一 瑤

蟹 郎

節 子

振 作

孝 二

行 男

清 帆

昌 鼓

由美子

克 也

菖 子

房 江

はつ江

一 粹

一日の反省盛って日記閉ず

悔しさをつくり笑顔に閉じ込める

手の本が落ちたら電気消して寝る

まだ逝けぬこの世に恩が山とある

閉じこんだ記憶がひょんなときに出る

一生のけじめは棺の中でする

しんしんと挙措を鎮めて神詣で

梅雨明けへ豪雨がけじめつけに来る

大阪川柳会

津 守

柳 伸

柳 伸

志 華

一 歩

庸 佑

ひさ乃

正 春

紀 乃

弘 子

柳 弘

清 風

弘 風

修 風

楓 楽

優しさに触れて涙が堰をきる
ピリケンさん人洪水で艶ピカリ
洪水のように彼女へわく想い
洪水が蛍の棲み家押し流す
洪水のない街で住むありがたさ

一 弘

清 子

せつ子

登 美

玲 子

孝 子

大 鯨

宏 章

柳伸報

柳 伸

柳 伸

志 華

一 歩

庸 佑

ひさ乃

正 春

紀 乃

弘 子

柳 弘

清 風

弘 風

修 風

楓 楽

恭 昌

タカ子
シマ子
克 己
なぎさ

最後まで聞かずにドアを閉められる栄子

出来もせぬ公約なんかもう要らぬ

ノーマイク素顔の君に惚れました

ラップした過去のときめき疼き出す

カラオケはボケを防ぐと励みでる

集合写真鬼籍の友の笑顔見る

食欲の秋に虫歯が痛み出す

彼岸過ぎ空はだんだん深くなる

ひとひらが秋だ秋だと舞い降りる

平凡な日記書き終え今日感謝

初めからきれいな丸は書けませぬ

高知川柳社

小川てるみ報

酒豪ぞろい一升ビンが青ざめる

手土産のジョニクロ真中に座る

酒飲むと記憶が戻ることがある

病室にこっそりと来たワンカップ

腰痛も忘れ祭の灯に溶ける

綿菓子子をほおばる笑顔夏祭り

ほたる川柳同好会 大阪 水野 黒兎報

台風に追いかけられるバスツアー

極めればまあい盆の月となる

頂点を極めてからの虚脱感

極めたとコーヒー通が入れた味

大阪のおばちゃんパワー極め付き
極めても極めきれない恋の道
不精者同士ふしぎと馬が合い

栄 子

祥 昭

忠 昭

更 紗

和 雄

ルイ子

直 子

昌 紀

郁 夫

たもつ

典 子

てるみ

三 郎

圭 二

和 広

千 鳥

進

黒兎報

春 代

純 子

久 子

順 子

郁 子

長 一

勝

文化とやどんどん自然失われ
文才がどこにもないのウフフフ
無事定年読書三味うれしいな
ぶらぶらとどれにしようかウインドウ
武勇伝どうも半分ウソらしい
無事折るドラの音を聞く海の旅
体のことは医者に任せて翔んでいる
出来がよいだけの理由で医学部へ
iPS細胞未来へ聞くノーベル賞
物忘れした事忘れ大騒ぎ
えっあれもこれもそんなにきょうさんかんな
あんなにも好きなたばこを止めてはる

川柳塔すみよし(大阪)森松まつお報

ユーモアで毎日もっと楽しもう
ユーモアを交え子育て母の知恵
明るい友いつもユーモア仕入れてる
ユーモアの顔を洗うと真面目そう
ユーモアを呼と呼吸おき理解する
ユーモアを友持ち時が飛んでゆく
ざわざわ沖縄不在のユーモア
ユーモアと逢いたくなつてバスポート
ユーモアのきいたスピーチ場が和み
体調のいい日はユーモアたんとでる
ユーモアが通じずキョトン顔の僕
スポンジといわれすねてるカステラ
コーヒーはそんな邪心を捨てという
錯覚の愛かも知れぬアメリカン

扶美代 重子 幹治 契子 正子 黒兎 桂子 信男 柳童 康子 輝 美智代

公平 萌 シマ子 芳香 妙子 チエコ 和代 美龍 直子 篤子 舞夢 ばつは 日の出 柳弘

なんやかやコーヒータム作ってる
コーヒーに負けぬ苦さを知った恋
コーヒーが話決まらぬうちに冷め
一杯のコーヒー一人の指定席
目くばせはあのコーヒ屋ときめてある
コーヒーは砂糖五杯とおばあちゃん
我が妻の笑顔に惚れて半世紀
笑うこと心楽しくボケ防止
ウフフのふいとし恋しく懐かしい
アスリート覗く笑顔はみな美人
縄のれん何時も笑顔の紺紺
一円を笑うとレジで泣く破目に
にらめつことも妻にはかなわぬ
顔をうかがう先が多すぎる
人間のエゴにまごまごする地球
まごまごしても口はよく動く
蟻の列どこもまごまごしてはいない
ときめいてますまごまごしてはいます
行き先を決められなくてまだ此処に

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

石段をあと一段で天辺に
母さんは童話を語る暇もない
バッチリと芒の身にもなつてみる
父さんの童話力を入れすぎる
子の巣立ちあの頃が最中だった
銭はないけど庭木栄えるだけである
あり得ない大法螺吹いている童話

美世子 昌紀 半銭 公誠 順子 伸子 温子 志津子 五月 桃花 まつお 昭

和子 富久江 実満 弘子 茶子 茶子

童話から画才周りを巻き込んで
銭湯の栄えた頃の人情味
イソップが童話で説いた処世術
身長が一メートル六十五以上
童話でも読もうか前期高齢者
この家が栄えるように墓磨く
バッチリと写っています不倫です
人間が栄え地球が減びゆく
穏やかな自己催眠の栄えあり
実直なロボットに椅子奪われる
民がしつかりしないと国は栄えない
城下町格子戸並び今も栄え
ばつちりと咬んだ歯形はボチのもの
働いた団塊世代国栄え
二人の子夜毎童話で眠らせた
ばつちりと合わす大工のことば
童話にもいじめがあつたシンデレラ
地域活性男の鳴らす陣太鼓
桃太郎の桃は臨月だった
栄えあれ願つていても訪れぬ

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

難病も医学進歩が夢をくれ
潔癖のつもりおんなの不倅せ
接待に唐津はイカの生造り
文明や今日特売日紙オムツ
亡き友の分も生かされ喜寿になる
ころぶなよよろける足に言い聞かせ

孔美子 くに子 いさを 螢 盛桜 八重子 宣子 小鹿 満 彩子 惣子 露子 咲和 照彦 美代子 蟹郎 喜美子 節子 輝夫 松風 四郎 蜂朗 實

親切が過ぎると妻が角を出す
少しだけ世間はみ出す卒寿です

富柳会(大阪) 古田 千華報

前向きに生きるそのまま生きている
梅雨が明け地獄の釜が煮えたぎり
素っぴんが一番妻の風呂上がり
あの世まで手品の種は知らぬまま
心のままに生きた野菊と語り合う
親子とも同じ形になる背骨
子供部屋昔のままに息をする
すっぴんで何処でも行けた頃もある
黄昏の道でも愛はそのまんま
ナスキユウリ曲ったままが胸を張る
昨日と同じ今日が始まるパンの耳
海そのまま漢方薬の匂いする
節電より命だいじと蟬が鳴く
風鈴は無策が良しと風を待つ
リセットもスベアも居ない人と人
そのままを寝ると野菊は枯れ給う
老の木は曲らず詩囊ふくらます
七癖も磨きつくせば人間味
人間を入り人間を出る浄土
水鉄砲意中の人へ噴射する
湯けむりの白をまよっている素肌
故郷で心の殻を脱いで来る
一肌も二肌も脱ぐ国の為

高明 勝視

登子 七朗 壽峰 壽之 よしみ 未知 武人 アキ 和子 彦次 千華 深雪 信子 奏子 晴美 紅紫朗 華 欣之 扶美代 佳子 澄子 高鷺

風の街絵皿へ雨の色ばかり
フルムーン今日はわがまま聞いたげる
根菜と麦飯今日も生かされる
遠くからくるもの取り分け愛しい
そのままを引き摺る外はない夕陽

川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報

舌先に乗せる甘くて軽い嘘
酒飲んで飲まれて最後に沈む海
三・一一フクシマこくり飲んだ海
どん底でほんやり見える虹の橋
逃げ水の中にくぐめく母の影
ひ孫から生きる力を貰う母
夕焼けの海も瓦礫のゴミに泣く
津波終え他国へ物を運ぶ海
ドーナツの穴から覗く海が好き
何事も無かったように海は風
巣立つ子を点になるまで見届け
青春は裸電球の一つだけ
神の手に命を貰う脳腫瘍
海の歌吹いて陽気なハーモニカ
ほんやりが一匹もなし蟻の列
雪解け水ほんやり出来ぬ人も旅
海の絵をいっぱい描いて母の留守
領海の境界線がききない
薄味にしますかシェフの思いやり
草食の暮らし緑を友にして

鬼焼 伸雄

千恵 森子 隆樹 龍馬 小とみ きよし 初枝 吞舟 柳子 ひとし 美鈴 芳生 則彦 一呑 雅城 井蛙 花匠 黙人 慕情 一花 菰

手毬から貰う静かな子守歌
川柳クラブわたの花大阪西川 義明報

ひまりが鮮やか孫のワンピース
アルバムの思い出胸に厚化粧
気に入った写真は幕を下ろす日に
向日葵の様に輝くメダリスト
芒野へ手を取り駆けた日の想い
父の日に呉れた下着はMサイズ
脱皮する蟬を見守る子と重ね
微笑を絶やさぬ写真に教えられ
空蟬に長い地中の苦労見る
精一杯生きていますと蟬の声
アルバムに綺麗な妻が写ってる
留守電に用件言えず電話置く
蟬の声聞きつつ起きる夏の朝
風に揺れ花が秋を連れてきた
亡き母と旅した曾爾の芒原
味噌汁もご飯も炊いて只一人
気が若いつもりが仕草でバレている
待つ電話来たのと取ったら間違いで
敬老日祖母まん中にハイパチリ
鬼仏二つの顔を持つトッパ
太陽を浴びて向日葵上機嫌
ごめんねと言えは落けゆくわだかまり
夏疲れ大丈夫かと鱈雲
自我捨てて川の流れるように老い

五楽庵

晴美 俊子 義明 はじむ 浩三 愛子 博子 和子 耀一 正春 孝子 奈良司 かなえ 榮美子 欣子 明美 禮子 ますみ 宏至 知佐子 美代子 一風

川柳塔なら

坊農

柳弘報

棲まわせて下さい胸の片隅に
 飽きもせず二人ですんで五十年
 縁側で孫と添い寝の狸顔
 山に棲み山に埋もれている私
 わが胸に仏と鬼が棲み分ける
 尖閣に先住民の山羊が棲む
 鬼か邪か俺に分からぬものが棲む
 愛という仮面の裏に憎が棲む
 秘やかな妻の心に棲む阿修羅
 棲みついた疑念山頂で飛ばす
 愛から憎わしたしの夜叉が棲む初秋
 政界は小狸ばかり争うて
 シンブルに人を信じていた迂闊
 同棲の愛想を知らぬメダカたち
 仙人の暮らし憧れ棲む田舎
 なにげない語尾に絡んできた嵐
 難解な話を金が解きほぐす
 嵐来る稲も気概の見せどころ
 飽食の狸は化けること忘れ
 大都会人の姿の鬼が棲む
 手と足の一句嵐の中で立つ
 明日も日が昇る嵐に立ち向かう
 人災が一番ひどい害残す
 知り過ぎた姿見だけは騙せない
 単純な男で皆に好かれてる
 古狸哀しいまでに紅として

のりこ 博一 おたか 義久 いさお 紀雄 弘風 郁夫 賢子 萌子 ふりこ 勝弘 満作 堅坊 克己 道子 成子 保子 國治 將文 ダン吉 良一 寿之 恭昌 真理子

別れても心に棲んでいるあなた
 諸行無常流れたとこで棲む女
 狸の親子渡る民話の丸木橋
 雪月花ほとけと暮らす一つ屋根
 お別れの言葉一言ありがとう
 腹芸を磨き狸が嫁にいく
 ひとり棲む母を案じる星月夜
 結び目はたつたひとつで足りる愛
 間の抜けた狸人間臭くなる

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

これ以上飲まぬと決めた酒二合
 味醂なめ飲兵衛の気持ち真似てみる
 お気に入りダーツはずして秋を行く
 オレオレへ息子と決める合言葉
 鏡餅口をバカッとお岩さん
 しんしんと更けて頭は冴えわたり
 草までもかわい再検査異常なし

川柳塔さやらばく鳥取大塚

恵子報

妄想が顰蹙を買う永田町
 父の傘の下でぬくぬく生きてきた
 はおずきがカサリと熟れて今も朱に
 車椅子の力借りつつ旅おえる
 ゆらゆらと揺れております老いらくで
 生々流転長い道のりまだ歩く
 紫外線ユーブイカットもくぐりぬけ
 遺された鉢物多く手に余る

朝子 弥生 完次 隆盛 富子 理恵 恵美子 あかり 柳弘 週行 まみ子 幸子 美千代 雅美 百合 かつ子 喜周 麗 千代 亜弥 爾 ゆき 鶴子 初枝

スカイツリーにのぼり皇居へ手を合わせ
 今朝の空終戦の日と同じ色
 気を付けて安請け合いはせぬように
 母さんが跳ねると家も踊り出す

川柳さやま(兵庫)

北澤

桐民報

一日中孫預かってあしんど
 責任は引き分けとする老い仲間
 それなりの責任老いの生きがいに
 年金になって落語の味を知る
 買った方が安い野菜を作ってる
 古民家売ります星空も売ります
 味まつりおらが自慢のセールスだ
 税金を引かれて五円の利子がつく
 孫の字が安らぎくれるプレセント
 白雲悠々秋の実りを連れて来る
 増税の記事に余生を囲まれる
 もう少し乗りたい車の税払う
 子供連れセールスにいらい泣き
 少子化へ元気な子等の声楽し
 セールスが意外なヒント置いて行き

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

散りつくしダイエット成る落葉樹
 減反の田に赤トンボ群れて散る
 静かに散る参列後のむなしさよ
 散るを知り名もない花も咲き誇る
 名選手やはり散り際潔し

瑞枝 寿々子 恵子 ちかし 久子 美緒子 純子 哲男 真由 多美子 開子 可住 可はる 幸子 ちかあ 照代 美智子 三菜 陽 あや乃 泰子 昭好

反日デモ日中経済危機迫る

散るな散るなと元氣な百の叫び声

喜寿越えて休養迫る不整脈

ぬれ落葉ついてくるなど迫る妻

あたたかさ少し残してせまる秋

いじめられ十代の春散り急ぐ

散り際をそろそろ思う米寿過ぎ

ローズ川柳会(兵庫) 木村貴代子報

今と言う日大事に生きることとする 義子

今からでも遅くはないと手話入門 貴代子

運動会嫌いな訳は足にあり

今までを生きて度胸がドンと付く

今はもうしがらみ捨てて楽しまん

今を盛りと隊列を組む曼殊沙華

長柳会(大阪) 坂上 淳司報

深窓に育ちカジノを経てムシヨへ

ふるりの土がついてる宅急便

酔い潰れ酒の無い世を夢に見る

欲の皮が張り悟りの道遥か

朋友と秋の夜長に月見酒

屋敷内四季取り取りの花咲かせ

酒好きで人に迷惑かけどおし

女房とぶつかり避けて三歩引く

後戻り出来ぬと悟り生きている

結び目をほどこき羽ばたく若い夢

欲言えばキリが無いと悟される

一幸

克衛

敬子

薫

やすの

みちる

勇太郎

故郷の屋敷の爺や達者かな

運命と悟れば見えてる世の移り

お屋敷にあこがれてるのかすみ草

故郷の屋敷彩る柿の朱

パチンコ店目玉きょうさんくるくと

国益がぶつかる度に舵を右

焼酎がからだに良いとライム割り

酔いつぶれ隣の家にあがりこむ

注がれた酒に漂ってますその野心

外科医には向かぬと悟りノーベル賞

悟りには遠く鏡を拭いている

上げ底の箱で照れてる一夜干し

したたかな口で反抗青林檎

一生に飲んだ酒量は琵琶湖分

最初愚痴したたか飲んで泣き上戸

若者よ酒は静かに飲むがよい

美酒一献喜寿晴れ晴れと菊薫る

人生のどこどこに酒の傷

雑草が天下取ってる大屋敷

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

たまさかに油さすのも身のためだ

親切な注意フアスナー開いてます

病名のつかぬ死に方目指します

「お母さん」呼んで呼ばれて心風ぐ

よき友はいつも私のガイド役

足腰のネジを回して秋支度

逝く人を呼べど消し去る波の音

マサ

けい子

ふみ

三和子

正子

弘光

孝代

輝子

敬二

福子

富美子

和子

久美子

篤

克三

芳野

直樹

正美

和代

ATMガイドを頼みやつと触れ

梅干しが置いてあるいい旅の宿

気が付けば美人ガイドに人だかり

甘えたく親の墓前に小半時

わたくしの名前呼ぶ人好きになる

出発にアゴで数えるバスガイド

ガイド付き不法上陸すぐ出来る

柔かなトークが好きで深夜便

子が心配するからクローラーは切らぬ

今日の日を妻のガイドで生きている

年老いてお互いさまと許し合う

ガイドにはいいとこだけが載っている

骨太の方のガイドに従いてゆく

しくじった道だからこそガイドする

庭の隅趣味に恋して花ざかり

酷暑だと嘆くな梨は上出来だ

砂丘のガイドドラクタの君にしてみらう

長老のガイドでなけりやしていらぬ

太陽と月をガイドにして進む

あの世へのガイド僧侶が先に逝き

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

曲がるたび道がだんだん狭くなる

持てる者の悩みをまたも聞かされる

プラトニックラブも遺影に眠まれる

お局のお臍はきつと曲ってる

オスブレイいわし雲裂き怒を踏んで

恋をする女の心熱れてくる

久司

温子

悦子

美恵子

章子

嘉子

みち子

信子

敦子

三郎

勢津子

澄枝

華蓮

正雄

菜美

一眸

和代

はるお

遊子

公弘

頑張れと言わず手首のキズ見せる
エンディングノートへ言葉選っている
帰りたい老母は手首を離さない
恋歌はやはりシャンソン越路だろ
曲がり角いくつも過ぎて恋実る
卒業をしたはずなのに次の恋
フェルメールの青に恋してしまう秋
市長より社長が似合う市長さん
感動は私の無形文化財
鼻曲がる程のくさやで酒交わす
恋女房いても男は火を好む
曇りガラス恋一片が透き通る
大胆に私をさせた恋敵
老いの恋五千ピースに閉じ込める
イケメンの医者到手首の不整脈
人生は螺旋階段落ち着いて
夕焼けを母と歌った曲り角
環状線まわったままの恋である
不機嫌な妻は手首で返事する
基地無けりやオスブレイ等来ない筈
日日好日只今傘寿通過中
信念が曲がりはじめた吉備団子
財産は子供三人仲が良い
通せん坊したみちゃんも古稀祝
難病へ希望の持てるiPS
木犀が恋の香ふと提げくる
恋しくて恋しくてなお愛しくて

信二 恵子 敏子 勝弘 和雄 篤 紀乃 峯二 鈍甲 秀夫 大気 柳弘 花笑 穩夫 たかこ 紀雄 生枝 和代 忠昭 隆昭 清山 一志 直子 のぶ久 たもつ 宏 祥昭

持つべきは友だ朝まで泣いてくれ
キューボラの街で小百合に恋をした まつお
はびきの市民川柳会(大阪)徳山みつこ報
節水と節電の夏耐え忍ぶ
追伸に水のおいしい町と書く
水に流せと言うがあの日のご雲
スイスイと新車で走る雨上がり
畦道を誇るかのよう彼岸花
始めから乗り気ではない生返事
ワインからポリフェノールを取ってます
点滴はぶどう糖液ドリンク剤
ぶどう酒になったかたのかなぶどう
葡萄酒のグラス話をまるくする
百歳のお顔のシワが良く喋る
顔負けするだけ心は美人です
顔だけで人を判断できません
当選の顔は涙でくしゃくしゃだ
経験を積んだ顔ですぶれてない
見詰めてもボーカルフエース読み切れず
しみ皺たるみ朝の鏡は容赦ない
七十億たつたひとりの顔を持つ
顔洗うきょうもい日であるように
母はちいさく成ったけど母は母
ママなんてよばれたくない未婚です
ハミングでママはしゃいでの給料日
泣き声でママと話をする赤子
克己 まつお フジ 扶美代 いさお 淳介 美喜 泰子 喜久子 久仁子 登志子 美代子 ヨシ枝 かつ美 雄太 敏 猥 沓 佳代子 ちづる ダン吉 みつこ アヤ子 千鶴子 高鷲 庸佑

どこいしょ背筋を伸ばしきあ行こう
八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報
思い出がおいでおいでと嵯峨も秋
子を守る捨て身の母は神がかり
幻にしてはならない拉致の子等
呪い杉叩き込まれた五寸釘
瓦礫野に血潮の痕か彼岸花
指定席座ったのが運の妻
テールを叩く手正論を語る
幻のままに卑弥呼は置いておく
叩かれ方がうまい一匹冬を越す
愛憎を仕分け出来ずに陽が落ちる
イメージは鳥になつてる車椅子
お誘いがないので布団叩いてる
寄附なしでiPSも育たない
ふたり居て心淋しい秋の月
語り継ぐ神話の中にある炎
幻の原発日本たんとある
叩かれて叩いて一生涯阿吽
豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報
泣きながら歩いた道もおししい
増税の小槌振りつつ予算組む
終電車窓に手を振る初デート
忍耐が明日の幸運引き寄せる
古新聞見つけて止まる大そうじ
和子 賀世子 一風 寿之 高鷲 壽峰 清 賢子 草風 耀一 華 朝子 扶美代 晶 加央里 森子 紀雄 欣之 郁子 義雄 肇 庸佑 かずお

軸足を変えて取り組む趣味の道
新聞も輝く日本ノーベル賞
振られても一押し二押し三に押し
妻は空気と思ひながら喧嘩する
墓作の話ごはんを食べながら
松茸のすき焼きですと換気扇
アリア聴きながら夕食考える
手仕事がないと聴かないクラシック
振られても振ってやったと負け惜しみ
新聞だけは見放しはせぬ老人も
マドンナにイメージ重ねる吾亦紅
揺れながら器用につける付け臆毛
貧乏神出雲へ行くと金渡す
木屋の風の誘いに振り返る
新聞紙あれば邪魔だし無きや不便
エリートが昼の小石に蹴つまづく
生きながらあの世の事を模索する
玄関のチャイムが嬉し長電話
天高く私はすっかり肥える秋
川柳にノーベル賞のない不運
生も死もわきまえないがさりながら
新聞を開く文化の風が舞う
落としどころ考えながらする喧嘩
めぐる運変えようのないブーメラン
新聞を見ながら味がわかるのか
型どおり末筆ながら折られる
盃を伏せて後ろは振り向かぬ
うそほんと先は新聞透かし見る

千代 志津子 健二 比る志
玲子 歌留多 美津子 美津子
行兵衛 佐和子 弘之 千恵子
幹治 美佐子 徹 堅坊 紀子
玲子 則彦 求芽 美智代 見清 久子 満子 耕治 幸雀 巴子

自分だましながら渡った橋がある
どの運もつつしみながら受け入れる
川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報
元気で逝くように歩く山登り
生きているご褒美だろう花吹雪
はらはらと散って静かに幕を引く
アイラブユー心臓とまりそうになる
すぐはげる表紙になる人の道
愛されていたんだボロボロの表紙
内容の余韻をのこす裏表紙
日本の表紙は富士山だと思ふ
罪状が並ぶ男の表紙裏
蹴蹴く小石に前を教えられ
酒が飲みたくて生前葬にする
叱られる前にご免と言っておく
匙投げる手前で神に導かれ
前例を引いて問題こじらせる
建前はいらぬ本音で勝負する
一歩でも前へ彬の道辿る
どう見ても一人前のおばあちゃん
目の前にあっても捜すのが日課
確かな前からのその伝言は
レベルに差が有りすぎ前を走れない
川柳大阪 森松まつお報

葉子 千枝子 好男 泰女 ほか 寿子 佐一 大輪 俣子 保州 緑良 和香 夕胡 よしこ 紀子 准一 富美子 ダン吉 徑子 英子 克子 翠子
美花 一風

苦勞して鈍い夫を支えてる
横文字に反応鈍い同世代
手と足がなかなか上にあがらない
食糧難そこまで来てる鈍い国
あの時の鈍さ加減に今気付く
鈍いとは思っていない竹とんぼ
鈍いなあ私の気持OKよ
痛み分けいう案ならば受けようぞ
いい案は酒を飲まなきゃ出てこない
瓦礫処理何か名案ないですか
一日一善重ねて極楽行くつもり
名案と夜に思つて朝しほむ
未熟者父は涙で叱りつけ
未熟さを腰低うしてカバーする
未熟児を三人産んでメタボ腹
百まではまだまだ未熟いっぽずつ
幼き子つばみもぎ取る世の乱れ
未熟から鍛えて強い牛にする
肉じゃがが煮くずれるのはしかたない
もう少し時を下さい木守柿
ブレイキが利きにくいですバイキング
期待した名月台風邪魔をする
何かある反対リーダーいま賛成
城北川柳会(大阪) 近藤 正報

五月 善純 芳香 彦太 喜楽 笑風 功 一步 勝弘 紀雄 川童 いつみ 柳昌 堅坊 和 美世子 温子 鉄心 まつお 柳弘 柳かよこ 照月 司 正報 和夫 素雲鶴 直樹

どうにでもしてと女は酔うたふり
 エリート顔で並んだ自家野菜
 ひまわりはエリートわたし月見草
 コスモスの迷路でそつと肩抱かれ
 笑つてくれ言葉は何も要らんから
 エリートでないがたつぷり人間味
 息継ぎの酒名月を掬いとる
 湿っぽいドラマだったわお別れね
 大胆な筆のタッチへ魅せられる
 酔うまではとても立派な方でした
 なげなげと拉致の迷路で母が泣く
 列島を絞れば湿気溢れ出る
 蒼天に心も弾むワンショット
 エリートが結局国をわやにした
 除湿器も加湿器もあるうさぎ小屋
 未完成のあれやこれを積んでる男
 呑んだ時だけ大胆になる男
 木洩れ日のベンチ暫しの小宇宙
 すいすいと人は行くのに僕迷う
 大胆な間違いだれも気がつかず
 天高く医者梯子で忙しい
 二人なら迷路も楽しくくれんば
 大胆な行動皆が目を見張る
 惚けぬよう今日も日記を書いている
 直球で勝負をしますど真ん中
 滝の音辿って行けば出る迷路
 エリートと無縁孤独なガレキ処理
 エリートは諸刃の剣の上に立つ

仁 寿子 克己 あさ子 堅坊 朝子 柳弘 ばつは 賢子 義昭 正子 縣作 満作 宏 麗 美智子 倫子 志華子 一歩 たもつ 秋香 ルイ子 弘風 郁夫 千恵子 隆男 集一

たたきあげエリートにないと根性
 気弱だが開き直ればずぶとさも
 無駄足を踏んで出口が見えてくる

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

焦りから一言文句多くなる
 嘘ついた目が動いて焦つてる
 することもないのにいつも焦つてる
 筆先が心の焦り知りつくす
 つい眠りまた眠りいま元の駅
 つけ睫毛忘れ大泣きした映画
 胸襟を開いてからの四苦八苦
 二次会の油断マル秘を喋り出す
 油断している女にもある魅力
 シンブルで油断のならぬ冷や奴
 ぼろぼろと泣いて男を油断さす
 童宮でちやほやされておりました
 いわずもがなを言つてしまった長電話
 バチンコに夢中幼児は天国へ
 大丈夫や言つたとんにすつてんこ
 油断した兎は亀を師と仰ぎ
 ハワイ土産中国製のアロハ買う
 マネキンに似合うスーツを試着する
 ハモつてる伸び伸びとしい音色
 石ころも段差もみんな命取り
 焦らないリズムで今日もすべり出す
 日記帳イニシャルひとつ消し忘れ
 澁刺と野良仕事するいい嫁だ

武彦 勝弘 正 唯教 椒子 世紀子 和好 和幸 五月 和夫 清 像山 愿 敏治 扶美代 千代 としお かりん りつえ 竜之介 雅明 のん子 明子 篤子 日の出 舞夢

二日酔い迎え酒して尚えらい
 セクハラで二回捕まつてる教師
 ひと時も油断は出来ぬ基地の町
 靴履いてまだかと夫待つっている
 焦つても多寡が知れてるどんぐりよ
 羽目はすず飲べえですがいい男
 男一びき油断は見せぬ浅き川
 一行のズレに気付かぬカンニング
 豆ほどの島が軍靴を呼ぶ不安
 笑顔だが油断できない顔してる
 味方から背な狙われていた油断
 騙されんようにここにに油断せぬ

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

足腰は秋だがころだけは春
 朝の冷え掛ける蒲団が厚くなる
 木犀のほのかな香り秋を知る
 秋ですよ栗飯供え紫苑立て
 さよならの椅子に残してきた痛み
 百万年疼き続ける核の傷
 同級会心疼いた人も老い
 豪雪でこの村の冬疼きます
 原発に心も疼く土地砂漠
 古傷が疼いて秋の夜が長い
 疼く歯を夜通し冷やし朝を待つ
 老人会死ぬる死ぬると楽しげに
 楽器がなくても鼻歌うたえます
 目の前のことを楽しむのが特技

澄空 健吾 光 さくら 半銭 冬虹 ばつは 時雄 誠一 玄也 朋月 天笑 完司 和子 貞子 智恵子 美ツ千 石花菜 由紀子 次男 美代子 醉美蓉 英子 賀寿恵 風露 茶子

赤トンボ稲を刈るのはコンバイン
ケンケンパッまだ葉々とスキップも
リフォームし帰り待つ夫天国に
急がねばリフォーム要す脳の中
リフォームの家は持つても身はまたぬ
リフォームをしたい脊髄変化症
出来るならリフォームしたい延びた脳
夢託しリフォームいつか古い準備
リフォームと聞いてタンスが騒ぎだす
秋彼岸遅れてごめん彼岸花

京都塔の会

樹本

宏子報

喜美子 萩江 日出子 けいこ 康子 重忠 祐子 恭子 悠彦 照彦

葉と花がかばい合つてる咲いている
修復をさせたい僕の肖像画
徳のある国だと祖国の位置思う
頑張らないとできないことはもうしない
正直に言うことだけは避けている
事故多発雷神さんより怖くなり
幸せの問い合わせ先わからない
秋の風囀の輪から避けられる
一本の松がかばつた被災の地
すぐかばう女の傍に坐つてる
先送りした問題に攻められる
秋がない好きなブラウス出番なし
ひとつの嘘かばつてくれてかぶる罪
問わずとも妻の御機嫌すぐわかる
節電より自分かばつた昼下り
逃避行するほど元氣金もない

求芽 則彦 輝美 かずお 啓子 森生 英旺 弘之 昭 泰夫 葉子 益子 文代 万紗子 宏子 満子

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

日当を貰う愛国心のデモ
押し問答やめて大人の柔軟さ
福の神わたしを避けているらしい
氣象庁に何度問うても熱帯夜
根つからの悪ではないと友庇う
デッドボールかばつてつ飛びヘルメット
性分が合わぬ相手も目を逸らす
消しゴムで消せない過去のある自分
大穴は家計の方ですお父さん

牛延 綾子 福子 庸佑 肇 欣之 鹿太 ますお

なぐさめの言葉が傷を深くする
夜の底胸の古傷痛み出す
古傷が父逝つてから暴かれる
憎しみの傷も過ぎれば美しい
いじ悪が引つ張り出した古い傷
傷痕を見る度今も悔やまれる
同窓会赤シャツもいたマドンナも
Yシャツを捨てて第二のマイウエー
夫なら三枚買える孫のシャツ
出直しのシャツにばかりつときかす糊
小春日の窓辺源氏を斜め読み
火柱をじつと押さえている無言
こたつからふやけた猫が顔を出す
寒い日は論吉を五、六枚撫でる
百日紅咲くと玉音ふとよぎる
元氣出せと天から父が叱つてる
料亭の高い値段も孫となら

希久子 楓葉 舞夢 みつ子 日の出 げんえい 恭昌 浩二 すみ子 富子 千歩 集一 眞澄 蕉子 照子 志華子 公平

川柳さんだ(兵庫)

堀

正和報

幸せは心で作るバラダイス
しつこいで封印してる過去がある
雨露も天の恵みと感謝する
美しい汗を掻いているボランティア
反論は他人行儀になる言葉
身の内に音なく燃やす彼岸花
幸いに喧嘩相手に恵まれる
五十年無口と多弁同じ屋根
四人の父母送つた友の満ちた顔
秋を染め翡翠低く水に翔ぶ
継ぎ接ぎの愛を捨てずに老いてゆく

善之 弘子 知之 満作 正義 捷也 紀彦 滋彦 昭

お元氣ねお歳の割りには言わず
通帳は見ているだけで使わない
おまけです山の空気と青い空
健康がおまけと言つた母でした
休めない主婦の仕事に感謝状
長生きの褒美句会とバイキング
秋の雲ふわり私を案内する
居酒屋の友が恋しい休肝日
松茸の薄さを競う土びん蒸し
癌告知あとはおまけで生きのびる
おじさんおまけにスキップしてみよう
ゆつくりと残る時間に灯をともし
にんまりと見てるメールの息遣い
ウイスキーとお揃いになるグラスです
地獄八景小判が好きなエンマ様

哲男 章子 キヨミ 順子 宣子 淑子 一子 真由 朋月 光久 ひとみ 美和子 耕治 菜々子 靖鬼

束の間の休みを妻がこき使う
 おまけだけ欲しくて買った不要品
 ビーマンの辛しのような君が好き
 携帯に管理され今どこですか
 誕生日だけのケーキで盛り上がる
 円満な家族にケーキ買う至福
 iPS夢とロマンは無量大
 一歩ずつ休みながらも八合目
 おこしやす金の話は無理だっせ
 畦道に案山子がひとり骨休み
 休耕田尾花コスモス咲き乱れ
 役に立つおまけの多い夫です
 被災地に届けと願う復興費
 夫婦しておまけにつられ並ぶ列
 時間差で猫とおやじの朝帰り
 来週は風邪で休むとへば教授
 ご勘弁原発事故のおまけなど
 iPS髪も再生出来るかな
 口答えこししばらくはしていない
 枝豆もビールも黒がうまい秋

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

武彦 喜代子 裕美 健二 俊昭 雅司 弘子 寛十郎 幸香 喜久子 雅尚 清司 廣子 しき 一泉 好文 忠 正和

前を行く影も間違はなく私
 正直者前ばかりみて裏がない
 盛衰をポスターに見る映画界
 世知辛い世にポスターが耐えている
 私でもアイドルが居て部屋に貼る
 釣った魚話すたんびにデカくなる
 手紙書く願う要件大きな字
 大皿に新米にぎり飯を盛る
 あとひとつ大きな丸が欲しくなる
 採ったぞーでかい黄金ホウキタケ
 故郷のもっと大きかった小川
 大ボラを吹いて男が小さく見え

西宮北口川柳会(兵庫) 藤岡

りこ報

幸子 菖子 圭一郎 一粹 和子 節子 幸安 はるお 清帆 重忠 くにこ 美恵子 千津子 じろう いわゑ 素雲鶴 秋果 勝弘 千代 キヨミ 伯備 朋月 ひとみ 盛夫 美津子 直

焼けばつくい燻るだけで火はつかぬ
 ぼろぼろにされた女を憎めない
 五目鮎金糸卵も母の味
 てっぺんに立つと忘れる足の位置
 エプロンが女の朝を奮起させ
 人徳が光る男の燻し銀
 最後かもとまたまた続く老母の旅
 よく食べてよく寝て明日は笑顔する
 ぼろぼろの字引が僕のパートナー
 国有化燻る領土燃えあがる
 行楽の秋弁当持って梨狩に
 ぼろぼろになった靴への感謝状
 ぼろぼろの心救った妻の笑み
 あの辺でたしか燻って迎える予算
 腹かえ笑って明日を迎えたい
 いじめのあったクラスにもあるクラス会
 ぼろ家でも住めば都と慈なし
 そろそろと感謝日記を始めよう
 注ぎ足したビールに愚痴が溢れ出る
 速達で来た明日への誘い状
 通リゃんせ惚けたふりなどたまにして

岬川柳会(大阪)

八十田洞庵報

茂 忠 奮水 美龍 折杭 嘉代子 弘子 毅 浩司 武臣 光久 千賀子 冴子 遼子 宏造 光子 玲子 敏夫 哲子 義子 和美 寛 圭子 清一 澄恵

梅ちゃんと同じ昭和をかけて来た
節電であせもができて医者通い
首ひねり行ったりきたり物忘れ
こおろぎも秋を呼んでるむせる夜
今日こそと思えど身体付いて来ず
朝の路光るつゆ見る心地よさ
手切れ金無くて今ある金婚式
尖閣で時代の波間に消えちまえ
夏風と秋風よせてすきゆれ
メダルとる涙笑顔にもらい泣き
天の恵にお返ししよう献体に
隠し味と味足して食を呼ぶ
民主から維新へマスコミはしやき過ぎ

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

助けたり助けられたりしてこの世
助けてと動物たちも里へ出る
こっそりといつも助けてくれた母
助けてと言わぬが友の目が語る
悪いとこまでも似てきたあ夫婦
見返りを求めぬ援助美しい
是非もなく支え合ってる老い二人
助けてと言えは可愛い人なのに
ノラ志望なのに鎖がはずれない
手の届くところに自分置いておく
ひと言の助け流れを変えた川
皮下脂肪の放火は許しますどうぞ
助ければ又航海の夢をみる

恵美子 智子 年子 茂平 富美子 桜琴 治 覚庵 洋子 和香 洞庵 令子 貞夫 房子 いわゑ 昌紀 久仁雄 光久 たもつ 加お里 美智代 扶美代 千代 希久子 義子 智恵子

傷ついた心に秋の陽がぬくい
ちよつと首かして風をやり過ぐす

川柳塔まつえ吟社(鳥根) 相見 柳歩報

母よりも少し遠くに飛んでみる
遠い日を甦らせた赤トンボ
余白にはまだ遠い日と書いておく
遠い日に引きもどされる鯛雲
一瞬で遠く離れ大津波
遠耳へ金木犀がよく香り
遠雷よ人の噂は気にしない
リヤカーは昭和の飢えを知っている
リヤカーで疎開の荷物乙女の日
リヤカーを引く夕日に染まる母の顔
リヤカーの後ろ幼い恋芽ばえ
リヤカーで夜逃げしたげなその昔
バスタブの中でカッパに進化する
良い方へ進むサイコロ振ってみる
しんがりは後ろ気にせず進むだけ
これからは遊び心で進みます
進む道選べぬ時代苦学生
大笑いしたので少し進もうか
努力して進んだ道に花が咲く
進むほど風は優しくしてくれる
大風呂敷広げる顔をあきれ見る
若い母幼児虐待あきれ果て
入れ歯ごと飲んで胃袋あきれさせ
眉半分描いたところで考える

みつ子 楓楽 寿代 たけし ゆき 孝亮 涼子 千里 久枝 湫丘 幸子 芳恵 草庵 昌枝 芳山 知恵子 桂子 ちえこ 青帆 博子 久絵 柳歩 注湖 長吉 左余 畔

風呂上がりすっかり眉のない女
眉を引く下弦の月に似せてみる
太い眉一世一代網羅する
恋愛運上がる眉など描いてみる
ママになる眉は菩薩のように引く
いい顔だ今日も眉毛が笑ってる

六甲川柳会(兵庫) 伊勢田 毅報

あかね雲神話の中にいるような
信じよう約束まゐる大落暉
無骨だが飲めば陽気な芸達者
卒寿でも道半ばだと芸の道
無芸でも愛想笑いをひとつ持つ
顔いて聞き流すのも芸の内
DNA見よう見まねの芸達者
一芸が我が老春をかきたてる
ものづくり日本の誇るお家芸
幸せを契り苦勞を共にする
神前で誓った契り成田まで
困難の中の契りで咲いた花
森永のチョコが御縁で今があり
ペタンと自慢するけど古いだけ
ペタンと言われた友が遠ざかる
ペタンはこたわる財布持ち歩く(興)
ペタンのわざにみられおのれ知る
ペタンの経験談が為になる
ペタンと言われてそつと手直しす
ペタンは気配りしてもさりげなく

禮子 幸代 民子 聡美 美智子 町紅 いわゑ 光久 美恵子 ひろ 宏造 淳 朗 弘子 和宏 盛夫 妙子 実夫 弘 茂 繁義 邦子 武臣 康子 忠貞

町工場ベテランの技光つてる
 ベテランが次の世代を育んで
 白髪と皺がベテラン醸し出す
 子育てのベテランだった母を抱く
 裏話裏めて煽てて本音聞く
 いつまでも燃やしていたい学びの志
 片付いた部屋であれないこれもない
 前頭葉と相談したいことがある
 わくわく感大事に今日も生きている
 素っぴんに朝の鏡が狼狽える
 陽の温み抱いて蒲団は母になる
 もう一人自分に出会う遍路旅
 人生のベテラン百歳の笑顔
 恵まれた人も無い物ねだりする
 ふるさとを語れば胸の鈴が鳴る

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

照子 浩司 政一 千賀子 保雄 ひとみ 登美子 博史 利子 武彦 和郎 文子 能子 みつ子 楓楽 雪菜 洋子 柳明 美也子 初音 幸香 寛十郎 龍 美代子 よしひさ 楓花

青いシャツ着て心浮き浮きデートです
 脇役の渋い演技に支えられ
 あの世での辛抱まではいやチーン
 利きすぎたノリが背中を羽交い絞め
 涙など見せず苦勞に耐えた母
 味よりも可愛いあの娘が人をよぶ
 雲ふわりひとりぼっちの秋の部屋
 毎日が日曜三食が仕事
 焼鳥屋自慢は炭と渋うちわ
 聡明な額にほんとたまされる
 どうせ出す割り勘すつと出てこない
 口こみで行列できるラーメン屋
 好き嫌いちゃんと出ている車間距離
 駄法シャツが似合う男の秋祭り
 身替わりのシャツを一枚頂こう
 熱燗で今日の怒りが風いでくる
 白シャツの衿立て今日も凛と生き
 ネクタイを知らないシャツが幅きかす
 面壁九年だるま不倒の修業する

川柳ねやがわ(大阪) 龍島 恵子報

あかり 純 見清 靖鬼 五月 泰子 ヨシエ キヨミ 勝己 ひとみ 健二 朋月 かずお 野薫 菜々子 祐康 和子 哲男 淳 寿子 弘風 さち子 修 茜 かつみ 郁夫

場を踏んだ強み着地にぶれがない
 嘘ひとつ伏せて男と向かう膳
 秋祭り母の押し寿しもうこない
 思い出をたつぷり食べる誕生日
 母にしか出来ない旬の味がある
 私がどこにも居ない鳥獣図
 ふる里をはつくり食べるむかこ飯
 被災地も同じく青い空ですか
 後継ぎに仲介器量が試される
 ゲタ投げて賛成するか考える
 風向きに反対できぬ風見鶏
 我が娘にも食べさせる夢巡る秋
 だんだんと祈りの深くなる老後
 大胆にミニスカートをきかくし芸
 脳なしのキャリアが上について困る
 賛成も反対もせぬ秋の天
 食べるため何でもやって青テント
 冬が来る前に渡るう丸木橋

いずも川柳会(鳥根) 佐藤 治代報

喜八郎 仁 一風 博泉 仁清 朝子 賢子 亜成 秀雄 弘一 麗 尚世 鈍甲 祥昭 忠央 恵子 茂美 喜子 博子 妙 靖万 あきら 健柳 桂子

黙もくと働く老いの背を学ぶ
さわやかに負けて言い訳などしない

志げる
寿美

ベラベラの中に人柄浮いてくる
戦争に負けた軍歌がいとおしい

幸子

監督の荒い言葉の裏に愛
良い事が重なったから喋りだす

煩惱児

学び舎の跡にススキが遊んでる
木造の学び舎だから情がある

夢生

荒い声聞くとどきどきしてしまふ
ベラベラと喋る訛があたたかい

まこと

一族の期待を背負う庭の松
メーキャップ少し学んで若返る

美江子

失敗して学んだ事は忘れない
荒縄で縛り離れぬ愛がある

美千代

荒海へ叱られそうな愚痴をはく
負けてから裏も表も見えてくる

熊四郎

荒くなる息を抑えて生きている
一坪の庭にも四季の花が咲く

歌子

三本の矢から学んだ和の力
荒れていた海を鎮めた子守唄

敬子

負けて勝つそんな世間甘くない
気の荒い人がこっそり泣いていた

孝亮

荒いでる声に同情してしまふ
介護から学んだ知恵で母を見る

玲子

負けそうな松はつべんから枯れる
なにくそと思うがこの場負けておく

多喜

学ぶこと出来ず歴史は繰り返す

章峰

手仕事の母にやさしいラジオです
初給料で買ったラジオがよく聴こえ
ラジオ提げて一万歩ゆく秋日和
寒い夜はラジオを眠りの友とする
ドロボー避け私を守る深夜便
ラジオから聞いた献立膳の上
ツアーバス行きも帰りもよく喋る
行ける日もあろうか月までのツアー
宇宙ツアー目指し体力鍛えてる
ウエイトを気にしながらのグルメ旅
ぐい呑みをひとつ土産に買うツアー
楽しみな昼の松茸紙のよう
健康に体操してるけど肥る
粗探しが出来るメガネを変えてから
バスツアー一同秋の貌で乗る
終点の人生の旅穏やかに
金色夜叉明治も今もある話
へそくりがあると優しくなる不思議
にこにこしたはる小金ためたはる
あの時の金の卵が社を背負う
金はないただ一行の遺書を書く
金魚のふんブツブツ切れる維新党
金塊の上でうたた寝してた夢
よろしく不金の成る木に水を遣り
金よりも命が大事原発ゼロ

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

婦美枝 扶美代 龍一 悦子 昌子 シルク 雅枝 いさお 瑠美子 喜代子 アヤ子 美代子 榮 惠美子 清之 夏子 六枝 絹枝 一歩 ちづる 光男 登志子 紀雄

美子佳吉川柳会(鳥取)(前月分)渡辺多美子報

尖閣もオスブレレイにも眠られず
次々とアクマが叫ぶこの頃は
戦争が孫の代にも尾を引いて
情けなや猛虎が猫に成り下がり
キンコンカン丘の教会父母がいる
飼いだにおどけて「いないいないバア」
メイドインチャイナ着るのがためらわれ
母の日に自分にキーキ妻は買う
正二 登美枝 多美子 ひろし 宏之 礼子 公一

事務所便り

毎月事務所へ届く「川柳塔」誌への
投句原稿は、枚数にして約二千枚余り、
そのうちの「自選集」「各地柳壇」そ
の他依頼原稿等は24日着締め切りで、
それ以外の原稿は15日迄に届いたもの
を、課題毎に仕分け16日に各選者宛発
送致します。

それに間に合わなかった「川柳塔」
と「水煙抄」に限っては、翌月号に「前
月号」としてそれぞれの欄の巻末に掲
載となります。

尚、FAXでの投句は機器の機能の
関係と、文字化けの懸念で受け付けて
おりません。ご了承下さい。

第33回 ときせん賞作品募集

作 品 雑詠 2句 (未発表作品)
 選 者 大野 風柳・森中恵美子
 河内 天笑・赤井 花城
 平山 繁夫
 締 切 1月21日(月) 消印有効
 応募方法 便箋B5サイズに作品2句
 郵便番号・住所・氏名・電話
 番号・所属柳社・詩友、詩友
 外の区別を記入
 応募料 1000円 (定額小為替)
 切手不可
 応募先 〒675-0019
 加古川市野口町水足1160
 岡田 篤 宛
 時の川柳社

川柳・明日香

創刊18周年記念 全国誌上大会

課題と選者 (五人共選)
 「 文 」
 佐藤 岳俊・戸田美佐緒・高鶴 礼子
 木本 朱夏・古谷龍太郎
 投 句 2句詠
 用 紙 自 由 (清記します)
 参加費 1,000円 (発表誌呈)
 締 切 平成25年1月31日 (消印有効)
 賞 合点10位まで呈賞
 発表 「川柳明日香」平成25年4月号
 投句先 〒369-1102
 埼玉県深谷市瀬山21の9
 てじま方
 明日香川柳社
 TEL・FAX 048 (583) 3093

第3回 高田寄生木賞

選 者 樋 口 由紀子 (兵庫県)
 木 本 朱 夏 (和歌山県)
 渡 辺 隆 夫 (神奈川県)
 梅 崎 流 青 (福岡県)
 野 沢 省 悟 (青森県)
 作 品 2句 2012年に作句されたもの
 「B5判用紙使用」
 (既発表・未発表問いません。時事
 雑詠・題詠・印象吟・サラ川等、
 また他の賞を受賞作品でも可)
 ※投句されました作品は氏名入りで、
 全句発表誌に掲載します
 会 費 1000円 (発表誌込み)
 現金または郵便振替
 「川柳触光舎」02240-8-82005
 締 切 2013年1月31日
 (2012年11月1日より受付開始)
 投句先 〒038-0004 青森市富田2丁目7-43
 野沢 方 川柳触光社
 大 賞 1名 川上三太郎直筆色紙(額入り)
 特選賞 (各選者特選)
 秀句賞 (各選者秀句)
 発表 「触光」32号 (2013年6月号)

第62回 西大寺会陽川柳大会

と き 2月11日(月) 10時開場
 ところ 西大寺ふれあいセンター
 岡山市東区西大寺中2-16-33
 TEL 086-944-1800
 (赤穂線西大寺駅より徒歩7分)
 会 費 1500円 (発表誌・記念品 呈)
 兼 題 各題2句 読み込み可
 11時30分締切
 「調 子」 西 出 楓 楽 選
 「ず っ と」 矢 沢 和 女 選
 「 熱 」 門 脇 かずお 選
 「ぶつかる」 徳 長 怜 子 選
 「しばらく」 前 田 一 石 選
 「 駅 」 北 川 拓 治 選
 「記 憶」 生 駒 聖 天 選
 席 題 (当日発表) 東 槇 ますみ 選
 主 催 西大寺川柳社

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
和 歌 山 三 幸 川 柳 会	15日(土) 12時30分開場 もったいない・夢・演技	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
川 柳 塔 みちのく	15日(土) 17時締切 年忘れ・おいおい・活気	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 ねやがわ	16日(日) 14時締切 哀れ・感激・申告・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	16日(日) 14時締切 予算・土・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	16日(日) 14時締切 賑やか・チャンス・黙る	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 ふうもん 吟 社	16日(日) 10時から 没句川柳供養大会 敗者復活吟・天罰・おかげ様・濃み 転々・火ダルマ・酸欠・ハーレム	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
豊 中 もくせい 川 柳 会	17日(月) 13時40分締切 走る・整理・まれ・自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曾根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
南 大 阪 川 柳 会	17日(月) 13時開場 稼ぐ・なめらか・こみ ドリーム	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松 露 川 柳 会	17日(月) 19時30分締切 宝・今年の出来事・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川 柳 さん だ	18日(火) 13時から 目・風呂・貯める・親しい 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川 柳 塔 すみよし	休 会	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
はびきの 市 民 会 川 柳 会	23日(日) 14時締切 年賀状・旅行・エコ・赤ちゃん	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京 都 塔 の 会	25日(火) 14時締切 法・がらくた・省く	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
川柳クラブ わたの花	28日(金) 9時開場 大根・河豚・筆・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

12月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北会 川柳会	1日(土) 13時開場 暗示・セルフ・割引・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	1日(土) 14時締切 結果・たたむ・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉吉会 川柳会	1日(土) 14時締切 訪ねる・正体・やった	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 な	6日(木) 13時開場 暮れる・湯・相談	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川柳大阪	8日(土) 14時締切 ろう・星・失敗	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 まつえ	8日(土) 13時45分締切 誘う・すねる・劇・リズム	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川柳塔 打吹	8日(土) 13時締切 安全・涙・切る	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川柳会	9日(日) 13時30分締切 思案・無・発つ・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0831 八尾市山本町北5-9-3 土谷耀一
川柳塔 わかやま 吟社	9日(日) 14時10分締切 兼題=止・にぶい・定型 課題吟=アニメのキャラクター	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川柳会	10日(月) 14時締切 まんざら・眠る・がみがみ 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川柳 あまがさき	11日(火) 14時締切 この世・宝・やれやれ・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	11日(火) 13時30分締切 カレンダー・励ます 今年の出来事	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
あかつき 川柳会	14日(金) 14時締切 住む・影・可憐・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳塔 さかい	15日(土) 13時開場 勘定・溝・折句(オタワ)	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
岸和田 川柳会	15日(土) 13時30分締切 十八番・飾る・儂い・ラスト	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代

柳界展望

新日本新聞社賞

しあわせと思うところ
がびたり合う

★尼崎川柳大会は8月25日、140名の参加を得てピッコロシアターで開催。

当日の同人の秀句は
ストレスと夕日満載し
て走る 吉井奈々子
二度の夏未だに瓦礫積
んだまま 前 たもつ

★第35回神戸川柳大会は10月13日、兵庫県民会館にて102名の出席により開催。同人の受賞は次の通り。

神戸川柳協会賞
試行錯誤の窓を開けては
閉めている 山本希久子

★第36回鳥取県川柳大会は10月14日(日)さざんか会館で開催。参加者(投句者含む)170名。同人成績。鳥取県議会議長賞

鳥取市長賞
兄らの列ノーベル賞の
積がある 福西 茶子

鳥取県川柳作家協会会長賞

汚れ目を隠してくれる
おほろ月 新家 完司

★第63回西宮市民文化祭川柳大会は10月14日西宮市民会館で開催。同人の天位次の通り。

何かもふつ切れました
熱いお茶 黒田 能子

★第62回岸和田市民川柳大会は10月21日(日)、100名の参加者を得て岸和田市立福祉総合センターに於て開催。同人成績。

岸川賞
これからもたまに逢お
やと酌みかわす 矢倉 五月

★第64回西日本川柳大会
お祭りだ 柏原 夕胡

は10月21日(日)久米南町文化センターに於て開催。

第一部事前投句は三一五
名。第二部参加者は三〇
三名。同人成績次の通り。

軽々と踏絵をまたぐハ
イヒール 山本 玉恵

いつまでの温い景色か
箸二膳 新家 完司

人間がいるから神は忙
しい 牧野 芳光

★第84回奈良県川柳大会は10月28日、奈良県文化会館で開催。参加者151名。投句20名。同人の秀句。

地球から見れば人間驕
りすぎ 渡辺 富子

★第36回寝屋川市民川柳大会は、11月3日68名の参加を得て開催された。

当日の同人の秀句は次の通り。

山肌を童話の色にする
落葉 伊達 郁夫

あやまつてばかり忘れ
ることばかり 富山ルイ子

ゆつたりと漬かりとろ
けている我慢 藤村 亜成

★あかつき川柳会・鶴彬忌第2回全国誌上川柳大会には619名の参加があった。同人の天位。

腕振って歩けばきつと
来る明日 小谷 集一

太陽を拝んで恥じぬ日
を送る 富田 蘭水

鶴彬句碑は地球の真ん
中に 鴨谷瑠美子

☆第58回河内長野市文化祭で恒例の「川柳展」が10月26日から28日まで開催され同コーナーの「初

めての川柳」教室では同
人の坂上淳司氏が講師を
勤め、短い時間で、分か
りやすくユーモラスに川
柳の楽しさを披露、参加
者の笑いを誘った。

▼計 報▲

池原天馬氏(同人・鳥
取市)は11月9日逝去。
行年83。前田楓花さん他
が告別式に参列した。

▽ご芳志御礼△
○西出楓楽理事長より金
一封拝受致しました。

▽出 版△
◇三宅保州氏(理事・海
南市)は「早分かり川
柳作句Q&A」を出版。
B6判、138頁。新葉館出
版一〇〇〇円＋税。

▽催 し△
○木津川計の一人語り劇
場「無法松の一生」京都
初公演は二〇一三年一
月五日(土)京都府立府民

場「無法松の一生」京都
初公演は二〇一三年一
月五日(土)京都府立府民

お知らせ

初歩教室・担当の鈴木公弘氏は10月25日「急性冠症候群」で緊急入院されました。現在は退院され「治療に近い状態」という診断とのことです。

尚、公弘氏には平成21年1月から担当して頂きましたが、任期は4年ということで、平成25年1月号から太田昭氏に代わります。鈴木公弘氏には4年間ありがとうございました。

誌友の皆さまには引きつづいてのご投句をお願いいたします。

ひとこと募集

同人・誌友にかかわらず投稿できます。

一行14字 20行(タイトルは別)

採否は編集部一任のこと。また原稿は整理・添削する場合があります。

ホール・アルティに於て開催、14時開演。地下鉄烏丸線今出川駅下車徒歩5分。問い合わせ先・事務局 〇七九八・四九一三二二一。

▽お詫びして訂正△
 11月号P51上段8行目、日々好日命日はアンコ餅↓日々好日月命日は

鳥取市 谷津 克也 川西市 堺市 紹介者

両川 砂場 隆浩 洋々 紹介者 奥田みつ子
 河内長野市 前田 洋二
 両川 隆浩 洋々 紹介者 村上 直樹
 西根 弘康 山岡富美子
 両川 洋々 常任理事会 〇11月7日(水)
 田中 幹啓 ①川柳塔まつり・総会の
 評価と反省のまとめ②川
 柳塔チラシの最終確認③
 定例確認事項④各部報告
 ⑤その他
 次回〇12月7日(金)PM13時
 30分

平成24年度 業務分担表

◎太字は部長(部長以外は50音順)

◎アンダーラインは新任者

	常 任 理 事			
総 務 部	水野 黒兎	久保田千代	松原 寿子	
企画事業部	坊農 柳弘	柿花 和夫	片山かずお	
	久保田千代	佐々木満作	山崎 武彦	
編 集 部	木本 朱夏	江島谷勝弘	黒田 能子	
	鈴木いさお	森松まつお		
句 会 部	古今堂蕉子	居谷真理子	森村 美花	
同人誌友部	鶴田 遠野	河内 月子	黒田 能子	
渉 外 部	河内 月子	松原 寿子	山崎 武彦	
会 計 部	鈴木いさお	森村 美花		
発 送 部	鴨谷瑠美子	佐々木満作		
事 務 部	鈴木いさお			

予 告

第37回全日本川柳2013 青森大会
 平成25年6月8日(土) 前夜祭
 6月9日(日) 大 会
 会場〇リンクステーション青森
 (旧青森文化会館)にて開催

平成24年11月現在

編集後記

★顔見せは夫婦第九は違
うひと 薫風

★今月の目次下の古藤愛子さんは、東野大八氏のご長女。過去に水害に遭って資料の大方を失われたり、ご苦勞をされながらも文庫を守られている。見学ご希望の方は左記へ。岐阜県

★十月十三日、作家・評論家の丸谷才一氏逝去。八十七歳。読まずに積み上げたままの本の中に氏の『いろんな色のインク』がある。書評を纏めたもので田辺聖子著『道頓堀の雨に別れて以来なり』も含まれ、氏の博覧強記には参った。うーん、生前に読んでおくべきだったと後悔している。

★十月十七日、石部明氏が

急逝した。氏は現代川柳のリーダーであり大スターであった。方向性は異なるが川柳塔を応援する」とブログにお書きくださったことも。氏には「路郎読本に関する原稿をお願いしていた。氏の路郎論を読む機会が永遠に失われたことを残念に思う。行年七十三。心からご冥福をお祈りします。

★お楽しみ頂いた松永浩一氏の「本所深川を歩く」は前月号で終わりました。現代の東京に江戸の香りが今も漂っていることを教えられた連載でした。

★鈴木公弘氏体調不良のため、初歩教室休載も考えました。しかし楽しみにされている誌友の方も多いことを思い、前たもつ相談役にお願ひしました。ご了承ください。

★十一月十日、川柳塔碑合祀祭法要に参列。今年の合

句会部から

句会部のお仕事。それは川柳塔の本社句会を円滑に進めることとす。一年の兼題、選者、お話の講師を決めることなど。勿論それにつけて、懸垂を書いて頂く。吊るす。受付。司会者など皆さんに協力していただいております。

しかし一番大切な主役は貴方

です。暑い日も寒い日も、雨の日も参加下さる皆様のお陰で、句会は成り立っています。そして選者の披露に大きな声で呼名して頂く。独特の呼名大歓迎です。折角の句会、是非大きな声で一笑いして、賑やかな楽しい句会にしようじゃありませんか。今年の課題は呼名競争にしたい思います。ご協力をお願いします。

(古今堂蕉子)

ひとこと

記者は九名。法要のあと点鬼簿を見せて頂く。最初の頁は「麻生路郎・霞乃」。パラパラと開かれる頁に懐かしい先達のお名前が……。いずれ私の名もその一頁に載る。「俱会一処」の碑が身近に感じられ、温かいものが胸に溢れた。(朱)

霊祭が営まれた。永年川柳塔の同人として活躍され、功績を残された先輩9名の方々は只々感謝の言葉あるのみで、心からご冥福をお祈りする次第である。

◆10月8日に361名の参加で開催された第18回川柳塔まつりでは、新たに29名の新同人が紹介された。毎年のことではあるが、新同

◆一方11月10日には、高野山で今年度物故者の合同慰

(い)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(2月号)地名

市都
道府
道
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「奇妙」(12月15日締切)

2月号発表

奥田みつ子 選 — 共選 — 森山 盛桜 選

B

A

地名

市 都
府 道
姓 雅 号

切らないで下さい

B

A

地名

市 都
府 道
姓 雅 号

きりとりせん

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

2月号発表(12月15日締切)

川柳塔(8句) 小島蘭幸選
水煙抄(8句) 西出楓楽選
愛染帖(3句) 新山盛桜共選
檸檬抄「奇妙」(2句) 奥田みつ子選
一路集(3句) 「うわべ」小西雄々選
「練る」山本希久子選
「アピール」左右田泰雄選
初歩教室「戦」(3句) 前たもつ担当

3月号
檸檬抄「浅い」
一路集「刺激」「夢見る」
初歩教室「くねくね」
「増やす」

本社12月句会

とき 12月7日(金) 13時開場・14時締切
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。―
ところ アウイーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし「台湾川柳会の今昔」
兼題「膝」 森松まつお選
「ペンチ」 籠島恵子選
「充電」 鈴木いさお選
「秒読み」 長浜美籠選
「尖る」 小島蘭幸選
会費 1000円 投句料 500円(各題2句以内)(切手可)

本社1月句会
7日(月) 午後1時から
兼題「あふれる」「ラジオ」「ずしり」
「叶う」「太陽」

第31年度 夜市川柳募集

第7回「解く」阪本高士選
ハガキに3句 12月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇二二年平成二十四年十二月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

発行所 川柳塔社

電話 〇六・六七九・三四九〇番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの

一句を募集します。

兼題

「ごま」川柳塔社主幹 小島蘭幸 選

応募要領 郵便ハガキに2句、郵便番号、住所、

氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。

発表

本紙4月号にて発表いたします。

締切り

2013年1月31日(当日消印有効)

投句先

〒543-0052 大阪市天王寺区

大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

オニザキの

手作りの味わいに
こだわって
五十六年

ごま



株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア (ホスピス)
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>